

軍兵ども追ひついて速に國境に馳行き、押寄する軍兵を追散したる勇士なるが、秀吉の勘氣にて小西行長が許にかくれて、朝鮮にても武勇の振廻せしなり。此度清正寄ると聞き、只一騎城を乗出す。元球が従者福西九郎大夫是も十八の時より、朝鮮の軍にあひて物師なるが、元球におくれじと城を出て馳行く所に、山の上に清正の馬蘭の馬印ひらめきて見えければ、彌進んで、三宅に行合ひ元球馬より下りて、三宅と槍を合せたる處を、福西透間なく走りより三宅を斬る。三宅がつきたる槍を元球握りてつひに引奪ひて、既に危かりしに、三宅が従者元球が冑の眞向を一刀斬付けたり。元球目眩きてくろく廻りながら、刀を抜いて三宅が従者を切倒す。清正茜の三本じなへは三宅喜藏ならん、討たすな者どもと下知せらるゝ詞の下より、飯田角兵衛莊林隼人馬にもろ鎧を合せてかけ來りければ、元球敵つゝきなば、あしかりなんと、三宅をすて、引返す。清正三宅を呼びて、其日被られし羽織に千石の祿を添へてあたへられけり。

又三宅元球が冑をつき落せしかば、頬に手負ひたれども、淺手なれば、三宅が槍に取付たれども、三宅槍をすて、組合ひたりともいへり。

其後關ヶ原の軍破れて、行長生捕になりしかば、清正使を城に立て城を明け候へと云れしかば、城代小西隼人自害して城中の者ども助け給はらんやと申す。清正許諾して、八代の城代小西若狹も自害し宇士八代を清正に授く。清正南條に六千石の祿を與へられけり。三宅と南條と物がたりするに、元球汝を討留すして、殘多しとははぶれしかば、三宅我も生存するなりといひけるとぞ。

三宅宇士にて組みたる時、忽刺殺すべきに、其日指したる小脇差少し長かりし故なりと語りしと云へり。

肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事

清正宇土を圍む時、ある夜敵夜討すべし、なおこたりと下知せられけり。果して杉本次郎介を大將として清正の陣に夜討す。日下部平介阪川忠兵衛槍を合せ散々に攻戦ふ。杉本守固きを見て城中に引返す。田中兵助は酒に酔ひて臥居たりしが、鉦砲の音に驚き起あがり、槍を取てかけ出しに、敵引取り、皆門内に入りて杉本一人大手の柵の木戸口に残り止りたり。田中詞をかけたれば、杉本十文字の槍にて田中を一槍つきて柵の中に入りけり。清正火を燈し軍せし者どもを呼ばれしに、田中今夜先がけしたりと申す。清正能見て、一番は日下部阪川二人の内なり。二人とも箭創有り。弓は槍を合する時射て一同にかゝれば、射がたきものなり。田中が創は右の腕にあり。槍創ならば左の手に有るべし。ことに横に疵のあるは、汝が自ら切りたるにやと云はれしかば、田中敵は銀のおもだかの立物打つたる冑を著、十文字の槍にて杉本次郎介と名乗りたりき。猶偽と思召し候はんには、不幸の至に候とて退きけり。後城明けわたし杉本も清正に奉公しければ、此夜討の事を問はれしに、杉本城に入らんとせし時、とつはいの冑を著槍を提げて走り來り候武者を、一槍ついて候と申す。清正田中が詞證

據に符合しければ、五百石の祿をあたへらる。田中其夜一通の書を殘し、虚名を蒙り世の誹にあひ候程に、加祿に本の祿を添へて返し候とて、肥後を立退きけり。田中は其初盜賊にて有りしが、石川五右衛門といへる強盜の長を、秀吉の時京の三條河原にて刑罪せられしに、道々見物の男女群をなす。田中其中に紛れて、石川を引て過る時に、つと飛懸り、石川が細取を唯一刀に斬倒し、五右衛門に日比の恩に報じ候と呼はり、さわぎひしめく間に、人の中に走り入り、終に逃げ出でける男なり。此時二十六歳とかや。

福島家の士大將東照宮を拜する事

關ヶ原の軍に功有りける諸將の家臣を召して、東照宮御盃を下されし時、福島正則の士大將福島丹波は跋、尾關石見は晴なり。長尾隼人は豊なりしかば、近習の人々能もかたはの集り候とさ、やきけるを聞き召し、汝等年若くとも能聞け。女は容儀を算ぶ事よ。よし形はいかにもせよ、かゝる軍に功名したるを男とはするぞかし。彼三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等志十に二三を彼者に似せたらんは、よかりなんとぞ仰せられける。

加藤清正治亂を論せられし事

關ヶ原の後、東照宮石田が亂は雨ふりて地かたまるといふに同じ。此より靜謐ならんと仰せ有りしに、諸大名皆祝し奉りたる處に、加藤清正、仰せの如く惡逆の輩誅せられ泰平たらん事必然に候。然

ども天下の治亂は、天の陰晴にたとへ候ひなんには、晴渡りたる晴天と見るも俄に雲の出來て、雨うつすが如き事も有るものに候へば、測りがたきは人の心にて候と申されければ、淺からず御感ありしとなり。

但清正の此論、いづれの所にての事なりしや詳ならず。

黒田如水豪氣の事

關ヶ原の時黒田如水は豊前中津に有りしが、九千餘の兵を率ゐ、九月九日打出でて諸所の城ども攻落し、筑前筑後の浪人共相集り大軍に成りし時、嫡子長政の使來り、關ヶ原にて石田をはじめ敗北し、金吾中納言秀詮は長政の謀によりて、裏切せられし由告げられしかば、如水大に怒り、うつけ果てたる甲斐守かな、天下分目の軍は、わざと月日を過ぐして浪人のすぎはひをあたふるものなり。何事の忠義だてぞ。日本一のうつけは甲斐守なりとぞつぶやかれける。其後、長政に筑前を賜はりければ、如水も京に上られけるに、諸國の大名如水の門に來りて市をなしけり。山名禰高如水と年比の友なりしが、如水の許に來りて、諸將の尊崇大方ならず、殊に夜中に密談も候とて、世の疑ふ事も候なり。就中三河守秀康親の如くに敬はれ候。かたぐ徳川殿怪しみ思召す處なり。徳川殿遠き慮ある人なれば、こなたに心安く立入人の中にも、いかなる目附をか設けられたらん。筑前守の武略徳川殿の賞恩淺からず候に、斯ては筑前守の爲に悪かりなん、徳川殿しきりに用心あるも、皆如水を恐れての事な

りと人も申し候。猶又醍醐、山科、宇治に浪人あまた居候も、如水の隠し置きたると人を疑ひ申すなり。いかにと申されけるに、如水聞もあへず、内府を攻亡し天下を取らんと思はんにはいと易き事なり、筑紫をば、皆打平げたり。島津のみ残りしかば、あつかひを懸けて味方とせん。若柄つかば攻破らん事尤易き所なり。中國備前播磨まで皆空國にて有りしかば、我其頃二萬餘の軍兵をひきゐ、加藤鍋島は既に我に隨従すれば、兩先陣として海陸二手に分ち、道すがら浪人どもをかり集めん、十萬はあるべし。清正は猛將なり、吾旅本に有りて攻上る程ならば、内府を討滅さん事掌の中に有りと思えたれども、われ年老いぬ。切從へし國を捨て、京に上りしに、臆病者どものたはげにて、いろいろの事に恐れていふ事を誠と心得られたるやとて、扇をぬいて壘を打つて、大言せられしかば、禪高とかくの詞なくて歸られけり。

卷之十六

浮田秀家八丈島へ配流の事

備前中納言浮田秀家は、關ヶ原の時一萬八千を帥られしが、軍敗れて、近江の伊吹山にかゝり落ちられし。美濃の白樫村にしばしかくれて有りしに、遂に忍びて西國に落降り、薩州に著かれしに、其事聞えて東照宮死罪一等を宥めさせ給ひ、八丈島にぞ流されける。まことに苦ふく庵竹あめる戸に、雨もたまらず風もふせがねば、黒木の柱を削りて書付けらる。

藻汐焼きうきめかる身は浦風のとふばかりにやわぶとこたへん

其後、芳烈公光政備前におはしましける比、兒島一説西の商船風にはなたれて八丈島にいたりけるに、秀家九十餘までながらへて居られしが、故郷の者とて、いとなつかしげにさまざまの物語して、秀家備前には誰か有ると問ふ。新太郎少將と答へ申すに、誰が事ならんとて、家老の姓名を聞きて後、さては池田の家にて有りけるよ。又所々に城多きや、城の北に伊勢の宮を設け置きたるが、いかなるぞと問ふ。伊勢の宮は候。されども士の家ひと相並びつゝ候と答へければ、さては世は治りけり。亂世ならんには、國境の城に士を分ち置き、岡山には士の家多かるまじきに、今の有様にて治まれる趣を知たりといはれしとかや。

われこそはにひ島もりよおきの海のあらし波風心してふけ  
といへる後鳥羽帝の御製を短冊に書き、かの船人にあたへられけるとぞ。

小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は關ヶ原の時、秀家と共に徳川家に弓箭を取られしかども、關ヶ原に自ら赴かざるの故に、安藝備後等の國を削られ、長門周防兩州を賜はりけり。是より前小早川隆景遺訓して輝元を諫められし中に、毛利家五十餘郡を領し、富貴誠に溢れたりといふべし。此より後苟にも國を貪る心あらば、忽滅ぶべきよといましめられしに、輝元隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる露もたがはざりけり。隆景は武勇のみにあらず、智謀にすぐれたり。父元就病重くなりて、其子を集め兄弟の數ほど箭を取寄せ、多くの矢を一つにして折りたらんには細き物も折がたし。一筋づつわかちて折りたらんには、たやすく折るゝよ、兄弟心を同くして、相親むべしと遺言せられしに、隆景其時争は欲より起り候、欲をやめて義を守らば、兄弟の不和候まじといはれしかば、元就悦びて、隆景の詞に従ふべしといはれしとぞ。秀吉九州を討平げられて後、筑前五十萬石を小早川にあたへられしに、隆景これは吾に過ぎたる事なり。此頃まで敵なりし身に、大國をあたへらるゝは、吾を愛するに非ず、九州をなつけん爲のかりの謀よと思ひて秀詮に國を譲り、備後の三原に引きこもられしとなり。

佐竹義宣國替の事並車野丹波が事

佐竹右京大夫義宣の士大將車野丹波は剛の者にて、白練に火の車を書きて指物とす。關ヶ原の亂に、義宣上杉に心を合せられしかば、

義宣四萬の軍をひきゐる水戸の城を出て多珂郡に到る。これ上杉の加勢の爲なり。然れども、父常陸介義重はもと徳川家に心有りしかば、しひて諫められし故、義宣も兵を水戸に返されしとぞ。

伏見にて、義宣の八十萬石を六十萬石削られ、出羽の秋田二十萬石賜りけり。若いなむならば、其儘討亡すべき體なれば、義宣北國を経て、秋田におもむきけり。水戸の城を奪ひとれとて、本多正信等向ひける時、車野組に付けし士六人と俱に物具し、新羅三郎より傳へたる城を人に授けん事こそ口惜けれ。我とおもはん人々は、城を枕に死ねやと呼はり、城中にかけ入りしを、大手にて本多等大軍にておしつゝ、み生捕りて磔にかけ、火の車の指物をくゝり添へけるを、東照宮聞し召し、武家の道を知つたる者を、空しく殺しけるよと歎かせ給ひけり。

駿府にて、東照宮御物語の序に、篤實なる人は世に稀なり。われ年老ぬれども、多くは見す。佐竹義宣其人なりと仰せられしを、永井右近大夫直勝承て、いかなる故にやと申すを聞し召し、石田治部と七人の大名と大阪にて争論の時、義宣と三成ともとよりしたしみ有りし故、三成を打具し伏見に來り、其後三成佐和山に歸る時、七人の面々道にて討取るべしといふよしを聞き、三河守を添へた

りしに、義宣三成を討たせては生きがひなしとて、道々にももの聞を出し、其身は物具して告來るを待ちて打出でんと用意有りしと聞く。是篤實にあらずや。關ヶ原の亂の時も、大阪より頼みたるゆゑ、吾に其よしを告げて何方にも組みせざりき。逆亂に與したるにはあらざれども、捨置難くて先祖より已來の國を削りたりき。篤實のよき事いふに及ばずといへども、國の存亡にかゝるべき事には、又一思慮有るべき事にやとぞ仰せられける。

杉原常陸智勇の事

上杉家の士大將杉原常陸は智勇備はりたる人なり。東照宮宇都の小山より引返させ給ふ時、上杉家の軍兵ども大にいさみあへりしに、杉原獨眉をひそめて、大敵に恐れて引返したりとおもへるは其人を知らざる詞なり。徳川殿諸將をひきゐる先上方に攻上り、石田を討たれんに、十に八九石田敗北すべし。其時殿一人にていかで徳川殿に打勝ち給ふべき。敵國に攻入らずして引返したるは、味方の不幸なりとぞ云ひける。

杉原白石の城を守りしに、いづれの時の事にや、伊達政宗不意に押寄する事あり。政宗の物見の士はせ歸り、敵はしづまり返りて、唯町家に火の用心厳しく呼はり候。物具したる武者杉原かとおぼしくて、城門を開かせ、將机にかゝりて待居たるといひければ、政宗謀有らんと、恐れて引返されけり。

前田慶次が事

前田慶次利大忽々齋と號す。加賀利長と從弟なり。

一説に、利大は、瀧川儀大夫が妻懐胎して離別し、利家の兄藏人に嫁して、前田家に生るといへり。前田の家を立去りて、

利大は文學を嗜みさまぐ、藝にも達せり。滑稽にして世を遊び、人を輕んじける故、利家教訓せらるゝ事度々に及べり。利大大息ついて、たとへ萬戸候たりとも、心にまかせぬ事あれば匹夫に同じ。出奔せんと獨言せしが、ある時利家に茶奉るべきよしひしかば、悦びて慶次が許に來られしに、慶次水風呂に水を十分にたへてかくし置き、湯風呂の候入り給はんやと、横山山城守長知をもていへば、利家よかりなんとて浴所に至る。慶次自ら湯を試みてよく候といへば、利家何の心もなく、ふろにゆかれしに、寒水をたへたり。利家馬鹿者に欺かれしよ引來れといはれしに、慶次松風といふ逸物の馬を、裏門に引立てさせて置きたりしに打乗り出奔しけるとぞ。又京にて夏の比馬を川入にやりけり。馬取の腰に烏帽子を付けさせたり。道にて往來の人立とまり、ふとくたくまき馬なれば、誰の馬にて候と問ふ。則烏帽子を著足拍子をふみて、此鹿毛と申すはあかいちよつかい皮ばかま、茨がくれ鐵甲鶏のとつさか立るばし、前田慶次が馬にて候と、幸若の舞を誦ひて引通る。見る人の問ひし度ごとに、かくしけるとなり。

上杉景勝に仕へけり。

初て目見する時、士大根三本臺に居て出しけり。

朱柄の槍を持たせしかば、何ゆゑぞと咎むるに、父祖より持ち來りしといふ。水野藤兵衛、菲塚理右衛門、宇佐美彌五右衛門、藤田森右衛門年久しく朱柄の槍持たせん事を望み申せども許されず。然るに慶次を制禁なくば、四人ともに許され候へと詛へて許されけり。直江山形に攻入り引返す時、最上義光大軍にて追つかけ、洲川にて軍有りしに、義光旗本をひいて切てかゝり、合戦數刻に及びけるに、上杉勢引取り兼しかば、直江怒つて、われ大將として此口に向ひ、おくれをとる事口惜きよとて、もだへ怒りけるに、慶次馬の前に立ちふさがり、爰はわれにまかせられ候へといひすて、敵味方ならみ合ひたる處に馬を乗りかけたり。杉原常陸は先陣に有りて、種ヶ島の鐵砲を下知しけるが、慶次におり立ちてかゝられよといへば、馬より飛下りたり。慶次其日の出立は、黒き物具に狸々皮の羽織を著、金のいら高の數珠のふさに、金の瓢箪付けたるを襟にかけ、山伏頭巾にて十文字の槍を持ち、黒の馬に金の山伏頭巾かぶらせ、唐鍔かけたり。前田慶次と名乗つてかゝりける處に、水野菲塚宇佐美藤田四人も同じく槍を引提げ、をめきさけんで念なく敵を突退けたるに、杉原種ヶ島鐵砲二百挺小高き所へおしあげうたせし故、物わかれせしかば、慶次下知して引取りけり。

慶次指物ねりに大ふへん者と書きたりしに、人々あまりの事よといへば、慶次汝たちは武邊とよみ

たるや。われ落ちぶれて貧しければ、大不辨者といふ事なりと戯れしとかや。

上杉家祿知削られし後、士多く暇を取りて立去りけるに、慶次を七八千石一萬石を以て招く大名あり。慶次われ此度の亂に諸大名表裡の心見限りたり。景勝ならでわが主君とすべき人なし。扶持し置きてたまはれとて、五百石の祿にて民間に引込み、風月を樂しみ歌學に心を寄せ、源氏物語を講じて世を終れり。

出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

上泉主水憲元は、甲斐の武田の家にて劍術の上手上泉伊勢が弟なりほまれ有りし者なるが、京の相國寺の内に落ぶれ身を寄せ居しを、秀吉の時直江景勝の供して京に至りしが、傳へ聞きて對面し、さまざま上泉をもてなし、會津は遠國なれど、景勝三千石の祿まゐらせんとなりといへば、上泉かゝる身に思ひもよらぬ詞を承るとして仕へけり。直江出羽に押し入る時、上泉も三千五百の將たり。最上方には山の上より幡屋まで、二十四ヶ所に出城を設けたるに、直江は眞直に山形にすゝんで攻めとらんと謀りける所に、幡屋より春日右衛門にしたしみある者の、かへり忠せん事をいひおくる。直江悦んで山形にすゝむ兵を押止め、山路にかゝり幡屋によせんとす。軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣を以て幡屋にすゝめ、惣軍は山形に攻入りて、然るべからん。敵我に利をあたへ、嶮岨にそびき入れ、其ひまに山形の要害を能せん謀なりといへども、直江もとより杉原と中よからざれば、我は唯易きに就か

んとて聞入れず。やがて幡屋を取圍み、一時攻に乘破りけり。  
一説に、長谷堂より内通の事をいひ送りければ、直江大に悦びけるを、杉原是は赤松圓心が白旗の  
城にて、新田佐中將を救きたりし謀なり。かくいうて、山形の要害をかまへん謀なり。只山形に攻  
入るにしかじといへども用すして、長谷堂に押寄けるに、内通の事はいつはりなりし故、直江欺かれ  
たりといへり。

其より出城を只一日の中に二十一ヶ所攻落し、さらば山形に押寄せんといふ。上泉が曰く山形は勝れ  
て要害よく西南は沼なり、東北は石壁高く柵の木七重有り、矢倉二十餘所にかまへ、且義光は先祖より  
數百年此地に有り、士卒に物なれたる者多し、力攻には思ひもよらず、所々の小城數多攻取りたるに  
て勇氣を示し、軍を返されん事然るべしと申す。直江あざ笑ひ、軍を出せしは山形を攻めん爲なり、今  
更山形の要害よければとて引退く様やある、汝は淺黄じなへの差物さして、利根川二本木の先陣せられ  
しによりて、關東にてそれを憚りて淺黄じなへを指す者なしと聞きたりしにも、覺えぬ事をいふと思  
りければ、上泉口惜き事なりと思ひけり。直江は進んで菅澤山に陣したり。此處も長谷堂より十九町な  
り、義光も二萬餘の兵をひきゐる山形を出でて、長谷堂の山の尾崎稻荷山に陣す。長谷堂には山形の加  
勢も來り要害よければ、たやすく攻め難し。討つて出での軍は危しと制しけるに、大風右衛門二百計  
にて切つて出で上泉が陣に向ふ。上泉大勢にて押包みあまさじと戦ひけるが、大風僅に打なされ切抜

けて城に入る。伊達政宗も軍を出し、先陣長谷堂の城下に押來り陣を取りたり。直江は大風を討得  
ざる事殘多し、此城を唯一時に打破れと下知し城際に攻寄せたり。直江高き所に打上り石火矢を透間  
もなく打懸けたるに、只千雷の落懸るが如し。志村伊豆鮭延越前こゝを専途と追出しおひ込れ、相戦  
うて其日も戦ひ暮しけり。直江又三千餘を城の後の山に上らせ、鐵砲を打かくれば、城よりも切て出で  
死傷數をしらす。直江軍兵をわかし四方を焼きばたらさす。所々に軍あり。長谷堂の城下に大なる池  
谷を堰にして、水をせき湛へたると覺しければ、物見の兵を遣し、又一陣を以て焼きばたらさす。城中よ  
りひた胃八百計切て出しかば、直江使を以て引取れと下知すれども、ならみ合て引退かず。使も行き止  
まりて歸らざれば、次第に軍兵行重り鐵砲を打合ひければ、直江杉原にとく軍を引上られよと云ふ。上  
泉我こそ行かめといへば、杉原進むは年若き人の業、引揚ぐるは老年の我に協ひたりとて同心せざるに、  
上泉存る仔細の候といひもあへず馬を乗出しければ、組に付けられし大高七左衛門馬を乗付け上泉を  
引といめ、士大將の只一騎にてかけ出るやうやある、有べくもなしといへども耳にも聞入れざれば、大  
高もついたり。前田慶次佐美民部上泉が陣に行き、一陣の大將敵に乗入るをよそひにひかへたるは  
士の本意に非ず、いざかゝられよといへども、進むけしきの見えざれば、前田をけじめ二十騎ばかり  
駆向ふ。上泉大高は馬より下立ち面もふらす槍を打入れ突合ひたるが、念なう敵を突退け引取らんとす  
る所に、政宗の兵三百計横あひより切て懸りければ、上泉兼て直江が詞を怒りたりし故に一足も引ま

じと思ひ定めたれば、又合戦を始め、火出づる計に戦ひけるが敵味方討るゝ者多し。前田宇佐美を始め大剛の者共數度切つてかゝりしかば、政宗の兵三十餘人討られたり。かゝる處に、政宗の士大將石川彌兵衛崩るゝ味方をもち返し、又打つてかゝる。前田已下立ちこたへ、かゝりつ返しつ散々に戦ひけり。直江日も暮れかゝり進みがたし、とく引きとれと下知しければ、上泉心得候といひ捨て、敵に向ひ、上泉主水といふ剛の者打取候へと名乗りかけ、死狂ひに數十人切伏せ終にそこにて討死しけるを、首をば金原加兵衛取つたりけり。上泉三十四歳とかや。上泉主水と冑の眞向に琮嵌にぞしたりける。是より上杉勢亂れ立ちて敗北すれば、義光政宗勝に乗りあますなど追つつむる。芋川縫殿、村上國清四千計横合よりかゝらんと、陣を整へひかへたるを見て、ふみとまりければ、又取つて返し追立て、それより物わかれます。石坂興五郎、蓼沼日向、前田慶次、宇佐美父子物具に立つ所の箭各七つ八つ折かけ、槍は突きゆがめ刀は刃さゝらの如く斬りなし、人馬共般にそみたるが、上泉が組の控へたる前を乗通るとて、各大將主水をすて殺し、をこの交りはなるべからず、大高七左衛門のみ士なりとて罵りて打過ぐるに答ふる人なかりけり。

伊達上杉陸奥國松川合戦の事附永井善左衛門岡野左内が事

慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取らんと、百姓を問者にしておこたりを伺はれたり。松川は阿武隈川の枝川にて伊達領の境なれば、本條出羽守、甘粕備後、岩井備中、杉原常陸、栗生美濃、岡野左内五千計にて守りけり。政宗は國見峠を踰え、信夫郡より瀬の上の川を涉り、五千の兵にて梁川の城を押へ、松川をさして押寄する。物聞ども斯くと告ぐれば、本條出羽城を出で川を渡してや戦ふ、川を前にして半途をや打たんといふ處に、松木内匠敵不意の利を謀りて押寄せ候に、味方川を渡りて待ちかけなば、政宗思ひしにたがひて必引退くべきなり。川を涉らんこそよかりなめといふに、栗生同心せず。此川中窪にて極めて渡す事たやすからず、政宗わたらん處を半途を打に利あらん。岡野いやいや敵大軍なり。爰に待たんは敵を恐るゝに似たり、勇士の志にあらず、とく川を渡して待設けせんと云ふ。栗生、孫子に以て少合衆是曰北といふことあり。小勢にて無謀の軍せんは、大敵の擒とならんは必定なりといふ處に、甘粕備後杉原常陸もはせ來り、まづ物見を出せとて、猪俣主膳、本庄段右衛門、井筒小隼人乗行きて馳歸る。猪俣は政宗川を涉らじといふ。二人は政宗川を渡さん事半時計もやあらんといふ。仔細を問ふに、猪俣敵馬の沓を取らず隙泥をはづさず羽蓋を常の如く附けたりといふ。井筒本庄が云はく、我等見し所も同く候。されども政宗いまだ來らず、其間五六町計もや候はん。政宗川際に押寄せて其支度せんに、何の時刻を移すべき。且小荷駄を遠く引退けたれば、戦ひを持ちたる敵なり。政宗二萬の軍兵を帥めて寄來り、空しく引返すやうや候といふ。さらば川端二町計置いて陣を整へて敵を待たんといふ所に、岡野は切支丹を信する人なるが、南蠻人の贈りける角榮螺といふ冑を著て、眞先かけて川を打渉す。栗生甘粕川を渡るべからずと下知すれども、布施次郎左衛門



北川圖書、小田切所左衛門等二十騎計真しぐらに川に乗入り打渡す。宇佐美民部槍を横たへ、残る兵をば押しとめてけり。かゝれば政宗押來り、先陣片倉小十郎透間もなく切つてかゝる。岡野四百計真丸になりて槍を打入れ、面もふらずをめきさけんで戦ひけれども、大軍に取りかこまれ、左内僅に打ちなされ切抜けて引退く。北川馬の首を立直し小田切に向ひて、唯今討死せん。會津に残し候十四歳なる吾子を囑申すよ。是をかたみに送りてたまはり候へとて、狸々皮の羽織を脱いで小田切に渡しければ、小田切若し萬死に一生を得候ふならば、たしかに送り候べしとて、羽織を腰にはさみけり。北川今思ひ置事なしとて、追來る敵の中に入れ入りて切死にしたりけり。是をはじめとして返し合せ、火を散して戦ひけるが、討たる者多し。政宗勇み進んで追かけられしに、岡野狸々皮の羽織著て鹿毛なる馬に乗り、支へ戦ひけるを、政宗馬をかけ寄せ、二刀切る。岡野振願りて政宗の胃の眞向より鞍の前輪をかけて切付け、かへす太刀に胃のしころを半かけて研りはらふ。政宗刀を打折りてければ、岡野すかさず右の膝口に切り付けたり。政宗の馬飛退きてければ、岡野政宗の物具以ての外見苦しかりし故、大將とは思ひもよらず、續いて追詰ざりしが、後に政宗なりと聞きて、今一太刀にて討取るべきにとて、大に悔みけるとなり。岡野は川へ乗入れたるに、政宗又十騎計にて追かけ來り、きたなし返せと呼はりければ、岡野ふりかへりて、眼の明きたる剛の者は、多勢の中へかへさぬものぞといひて、岸に馬を乗上げたり。宇佐美兵左衛門十六歳松川の向ひの岸にて危く見えしかば、父の民部馬を川に

打入れたり。栗生いかに先には川を渉る者を止められしが、何事に渡され候や。名將の宇佐美駿河守の子息にはいかにと問ふ。民部謀も心より出候。あれ見られよ、一子の兵左衛門向の岸にてはやうたれぬべく見ゆれば、心の亂れたるぞやといひも終らず、川を渉り打連れて引返す。栗生は陣を整へて待ちかけたれば、片倉が軍兵を追崩し、川に追ひひたす。されども大軍見る内に重り攻寄せしかば、上杉勢は福島をさして引退く。福島に至りて行程あなが道十八里なりといへり。政宗何處までもあますなと馬煙を立て、追ひかけしかば、物具を道に捨つる事數をしらず。息きれて行倒れたる者もあり。持槍の長き柄はもち堪へがたくて、多くは捨てけるとぞ。青木新兵衛永井善左衛門を

永井善左衛門は世々徳川家に仕へけり。小田原の城を圍まれし後、いかなる故にか有りけん、蒲生氏郷に仕へ、其後上杉家に奉公しけり。すぐれたる剛の者にて、奥州福島口にても、物見に只一騎出でたりしに、伊達政宗の伏兵六人起りて取包みしを、四人討取つたり。長篠にても太刀打して首を取りたるが、右の指に手負刀を取落せしを、取りたる敵を追詰めて、又討取りたるほどの物師なり。其後其疵を問へば、馬にくはれたりと答へしとぞ。かくのごとく功にはほこらぬ人なり。後御旗本に歸り仕へて、御旗を司りき。善左衛門浪人にて上州深谷に閑居して有りける時、人のあたへし瀬戸の茶入を秘藏せしに、下女取落して打破りぬ。下女驚きてわが鏡臺より五倍子を入れたる壺を取出し、是にてもかはりて奉らんといふ。用にも立たぬものなれども、是を請取り置きぬ。後に小

堀遠江守見て、手を打ちて、是は唐物の肩衝なりと稱美し、後に公に奉りしとなん。板倉勝重懇なりしかば、將軍家に御ことわりを申さん、御上京のをり京へ來られよといひ越されしかば、深谷を出て平安に趣く時、浪人をともしなひけり。名護屋に親族ありて立寄りける隙に、ともなひける浪人已が刀を永井が指替の刀に取替へてかけ落しぬ。永井せんかたなく、京に著きて後死罪の者有りけるに試みんとて、刃を付けさするに、さびて金色も見えわかす。研師刃を付けて此刀の如き刀の刃會て心に覺えずといふ。斬罪の場にてふち身の者有りて切れざりしに、かの永井がさび刀にて切りたりしに、物に障る事なきに似たり。能研ぎて見れば、すぐれたる物にて銘は正宗と切りたり。本阿彌に見すれば、正宗の中にも、殊に最上の物なりといへり。是も將軍家に奉りて、永井正宗と號せられしとなり。

はじめとして、大剛のものども馬をかへして追ひちらし、とつてかへしては突きはらひ後殿しけり。青木は小丈なる馬に乗り柄のみじかき槍なりしゆゑ、とこに乗りさがり、幾度となく支へたゝかひけり。甘粕備後は上杉家にて勝れし勇將なるが、白石の城を守りしに、會津に行きたりし跡にて、登坂逆心して、白石を敵に取られし事を口惜しく思ひしかば、今日とりわきて引きさがり、取つてかへして追退け、勇氣をあらはしけり。福島の下川の川を渡る時、政宗の兵彌追詰めて、われ先にと川に打入りたるが、永井を後より三刀切る。永井度々の軍に戦ひ疲れ、大軍打渡す川音にまぎれ此をしら

ず。青木は鳥毛の棒の出しにて黒きほろかけたるが乗寄せて敵を追拂ひ、川岸に打あがりて、永井に斯くといへば、驚きて従者に見すれば、ほろに三刀鞍にも刀の痕あり。永井けふは助けられしとて、一禮をぞ述べたりける。小田切も敵に取圍れあはや討れぬと見えしを、青木又かけ寄せて敵を追拂ふ。岡野は旗おし立て靜に福島城に入り、甘粕栗生も引入りければ、政宗やがて押寄せたるに、殿の兵ども柵を踏えて城に入りたりしに、青木は柵を越えかねて只一騎ひかへ居たる所に、政宗馬を駆寄せたり。青木十文字の槍にて、政宗の冑の立物三日月を突折りしかば、政宗馬に諸鎧を合せてかけ通られぬ。青木後に政宗と聞きて、今一槍にて突殺すべきに、口惜しき事よとぞいひける。かゝる處に、築川の城より須田大炊助長義討つて出で、政宗の兵阿武隈川を前に陣しけるが、此川奥州第一の大河なれども、須田はよく地の利をしり、兵を二陣にわかち、須田は川上に打上りけるを見て、政宗の兵二つに分かれて防がんと色めく所を、一文字に渡して斬りかゝる。敵敗北しければ、物具を始め多く分捕にせし中にも、伊達家に傳へし幕を須田宇平次、中村仙右衛門奪取りてけり。須田今年二十三、これより武名殊に世に高く聞えけり。政宗は松川にて後に敵出たりと聞き、引退く處を、本庄越前又かけ出て川を渡し追かけければ、政宗敗北し、信夫山に掛りて引退く時、景勝後巻に打出て、紺地に日の丸の旗山の上に見えしかば、政宗とる物もとりあへず仙臺に引返されけり。後に政宗使を以て攻取りたる白石の城と幕と取換へんと云ひ送られしかば、景勝聞きて、白石の城は鋒にて攻めとられ候。

幕も亦吾士卒の骨折りて取得候へば、重ねて幕をも録にて取返されよと答へられし後、小城一つ攻落されしは恥にあらず、昔より名將も城を敵に攻落されし事なきにあらず。武具を取られし事は、弓箭とる身の大きな恥なれば、政宗我をたばかりて、斯く云ひしなりと笑はれけり。台徳院殿上杉の館に御出有りし時、かの九曜の幕法華經の幕を麻にうたれしとぞ。其後政宗岡野に逢ひたりし時、松川の軍の有様語り出して、汝を斬りつるはわすれじ物をといはれしかば、岡野大將の刀の跡と存じ候うて金糸にて縫ひあはせ、家の寶とせんと存するよしいひて、羽織を政宗に見せければ、政宗悦ばる。其時岡野のしころを吹返かけてなぐり切にしたりきと申しければ、政宗色を變じ物語を止められしとかや。岡野はもと蒲生家の士なりしが、上杉家に仕へけり。富有なる人にて儉を好み奢をにくむ。一月の間二三度も金銀を山の如く積み、其中に臥してなぐさみとしけるを聞く人そしりあへり。或時岡野いつもの如く、金銀を並べて見居たりしに、近きあたりの士あらそひをし出し、方人の者どもあまたかけ寄りてさわぎしに、岡野聞くといなや、正宗の刀を掲げて走り行き、一日一夜其家に有りて事能くとりあつかひて歸りけり。岡野が馬取の下部大板金一枚持ちたりと聞き及び、呼出して汝が志こそゆゝしけれ。人は貴賤によらず貧しくしては、義理のなすべき事も心ばかりにて叶ひ難し。よく心がけたりと云ひて、黄金百兩與へけり。景勝會津に兵を起す時、永樂錢一萬貫文を獻じ、朋輩の親しみ深き人々にはあまた黄金をわかち送りけり。軍のしたくに人々はひしめきけれども、岡

野は猿樂に舞をどれとてさわがす。人に語りて、日比は武備におこたらず、猿樂ども世のゆたかなる時は、諸方にまねかれて暇なし。今人々あわてさわいでかの者どもいとまあれば、玩にまねきたるよ。軍に臨む者生きて歸らんと思はず。されば今生の楽しみと思ひてなぐさみ候とぞ云ひける。又政宗福島城を攻めとらんとて、木幡四郎左衛門百騎計にて城近く働きけり。岡野井樓より見大物見なれども、三陣にわかりたるは、軍を心懸けたり。兵を出すべからずといひけるに、鈴木彦九郎よせ來りし中に政宗有るべし。くひとめて討取らんといへば、尤なりとて兵を出し、先陣廿騎計次の陣にひとつにならんと色めく所を、鐵砲を打かけ、煙の下より左内一文字に切て掛り、遂に木幡を討取りければ、景勝度々の功を賞し、謙信武功の輩に姓名をあたへられし例により、左内を越後と更められけり。政宗三萬石にてまねかれしかども、舊主の好み忘れがたしとて、蒲生秀行に仕へ猪苗代の城に有り。下野守忠郷の時死しけるが、金子三千兩正宗の刀を遺物に獻じ、忠郷の弟中務にも金子三千兩、景光の刀貞宗の小脇指をかたみにまゐらせけり。年頃人にかしける金銀の手形證書の大なる箱にありしを、皆焚きすてたりしとぞ。

石田が子の僧助命の事

關ヶ原の亂をさまりて後、東照宮本多正信を召して、石田が子妙心寺の内永壽院が弟子にて僧となりしを、寺中一同して重罪の人の子なれども、幼き時より出家したる者なれば、赦され候へといふはいか

にと仰せ有りければ、正信とくにも御赦されの有るべき事に候。治部は徳川の家に大功をなしたる者なり、治部よしなき軍を起し、西國中國の大名をかたらひ候ひしに、一戦に打負けたる故にこそ、日本六十餘州皆徳川家に歸服いたし候へ。治部が存立ちしより、かく日本は従ひぬれば、徳川家に大功を成したるには候はずやと申しければ、東照宮汝が理窟もさる事なりと仰せられて、かの僧御ゆるさを蒙りければ、岡部美濃守宣勝懇にして、和泉の岸和田にて終りけるとかや。

越後國一揆堀直寄武功の事附千利休が事

關ヶ原の亂の時越後に一揆起り、堀左衛門督秀治が臣小倉主膳が下倉の城を攻むる。堀監物が子丹後守直寄坂戸の城にてかくと聞き、後卷にかけ向ふを敵引きたがへて、坂戸を攻めば如何あらんと云ふもの有り。直寄いまだ下倉を救はず。敵此城に攻來らずば、敵の旗先をだに見ず、口惜しかるべしといふより早く打出て、下倉に向へば、小倉も門を開きて切つて出づ。直寄後より一文字に突懸り一揆の長田丸右京を打取りたり。此告を坂戸にて書かする時、勝利を得候と書かせしかば、いかゞあらんといふ。直寄あざ笑ひ、打ちまけば戦場の土とならんにと云ひて出でられけり。一揆柿崎齋藤已下五千計猶山により、前に平田をあて、陣しければ、直寄昔太閤の前にて允長老の孫子をよみしを聞きたるに、兵以正合以奇勝といへり、吾けふ奇を以て軍すべしとて、山中數馬速水織部に馬じるしを渡し、直寄は六百計引分けて林の中に待居たり。一揆馬印を見て進み來る時、林の中よりどつとかけ出で、

直寄真先にすゝみて、思ひもよらぬ不意を討ち、一揆二百餘討取つて切崩したり。東照宮御感狀を賜りぬ。此年二十四歳とかや、後に一萬石を賜りけり。

直寄は秀政の長臣堀監物直政の次男なり。十三歳にて陪臣なれども、太閤の小姓に召出され、左右をはなれざる寵臣なり。初三十郎といひけるが後丹後守と稱す。太閤ある時茶室に入りて、火をともし炭を入るる時、千利休が幽靈あらはれ來て、黒き頭巾をかぶり爐のかたへに座し居たるが、眼の中より光生じ、息に火を吐く。左右に有りける侍女恐れあへるに、太閤炭を入れ終りて無禮なりとて、はたとにらまれしかば、利休が形退きて坐す。太閤常の居間に出で、丹後守をよんで、ばけ物數寄屋に有り、しかり來れといはれけり。直寄今年十五歳なり。即行く時廊下の窓戸みな閉ぢて、さてすき屋に入りて見れども何もなし。歸りて斯といへば、羽織をあたへらる。利休は茶の湯を好みて世に名あり。天正十八年秀吉南禪寺より黒谷へ出らるゝ山ぎはの道にて、女房の下部にわりご持たせ、山々の花をながめて靜に來りしが、秀吉の先ばらひの者を見て、花の木蔭に立ちかくれたるが、いふ計なく美麗なりしを問はるゝに、利休が女にて鴟屋に嫁し、今は獨住なる由聞きて、宮仕へさせよとしひてよび出されしに、夫にわかれし後、悲しみの涙乾かずとて従はず。利休にしひられしに、女を商ひしたりとて、人はいはれんが口惜しとて出さず。秀吉利休をにくまれしに、利休木像を作り、大徳寺の山門に置きたり。太閤山門は天子を始として通らせ給ふ、頭上にしかす

る事無禮なり、且茶の器の價に就きて私有りと聞くとて、天正十九年二月利休を誅せられけり。利休小座敷に茶の湯をしかけ、弟子の宗殿と、常の如く茶の湯終りて、それづくに形見をわかちやりて後自害しけるとぞ。

直寄幼少の時紙でこ土でこひいなやうの物を玩びて、人の贈るにも、他のものは悦ばず。されば人ごとに贈りけるほどに、大なる籠に入れて有りしを、人々あやしみ思ひけるに、常に人なき所にかのてこを並べ、武者押陣取をして戯れ悦びしとぞ。

世間太兵衛伏兵を知る事

越後の一揆三條の城に寄する時、道に伏兵したり。溝口伯耆守宣勝兵を出して三條に赴くに、世間太兵衛先陣せしが、小川の脇に新しき蕨の有るを見て、此邊に兵を伏置きたるならんとて、搜しければ、伏兵騒きて逃げけるを、追つかけて百餘人討取りたり。

卷之十七

真田昌幸父子三人始末の事

真田安房守昌幸は海野小太郎幸氏二十一代の末なり。父海野彈正幸隆信州真田に居て、真田氏と稱す。武田家の臣となる。嫡子源太左衛門信綱は長篠にて討死す。二男は武藤喜兵衛昌幸と云ふ。長篠の後高坂彈正五ヶ條の謀を申しける。其一條にて昌幸に兄の家をつがせられけり。父の幸隆後一徳齋と號す。昌幸信玄の近習にて十八の歳川中島にて槍を合せたり。天正十年勝頼諏訪に陣し、四方より敵來りし時、昌幸吾妻の城にこもられよといひけれども、長坂長閑其謀を用ひず、勝頼郡内に赴きて、死して國亡びぬ。北條氏政兵を出して甲府を攻取らんとするとき、昌幸徳川家に屬し、依田信蕃と碓氷嶺に陣して、北條の糧道を塞ぐ。東照宮北條と和平し給ひ、上野の沼田を以て、甲斐の都留信州佐久二郡に換へらるべしと約あり。是より前昌幸沼田の城を攻取りて要害の地とせり。真田に上田を與へ、沼田をば氏政に渡すべきよし仰出さる。上田にもとより信玄以來真田が居所なり。昌幸われ徳川家に功ありといへども、僅に上田と沼田を賜はりぬ。賞甚薄しと思ひて辭し申しけるは、沼田は賜り候地に非ず、吾鋒にて取り得たれば、故なくて人にあたへん事叶ひ候まじと申しけり。豊臣家に屬すべきよしを云ひ送りし其折から、秀吉東照宮の上京なき事を怒りて此を悦び、密に上杉景勝に真田に力

を合せよと下知せられしかば、千六百の兵を眞田が許に援とす。東照宮眞田は奸謀ある者なりと、も  
とより憎ませられける上、無禮の答を怒らせ給ひ、大久保七郎右衛門忠世、鳥居彦右衛門元忠、平岩  
七之介親吉、柴田七九郎康忠を將として、七千の兵を以て上田を攻めさせらる。昌幸城より一里計隔て  
たる加賀川を敵渡る時、半途を打つべしとおもひけるに、甲州の浪人板垣修理、たとひ敵の半途を討  
ちて利有りとも、三遠の物師どもなれば、敵の後陣二の見の勝あらんと云ひければ、昌幸尤なりと  
て城に近き砥石の城に嫡子信之、矢津の岩に矢津但馬をこめ置き、寄手必染屋平より寄すべし。よわ  
よわと引受けて不意に突いて出でんとの謀なり。又城外小野山のかげに郷民を伏置きけり。寄手す  
すみて町口に押入り、惣廓の内横小路に柵をくひ違ひにゆひて柵をかけ、其陰に伏兵を置き、鐵砲を  
打ちかくる。昌幸思ふ處に引受け、城門三方より一同に打つて出でたれば、寄手支へ兼ねて崩れしか  
ば討たる者多し。砥石矢津よりも切つてかゝり、郷民ももみ合ひたれば、大久保十四五騎にて距止  
り戦ひて、加賀川まで引取つたり。鳥居は高き道を退きけるを、砥石の兵喰留めんとて慕ひ來れば、  
五六町計の間に討たる者數多なり。大久保は鳥居が敗軍を見て、忠世たゞ一騎引返す。弟平介忠孝  
後彦左衛門 黒き物具に銀の揚羽の蝶のさし物にて乗付けて馬より飛下り、槍を提げて控へたる處に、敵押  
懸かる中にも、眞先なる兵を突伏せたり。忠世が返すを見て、松平七郎右衛門をはじめ引返し來れり。  
平介は小高き處にふみこたへたれば、眞田も進み得ず。其間僅十間計に過ぎざれども忠世少しもひるま

ず。日置五右衛門忠世が陣の前を通らんとす。平介これこそ敵よ、三つ巻を付けざるぞと云ひけるに、  
日置いかゝあやまりけん、味方ぞと心得て日置五右衛門なりと名乗つて通る處を、足立善一郎政定槍  
おつ取り鞍の前輪を突く。五右衛門が従者槍を取直し、善一郎を突く。平介が前をばせ通らんとすれ  
ば、平介またつきけれども、従者槍を捕へて平介に向ふ。其間に五右衛門乗拔し處を、氣多甚六郎の  
がさじと追ひさまに股のはづれを突く。其時五右衛門ふり顧り、川中島の加勢と思ひて危ふかりしとい  
ひてかけ抜けたり。忠世平岩が陣に往きて敵はまばらに追懸け來たれり。我跡を詰められなば切つて  
かゝり候ふべしといへども、親吉敵小勢なれども、必定近所に伏兵有るべしとて進まず、其間に昌幸  
城に引入りけり。此日酒井與九郎殿して敵の首を取りければ、其日の一の功名なり。翌日忠世康忠眞  
田が枝城丸子を攻めんと筑摩川を渡るを、眞田見て海野町へおし出し、八重原を一騎打に相働く。忠  
世鳥居平岩に後を詰めば、敵の中を取切り討取るべしといへども同心せず、眞田引取りたり。味方は  
八重原に陣し、眞田も城を出て陣し、足輕軍あり。芝土居をつき柵を結び、荻田働きに日を送る。か  
くて濱松より井伊直政大須賀康高を始として五千餘援兵たり。されども秀吉の下知により、景勝大軍  
にて眞田の後卷するとの聞え有り。諸將相謀りて陣拂す。昌幸が次男左衛門佐信仍信仍或本にノゾカカと  
訓す何れか是なるを  
知すつけ慕はんとす。大返しにかへして軍すべき物色を昌幸見て信仍を制して追はざりけり。諸將歸陣  
の後昌幸大息ついで、徳川殿は誠の英雄なり、加勢を以て城を攻むる色をあらはしたる故、昌幸其謀

に陥り防ぐにのみ心ありて、夜討朝がけの志夢にも無かりしなり。斯たばかりて不意に引取たる事、吾計の及ぶべきにあらずと云ひけり。其後東照宮太閤と和平なりしかば、景勝の加勢の頼もなく信州甲州の人々を真田頼みて、秀吉に申して徳川家に歸り属すべき旨を申せば、御許容あり。天正十五年正月七日昌幸信州深志の小笠原右近大夫貞慶と共に、駿府に参りて、東照宮に謁し奉る。

東照宮も昌幸が武勇侮りがたしと思召して、嫡子信之を本多忠勝が婿にせんと仰せられしに、昌幸夫は聞きあやまちならん、本多が女を信之が妻にせん事さらに望みに候はずと申す。東照宮此事を太閤に御物語有りしに、忠勝が女を養うて、今はわが女なりといはせられよとはかられしかば、東照宮使を以てしかじかなりと仰せ送られしかば、果して昌幸聞受けたりと云へり。

斯くて北條征伐の事起れり。天正十六年八月北條氏政の使として、北條氏規聚樂に参り、氏政上京すべしといへども、上野の沼田は天正十年徳川殿と和平の時相渡さるべきを、真田恣なる事を申て、北條家志を失ひ候。早く安房守に彼地を北條に渡すべき旨をしめされなば、氏政上京せんとぞ申ける。秀吉聞き給ひ往年の事審に知ざる事なり。北條家に土地の事能知る者を上京せしめよとて、氏規に暇給はりぬ。翌年坂部岡越中融成入道江雪大阪に赴きければ、秀吉事のよしを聞き給ひ、真田が上州内の所領三分二并沼田の城を北條に渡し、其換地には徳川家より真田に與へらるべし。同所三分一名胡桃城とも、真田已前の如く領すべきよし、江雪に命せられけり。かくて真田が方より、沼田

を武州鉢形はちがたの北條氏邦うぶくにに渡し、氏邦其従士猪俣能登範直いのりなほを沼田の城代とせしに、ゐなか人にて得失の辨なく、名胡桃の城を真田が領せし事を怒りたばかつて城を奪ひ取りたり。昌幸太閤に訟へしかば、太閤北條は沼田を得ば、上京すべきと約しながら、遲緩を怒られし上に、此事を聞きて氏政を征伐せんと志決して、天正十八年秀吉師を出して小田原に打向はる。東山道の先陣前田利家碓氷峠に至り、上杉景勝は阪本に至れば、名胡桃を奪ひ取りし猪俣は、戦はずして城を捨て逃落ちければ、真田信之のぶゆき後守城に入る事を得たり。昌幸は去る天正十三年以來秀吉の恩顧を得しかば、大谷吉隆に申して次男信仍のぶなりを秀吉の許に人質に出しけり。其後石田兵を起すの時、真田父子三人は奥州に打向ふ途中に、石田が使來りて秀頼公の爲に旗をあげ候、同心せられば、信州に故主君の地甲斐を添へて参らせん。偽なきしるしにとて起請文を送りけり。昌幸素より徳川家に二心あれば、さらば引返すべしといふ。信之是は然るべからず、内府智勇勝れたる人なり、いかでかたやすく討滅さるべき。思ひも寄らざる事なりと諫むれども昌幸聞入れず。

又一説に、本多と親しみ厚く候へば、石田にくみしがたき由を信之申せしかば、弟の信仍女房のよしみに引かれ、父に弓引くやうや候と申す。又信之西國に與せられなんに、必軍敗れ候べし。其時父と弟との危難に逼らんを助けて、家の亡びざる様にせんといひければ、信仍西國の軍敗れなば、父も又信仍も同じく戦場の土とならん、何として助けさせ給ふべき。徳川家先年兵を出し、上田

を攻めし時、景勝加勢候ひし、其報禮などかなかるべき。其比秀吉公和平を取行ひ給ひ、武名を世にあげしかば、豊臣家の恩没しといふべからず。唯疾石田に同心有りて然るべし。凡家の亡ぶべき時、人の死すべき時至らば、潔く身を失ひ候こそ勇士の本意なるべけれ。何條きたなくいのち生きて、家の亡びざるやうにせんと云ふ事や候と争ひければ、信之怒て、汝が詞不禮なりとて、既に切つて捨つべく見えしかば、信仍いやく只今爰にて首を刎ねられ候事は許されよ。信仍は豊臣家の爲に身を失ひ申さん志なりといへば、昌幸聞きて兄弟の争各其理有り。太閤世を過ぎさせられし後、此事の起れるも必秀頼公の爲にする忠にあらずと信之はおもへるならん。信仍がいふ處、吾思ふ所なれば、われと共に引返すべし。信之は是より心任せにせよとて別れしといへり。又一説、昌幸云ひけるは、會津より宇都宮に至て七日路なれども、日の岡の徑より三日の行程なり。景勝と謀を合せ、前後より攻めたらんに、伊豆守俄に裏切するならば、徳川殿をたやすく討取るべしといひけれども、信之内府は勇略百萬の人にもこえたり。味方利有らん事、存じも寄らすとて、遂に兵を引わけて参りければ、東照宮信之を召して、安房守が片手を折つる心地するよ。軍に勝ちたらば、必ず信州を賜はるべき後の證ぞとて、御刀の緋のはしを断ちて賜はりけるといへり。又眞田兄弟の争の處は、佐野の天妙といふ、又犬伏といふ所なりともいへり。

昌幸は引返して、沼田の城にて信之が妻に對面せんと云ひけるに、信之の北の方面もあへず、既に父子仇となりて、引分れ給ひしかば、父にておはし候とも、城に入れ奉りてま見え申さん事思ひも寄らずとて、本丸の門を固めさせ、自ら物具取出し、女房共皆刀を側に置きたり。厩にあし毛の馬あるべし。厨の土間につなげとぞ下知せられける。昌幸聞きて吾過ちなり、人々能聞候へ、日本一と世に云る本多中務が女なりけるよ。弓取の妻はかくこそ有べけれ。此婦人あらんには、眞田が家危からじといひけるとぞ。昌幸夫より須河に至り、高間越にかかりて上田にかへりけり。台徳院殿木曾より登らせ給ふ時、御使を以て禍をまねかるゝにてこそあれ、降参せよと仰せ有りしに、昌幸聞きて秀頼の爲に城を守り候。攻められれば、一矢仕らんと答へしかば、又御使にて石田小西等己が威權を恣にせんが爲に、かゝる企に及べり。豊臣家の恩を蒙りし人々皆背きたるを以て知るべし。猶降参なくば、信之に腹切らせ、其後城を攻破るべしと仰送らせられしに、昌幸聞きて太閤恩深き人々の背き候は、此人心の同じからざる故なり。既に子にて候信之父と相違ひたるにてしるし召さるべし。信之に腹切せられんとや。親の子を愛するは、誰も同じ事に候へども、信之父とともに城にあらば、同じ枕に討死すべし。信之を助くべきにあらずと答へ申せしかば、さらば攻めよと陣を寄せらる。其日は百姓の家に入たりしに、榊原康政眞田今夜必夜討すべしとて物見を出し、篝火を透間なくたかせたり。果して信仍夜討せんと支度したりけれども、康政の設によりて、夜討はせざりけり。斯て明くれば九月六日押寄給ふ。淺見藤兵衛只一人隙際に進みける處に、打懸くる鐵砲に朱に十二引の差物打ちさか



れ、其身もひしと折敷き伏して味方の續くを待つ。小栗治右衛門大音あげ、淺見功名せうとて深入りし、ふかくなせそと呼はるを聞き、淺見立上り、汝に先をさせんやというて、門に付く處に門をひらきて討つて出で、淺見小栗得たりと槍を合するに、左右の出し屏より打出す鐵砲雨の降が如し。淺見が從者虎若といふわらは、剛の者にて、刀を抜き槍の穂先をくさり入りて、敵の足を雞拂ふ。淺見も痛手を負倒れしを、虎若足を取て引提げ持歸りけるに、淺見小栗をも助けよと云ふ。虎若聞きて主人の先途の爲にこそ來りたれ、他人を何にかせんと云てかい負て退く。淺見差物をたき落されたりと覺ゆ。取て來らずは生甲斐なしといふ。虎若北ぐるると差物を落さば恥なり。槍を合せて落したるは、恥に非ずといひて念なく歸りけり。城兵山本清右衛門依田兵部堤の上に上るを見て、寄手三十騎計馬を並べてをめて驢けよせ、ひしくと馬より下りて進み行く。齋藤左大夫山本依田前につと出て名乗りけるを見ると均しく、御子神典膳辻太郎介わたし合ひ、入亂れてたかふ。御子神はたぐひなき早わざにて、槍をかざし堤の中にひらりと飛入る。朝倉藤十郎、中山助六、戸田半平、鎮田市左衛門、太田甚四郎、齋藤久左衛門きそひかゝりて槍を合す。依田朱塗の物具にて戦ひけるが、深手負ひて倒れしを、御子神辻依田を一刀づつ切りたりけり。山本も槍を打折り、痛手負ひながら依田が屍を肩にかけて引退く。寄手追つむれば、城兵又切つてかゝるを、中山槍を合せ、太田弓にてさし詰め引つめ射たりしかば、門に追込みたり。

太田、後善大夫といふ。ある時士一人太田が許に來りて、吾は眞田家の浪人にて候。上田の軍の時相手に成りたる者なり。其時射られし矢を携へ來れりと云ひしかば、太田かゝる事は必わきに聞人のたしかなる有て證にすべしとてよび入れず。近きあたりに、笹瀬左大夫とて武功の有りし人をよびよせて、彼眞田が士に對面す。其人申しけるは、上田にて出合ひたりと、善大夫あやしみて、一番に出でたるは髭の多くありし大男なりきといへば、かの士よく見届けられし、それは眞田荒右衛門と申者なりと答ふ。其次の男はふとりたる男といふ。それは何の左仲と申す者なり。さて其次なりといふ。いやくそれはしかんゝの男なりきといへば、それは無極と申者なり。さて分明に見定められしといふ。さて其次われなりといへば、太田いかにもしかなりきといへば、其時この矢にて射られきとて矢を取出す。かの者は細野權之介といふ者なり。其後善大夫申して、細野を尾張の組付にしたりとかや。

されども鐵砲をうち出す事敵の飛ぶごとく、寄手の先陣地にひしと跪きてけり。本多正信下知して城をば責めず。昌幸と信仍は中の手に出づるを、牧野右馬允康成、同新次郎忠成はせ向ふ。其間二町計もあらんに、眞田父子八十四人手つゞみを打つて、高砂の諺をうたふ。榊原にくきやつかなといふまゝに、眞先に馬を乗出す。其兵二千計後を取切んとすれば、渡邊半藏も鐵砲をうちかけて進みしかば、松澤五右衛門敵の付入心許なく候、とく城に入らばやと諫めて、眞田高砂の諺を終らずして引

入りけり。康政康成おしつゝいて寄せけるを、正信かろくしう攻入らん事然るべからずと制しければ引返す。戸田辻等の七人を上田の七本槍と世に申すなり。戸田は銀の櫛のさし物、辻は白き四半に辻といふ字を墨にて書きたり。信仍箭文を射させ、二人の武勇を稱しけり。此中山はきはめたる取法の上手なりとかや。

後に依田を太刀付し一二の論あり。辻は依田朱塗の頬當せしといふ。御子神は依田朱塗の冑着て頬當はなしといふ。牧野右馬允從者を馬工郎にして上田に遣し、様々にして山本にあひ其時の事を問ふ。山本が云く、此論有べき事なり。誰人にもせよ、頬當をかけずといふ人初太刀なり。依田は頬當かけざりき。せはしき場の槍下なれば、血に染みたるを朱ぬりの頬當と見たるなるべしと云ひしを聞きて歸り、牧野に語りしかば、御子神一の太刀にきはまりけり。

かくて力攻めにせられれば、人死傷せん、早く美濃に赴かせ給ふにしかじと評定有り。森右近大夫忠政を上田のおさへとし、台徳院殿かこみをとかせ給ふ。榊原殿せしに、眞田遙に見て榊原が有様吾を侮れり。追かけてくひとめ一軍せんと云ひけるに、眞田が許に、年老いたる法師武者の謀ゆしき有りけるが、康政ほどの者いかでその謀なかるべき。古の兵法に歸師勿逐といふ事の候とて、とめて追はざりけり。東照宮榊原は必ずかゝり引きにすべきものなりと仰せられしが、後に召して御尋ねあり。榊原承り御大將は城に遠き山にかゝりて引き給へと申して、臣は城下を眞直に殿仕た

りと申せしかば、東照宮汝必しからんと思ひしに、果してたがはざりけりとぞ仰せられける。石田が軍やぶれしかば、眞田父子を誅せられん處に、信之此度父と引分れて參候は、父を助けん爲に候。たとへ大國を賜ひ候とも何にか仕らん。あはれ信州を以て二人の命にかへ申し度旨を申されけり。

信之并伊直政榊原康政に就て、父を助け給はり候へと申す。東照宮聞召し許容ありしと仰せられければ、台徳院殿に申すに、信之父を助けんといふはことわりなり。されども安房守にさへざられて關ヶ原の軍におくれたり。必ず安房守を誅すべしとて御ゆるされの色なかりしかば、伊豆守是を承り、又兩人に就きて仰せの趣申すべき詞なし。かくあらんと存じ、父を誅めしかども用ひざれば力に及び候はず。只一つ志す所の候。安房守を誅せられんより先にまづかく申す伊豆守に切腹を仰出され候へかし。御敵の子なれば、左あるべきと世の人も存すべし、必父在世の中に伊豆守を誅せられよと云ひも終らぬに、康政心得て候、房州御赦免の事は康政が申上げて事よくせん。むかしの義朝には、大に異なる豆州かなといひて、其旨を申せしかば、東照宮台徳院殿も聞召入られて、眞田父子ゆるされしといへり。

信之に信濃十二萬石の地を賜はり、昌幸信仍は御赦を蒙り、城を出て、紀州高野の麓九度山に引籠る。信仍常に父と兵法を談じて、天下の時勢を計りけり。昌幸は六十七歳にて、九度山に死す。其後大阪の亂起りしに、秀頼信仍を招かれけり。此比世の中さわがしかりければ、紀州は淺野長晟の領地なれ

ば、橋本山の百姓に、真田大阪に行く事あらん、おしとめよと下知せられしかば、用心きびしうしたりけり。信仍橋本山の百姓數百人を九度山にまねき、かり家あまた設けて酒宴してもてなし、上戸下戸をいはずしひたりしほどに、酔伏して前後もしらす。其時百姓の乗來りし馬に、いろくの物取付百人計打立ちて紀伊川を涉り、橋本山より木のみ路にかゝり大阪にぞ行きたりける。道々にて百姓はみな九度山にゆきぬ。残りし女わらべども、信仍が槍眉尖刀の鞘をはづし、鐵砲に火なはをはさみ、もし押止むる者あらば、忽討殺すべき體を見てせんかたなし。九度山に酔伏したる者ども、夜明けて見れば真田はなし。いかにと問へば昨日しかくの有様にて、河内路に赴きたりといふ。欺かれしと悔めども力及ばず。信仍大阪に至り、只一人大野修理治長が家に行く。信仍其比羅髮して傳心月叟といひけり。大野が士信仍とはしらす、何國の修驗者ぞと問ふ。信仍大峯より參候といへば、折節修理は居合せずとて、番所のかたへに呼入れ置きぬ。

若き士ども、刀劍の物語するとして信仍に向ひ、汝が刀見せられよといへば、山伏の犬おどしに候とて出すを抽きて見れば、心も詞も及ばれず。さらば脇差を見んとて是を見るに是も同じ事なれば、おどろいて、なかごを見るに、脇差は貞宗刀は正宗なり。人々あやしみあへり。其後信仍彼若き士に逢ひて、刀の目き、はあがりたるやとたはむれしに、みな赤面せしとぞ。修理歸りて信仍を見て大に悦び、とくも參られ候よと禮儀正しくして書院にまねき入れもてなしぬ。

秀頼速水甲斐守時之を使として、黄金二百枚賜はり、軍兵の事はやがて下知有るべしとなり。既に東西の軍起るに及びて、東照宮いかにもして信仍を降参させばやとて、叔父隱岐守信尹を以て、此旨仰せられ、信州にて一萬石賜はり候ひなんとなり。信仍同心せざれば、又信州一國賜るべしと仰せ出されけり。信仍怒つて、義は人の道なり。秀頼に二心あらん事存じもよらず候。重ねてかゝる使をせられなば、存する旨ありと罵りて、信尹を追返しけり。

或説に、信尹に向て天下に天下を添へて賜るとも、秀頼に背きて不義は仕らじ。汗の出づるとて肌をぬぎ小姓にぬぐはせて、やがて首を關東の兩御所の前に出すべきとて、うち笑ひわたりとなり。元祿按ずるに、昌幸徳川家に服従し奉りて後、關ヶ原の亂に及んで背きたる事二度に及べり。此義といふべからざるにや。東照宮寛仁におはしませし故に、再犯の罪を宥めさせ給へり。信仍其寛仁に何を以て報ひ候ふや心得られず。豊臣家は真田數世の君に非ず。若君に不背の義を論せば、武田家亡びて後世をすて、山中にかくれずはいかにか有るべき。真田が論する處の義、道に叶へるとはいふべからず。世の人真田を以て賞稱する事甚し。故に愚論を述ぶるに及べり。

大阪冬の陣に出丸に有りて防ぎけるが、大敵の責めし時守固かりけり。和平に及て、信仍越前忠直に仕へし、原隼人貞胤は、ふりしよしみ有つて招きもてなしけり。原家の士也。酒盃數獻の後、信仍鼓をうち、子の大介に舞はせて興じけるが、信仍云ひけるは、吾必討死せん、思ひの外にながらへて再

會する事よ。されど終には軍に及ぶべし。落ちぶれて九度山にかくれ居しが、一方の大將となりて候。豊臣家の恩たとへんやうなし。あれに見ゆる鹿の角の立物の冑は、眞田家に傳へたる物とて、父安房守護り與へて候。重ねての軍には必きんずる物なれば、見置きてたまはり候へ。又命はをしからねども、大介がおもひ出もなく、空しく戦場の土とならんは、不便に候と語りければ、貞胤も涙を流し、軍に臨む者誰か生きて歸らんとおもふべきと答へしに、信仍白河原毛なる馬に、六連錢を金もてすりたる鞍おかせ、庭にて乗まはし原に見せて、城は壞たれたれば天王寺口にかけて馳せめぐり、下知して、思ふ程軍せばやと存すれば、此馬のかはゆく候と語つて、又酌酔ひて別れけり。果して和平敗れしかば、元和元年五月大阪にて軍評定あり。後藤は大和口の先陣にて、平野に陣しぬ。五月六日の夜信仍毛利豊前守勝永と二人打連れて、後藤が陣に行き、明けなば國分の山を踰え三萬の軍兵を一陣にして、關東の旗本に一文字にかけ入り、軍神も照覽候へ、兩御所の首をとるか三人の首を實檢にそなふるか、二つの中よとて最期の盃せり。後藤は六日の夜半に打出で、道明寺口にて討死しけり。毛利は藤井寺に陣を進し處、はや後藤が軍やぶれ、關東の軍兵三三萬もあらん、洪水の溢れ來るが如し。眞田を待てともいまだ來らず。眞田は兄の伊豆守と同心して、裏切するよと人々罵りける所に、住吉海道より赤旗おし立て、馬煙ふみ立て、來るをみれば、金の蠅とりの馬印にて、眞田なれば、毛利が陣もいさみあへり。信仍豊田の方にすゝめば、さてはいよく二心よと人々あやしむ所に、信仍堤の

上にあがり鐵砲を進めて、伊達政宗の先陣片倉小十郎に向つて討つてかゝる。信仍眞先に進んでたゝかひしが、片倉が陣敗北す。逃ぐるを追うて敵あまた討取りたり。片倉金の鐘の差物にて壓をとりもり返す。政宗の旗本の騎馬の鐵砲もすゝみ來る。奥州は聞ゆる馬多き所なれば、よい馬を撰びて若き士に乗せ、馬上より鐵砲をつるべ立てさせ、敵ひるむ所を馬の首を揃へて忽乗破り、かけみだして追崩す軍略なり。未だ其間相去る事遠かりしかば、信仍いざ疲れたるに息をつげ、冑を脱げと下知しければ、みな冑をぬいで休み居たり。敵や、近付しかば、信仍さらば冑を著よといふほどこそあれ、冑の緒をしめ槍の穂先をそろへて敵に向ふ。政宗の鐵砲箕手なりに成てかゝり來り、雨の降る如く打ちかけたり。信仍眞丸に成りて、とてものがれぬ所よ、一足も引くなもの共と下知し、ひたくと脆きて聲々に念佛をとなへ、力を合せてこたへたるに、信仍大音あげ、一寸も引くな爰に死ねやと下知して、槍を取つてかゝれば、士卒一同に立上りをめいて槍を打ち入れたれば、政宗の軍兵大に破れ、一支もなく崩れけり。此を世に眞田が天王寺口の軍とて、大軍の騎馬鐵砲に打勝つたる有様をつたへて稱しけり。信仍士卒を立固め、しづくと毛利が陣に來る。大介今年十六歳、組討して取つたる首を鞍の四方手に付けて手負ひたるが、流るゝ血をもぬぐはず馳來るを、毛利見て、あはれ父の子なりと感じけり。信仍毛利が手を取り涙を落し、時刻遅く後藤が討死せし故、謀空しく成りぬるも、豊臣家の連盡きぬる所なりといへば、毛利今日大敵に打勝たれし武勇の有様、古の名將にもまさりたりとぞ云

ひける。かゝる所に、秀頼の黄母衣の使番乗來り、とく城中に引きこもり候へと下知せられしに、信仍は猶赤旗おし立て、今一軍せんと冑の緒をしめ直し、勇氣殊にいかめしく見えたりけり。水野日向守勝成此を見て、いざ軍せんとして政宗にすゝめらるゝに、同心の色なし。越後少將忠輝こゝに陣を進められしが、此も眞田が陣にかゝらんと冑を著給ふ。政宗の士大將片倉小十郎忠輝の前に來り、日暮に近く軍危からんといへば、はやりをの士ども、いざかゝりて討ちとらん、弱敵をぬますまじといふに、片倉それはひが事にて候。日本國を敵にして、軍する大阪の者共を弱敵といふべきや。片倉が組の士三十人の中二十九人は討死したり。是見られよとて、つばまで血に染みたる刀のまがりたるを見せてけり。越後の士大將花井主水もいかゞすべきと、軍奉行玉虫對馬に問ふ。玉虫敵は二の身の勝を心がけ候。かゝりて軍に利候まじといひてためらひけり。

忠輝大阪をつくべきやと評定決せず。篠瀬左大夫足輕をかけあひしらひて食止むべし。軍をさせられよとすゝむ。玉虫僅なる足輕を以て、いかにして敵の大軍をくひとむべきといへば、篠瀬ふまへのなき事は申さじ。六尺の大男も、足のうちに踏みぬきすれば、行歩ひまどるものなり。人數少しとてつけられぬ事やあるといふ。玉虫地の利しらぬ所にて、日もくれたり。ゆきがかりの合戦は危き物なりと押しとむ。小野能登守は、判官殿三草山を越えての合戦はしらぬ國の夜軍ならずやといふ。皆川老甫、小野能登守、花井主水、篠瀬左大夫は駈らんといへども、玉虫對馬林半之丞はおし

留めて、論決せざりし中に、大阪方しづく引取りしともいへり。

眞田が陣には、手々に扇をあげて招き、何とて軍し給はぬぞと聲々に呼はりけり。猶かゝらざりしかば、信仍しづくに兵をさめ、關東武者百萬もあれ、をのこは一人もなしと大音に罵りて引取りければ、東照宮、玉虫に林道春に吳子が六國の風を説きたる章を讀ましめられ、玉虫を逐出されけり。此玉虫は甲斐の武田家にて、物しなる故軍奉行たりしに、いかなる故ならんおくれたりき。あくる七日の軍に信仍兵を出せしが、秀頼の出馬をすゝめんため、子の大介を城にかへしけり。大介今年十六に及ぶまで、片時もかたへを離れ候はず、たゞ今討死のきはに逃げたりと人のいはんも口惜しく候。去年母上にわかれ奉りし後、文のたよりにながらへて、相見えんはねがはしけれども、合戦の場にて必父うへと同じ枕に討死せよ、苟にも名こそをしけれと、誡められしといひければ、信仍城中へ歸れといふも、秀頼公の御ためなり、父子ともともものがるべきや、やがて冥途に逢べきを、しばしの別を惜しむこそ口惜けれ、とくゞ城に參れとて取りつきたる手を引放せば、大介名残をしげに父を見て、さらば冥途にてこそとて引返す。信仍大介を見おくりて、落つる涙をおさへ、昨日懇田にて痛手負ひしが、よわる體の見えざるは、よも最後に人に笑はれじ、心安しといひけるとかや。かくて大阪の軍敗れしかば、信仍討死しけるを、首をば越前忠直の士西尾仁左衛門取りたりしに誰ともしらす。眞田信尹馬に乗りて打通り、此を見て其冑は見知たるぞ、眞田左衛門佐なるべし。口をひらいて見よ、向齒

二枚闕けて有べきといひしに、信尹が詞のごとし。さてこそ左衛門佐とはしりてけれ。彼背は原に物語して見せたるなり。弓箭とる身はおもひ出の詞、かねて云ひおくべき事にこそといひあへり。大介は城中に入り、秀頼に従ひて蘆田曲輪の矢倉にこもりて父の事を尋ねけるに、討死せしと聞きて、それより物もいはず。母のかたみに賜はりける水晶の數珠を首にかけ、秀頼の自害を待居しかば、速水甲斐守大介に向ひて、組討の武勇たくましくふるまひして痛手負はれしと聞ゆ。和平にて君も城を出させ給ふべし。真田河内守信吉の方へ人をそへて送るべしといへども、ちつとも動かす。寄手矢倉を取巻し時、速水戸口に立出て大介が有様をかたり、武勇の血脈おそろしき者なりと云しとなり。終に大介も矢倉の中に死して、父子同じく豊臣家の爲に亡びたり。

## 西村孫之進武功の事

大阪夏陣に真田信仍と伊達家と軍する時、伊達家の騎馬鐵砲をうち立てたれば、玉の飛ぶこと敵の降るが如く、信仍が軍兵ども折りしきて槍を敵の方へさし向け、こたへ居たるに、西村孫之進といふ者うたれたる味方の屍二つを重ねて柵として居たるに、玉一つ来て、二つの屍をうち通し、孫之進が肩に傷つきたれども薄手なり、槍を握りたる左のこぶしの大指、こそばゆくて氣味悪しく覺え、残る指四本にて、大指をにぎり込みてこたへたり。全身の危き事はわすれて、大指の先の斯の如きは怯ぢたる故ならんと思ひて、左右をみるに皆しかしたり。又かたへに並び折りしきたる者に、玉の中る音甚

だ強くひびきて、我身に中りたるかとおぼえしと、後に人にかたりけるとぞ。此時孫之進伊達家の秋部甚平といふ者を討取りけれども、其姓名をしらす。落城の後孫之進いまだいづれの家にも仕へずして、江戸におもむきぬたりしが、相知れる者の方へゆきてもの語る時客來れり。主人西村が事をかたりて、大阪にて事に逢ひたる物しなりといふ。かの客は伊達家の士海道林左衛門といふ者なるが、誰の陣にかおはせしと問ふ。西村真田左衛門佐が許に有りしと答ふ。客の云く、さては五月六日の戦にての事なるべし、具に承り候はやと問ふ。西村聞きてさせる事にて候はね共、尋ねに付きて申べし。伊達家と始の一戦終り、後の軍殊の外はげしく、伊達家の陣を七八町計も有らん追立てたる處に、三十人計取つてかへし折りしかれたり。某とも三人槍を入れ候ひき。某が槍の相手の間におし隔りてかけ入り候人を、初槍にわたかみの外れを突損じ、二の槍に草摺の間を突いてはね倒し、首をとらんとせしに、歴々の人にてや候ひけん、従者と覺しき者二三十人も取巻き候うて、手に一幾刀ともなくきられ候。皆具足の上にて手を負はず候ひしが、槍にて腰骨をつかれ倒れて絶入り、それよりはおぼえず候。後に承り候へば、真田が惣軍どつと押か、り候故、われらが首をとられず候山、彼突伏せたる槍の相手は定めてたすけのがれたるなるべしと存するなり。其後少し人心地つき候に、馬とり彌右衛門と申す者、これほどの手にて弱るといふ事やあると云ひて、跡の方へ歸る音かすかに耳に入りぬ。見捨て、逃げたるかと思ひしに、又來りて腰の手ぬぐひを水にひたし持來たり、口にしばらく入れたり

しゆゑ、彌氣付きたるを、彌右衛門肩にかけて城中に歸り、翌日も其疵故働く事ならず、戦場に出でずして思はざるに存命候といへば、彼客聞きて驚き初の槍を合せ候は、士大將秋部刑部と申す者也。其間にかけて入りたるは、刑部が子甚平といふ者なり。御物語にて疑もなく候。甚平をば陣屋に連歸りたれども死しぬ。察せられ候通一陣の大將にて候、其日武功の證人には我等立つべきにて候。其しるしを進らせんとて、右の次第を書き花押を加へて西村にあたへ、さて譽田以來の參會珍らしき縁なりとて、互に物がたりして別れけり。西村後に池田の御家芳烈公光政朝臣に仕へたり。

佃次郎兵衛伊豫國松前城を守る事

佃次郎兵衛十成は、加藤嘉明の左の先手の士大將なり。からしまの船軍に、十成敵船に乘移つる時、敵劍にて口中に突入れたれども、少しもひるまず、猶飛込みけるを棒にて背の上を強く打たれ、海中へ落入りたれども、水に長じたれば泳ぎあがるを、従者熊谷覺兵衛薙刀をさし出すに取付き、直に敵船に乗入つて船中の者どもを撫切にしたりけり。嘉明船あまた乗取られし其一つなり。關ヶ原の時嘉明は伊豫の松前を出て、關東に打向はれしに、十成に堅固に守れと下知して、松前に留守居たり。毛利輝元の兵、村上掃部、能島内匠、曾根兵庫、宍戸善右衛門等松前をとらんと支度しけり。能島村上は河野の一族なる故、招かざるに人々従ひなん、豫州を攻めとらん事掌の中に有りと評議し、豫州の人平岡善兵衛といへる者を嚮導とし、三千餘をひきゐて豫州に打向ひ、使を以てとく城を明渡され

よ、遅くば踏潰さんと松前へ云ひやりけり。城代加藤内記佃と相謀り、先敵をたばかるべしとて、仔細なく城をあけ渡すべし。然れども妻子をかたくつくる間を待たれ候へと返答す。左も有りなんと侮りて、三津浦に上り、民家に陣して待居たり。大洲の城に藤堂高虎有りて加勢さし向けられしかば、松前城中の人々よろこびあへり。十成獨同心せず。今敵大軍にて押寄せたりといへども、謀を設け一戦して義を守るは、弓箭取者の法なり。城を枕にして討死すべし。勝利を得ば、生前の面目なり。たとへ勝ちたりとも、人の救によりて運を開きたりといはれん事口惜しかるべしとて、禮義を正くして辭したりけり。此時國中一揆起り、三津浦に酒肴をおくるよしを十成聞きて、雙方の勝負を窺ひて見合せ居たる黒田大溝永田村の百姓小ざかしき者四五人呼寄せ、妻子を質に取り、金銀をあたへ、よく云ひふくめ酒肴をもたせ三津浦へ遣し、嘉明近年松前を領し仕置宜しからず、百姓ども困めり。河野一族の人々、國に入り給はん事百姓の安堵なりと悦祝ひ申すなり。城中にゆかりの者候うて具に承り候は、嘉明關東へ出陣軍兵を拂つて連れられしゆゑ、今残りといまる者ども多からず、大かた老衰病者にて、一人も軍すべきものなし。佃十成も大病なり。鉛薬も乏く落支度の外更になし。はや逃去りなんと口々に云はせられたれば、安藝の士大將さも有るべしとて、彌おこたりけり。彼百姓一人立歸りて其有様を告げ知せければ、さらば今夜風雨の紛れに、一夜討すべしとて、嘉明の貯へおかれし白布の胸肩衣に裁縫ひて配りあたへ、十成は背に松の字を墨にて書きてしるしとし、合詞を定め、首は

とるべからず、貝の音を聞かば、勝負を止めて引きとれと約束を定め、慶長五年五月十八日戌の刻に打立ちけり。忍の者歸りて、今夜は村上が陣所に集りて酒盛の半なり。樽山の濱邊に張番の足輕松前のおさへに置きたりと告ぐる。十成打破りて通らんは易けれども、途中に滞りて、三津浦へ聞えなば、謀いたづらに成るべしとて道を替へ、江戸山を越えて子の刻計に三津浦におし寄せ、所々の民家に火をかけて切つて入りしかば、大にさわぎて物音も聞きわかず。十成薙刀を提げ、真先に進みけるに、掃部敵寄たりとて何程の事か有るべきとてかけ出づるを、夜討の大將佃次郎兵衛なりと名乗つて掃部をつき伏せ、敵あまた切りはらひ、貝を吹立て、軍兵をまとひ、しづくと引取つたり。掃部を始め内匠兵庫も討たれければ、引退きて久米の郷如來寺に楯こもる。翌十九日十成又おし寄せければ、如來寺にも支へかね、道後山に引退く。十成も深手數多負ひて日は暮れぬ。松前に引取りぬ。道後山の安藝の人に近郷の百姓を相從へ、刈田焼ばたらきして松前の城を攻めんとすると聞えければ、九月廿三日加藤内記道後村へ押寄せて相戦ふ。十成は久米の戦に手負ひて出でざりしかど、重ねて安藝の加勢來らば始終いかでか勝つべき。今急に追拂はずば後日の事覺束なし。手疵を痛みて城中に死なんより、敵に向ひ快よく討死せんとて、城下の町人近郷の百姓二百人計あつめ具足を着せ、妻子を質にとりて俗旗を指させ、十成引具して道後村にかけ向へば、味方は力を得、宍戸平岡に従ひたる一揆ちりくになりければ、終に風早の浦より船に乗り藝州に引退きけり。關ヶ原の後嘉明松前

に歸りて戦功を撰ばるゝに、夜討に首をとらざりしかば、十成村 upper を討取つたるは明かなれ共、其功をいはず。生捕の者に尋ぬるに、村上が陣へ先だちて切込んだる人の白き肩衣の背に、松の字の大きに書きたるが、薙刀にて村上を突伏せしを間近く見たりといひければ、嘉明十成が功によりて、松前をとられず。殊に安藝の物主三人を討取り、大洲の加勢を辭せし事勇といひ忠といひすぐれたりとて、太閤より賜ひたる物具に感状を添へて、浮穴郡久萬山の庄六千石を與へられけり。慶長十八年嘉明温泉郡勝山に城を築き、松山と名付け、松山の北に別に一廓をかまへ、五つ矢倉をあげて十成を置かれぬ。元和元年大阪の軍にも十成嘉明の嫡男式部少輔明成に従ひて、淀川を渡り城兵を討取りけり。同年十成關東に召され、葵の御紋の時服を下されぬ。寛永四年嘉明奥州會津に移りて十成に一萬石をあたへられけり。寛永十一年十成病おもく、子共どもを集め、吾若かりしより戰場に出づる事度々にて、疵を蒙る事十三ヶ所、就中豫州久米の合戦に、鐵砲頭の右にあたりて、なほ其鉛皮の中にあり。然れども運盡きざれば、死せずしてかく老年に及んで病の爲に死せんと覺ゆるなり。是を以て思ふに弓箭取身は少しもきたなびれたる志あるべからず、かたみに是を殘さんとて、剃刀をとりて皮を破り、鉛丸をとり出して前に置き、三月二日八十二歳にて端座して終れりとぞ。

大久保忠佐に三枚橋の城を賜ひし事

關ヶ原の亂治りて後、大久保治右衛門忠佐に二萬石賜ひて、三枚橋の城主たりしに、渡邊忠右衛門



御近習ごきんじゆの人に向ひ、治右衛門ぢうゑもんを武功ぶくうの者と思召おもひめがしけるが、此忠右衛門ちゆうゑもんに逢あうては逃にげたりと申しけるを聞きし召めがし、治右衛門ぢうゑもんを召めがされ、先年せんねん三河みかわにて一向宗いっかうしゆう一揆いっぎの時とき、忠右衛門ちゆうゑもん兄弟あにがた弓ゆみを持もち其餘そのよあまたの鐵砲てつぱうを持もちたる者もの七人ななにんに、汝一人なんぢひとり立向たちむかひて、相手あひてがけの勝負しょうぶならば、手なみの程ほどを知らすべきに、多た勢せいの飛道具とびだうぐに吾一人われひとりかゝりて犬死いぬじすべきにあらずと、大音おほねに詞ことばをかけて引退ひきひききたると聞ききたり。然しかるに、渡邊わたなべめがごとく無理むりをいふ男おとこには、とりあはずすて置くおくくにしかず、必かならず此後このちも聞きかぬ體ていにてあれとぞ仰おほせられける。

卷之十八

細川幽齋ほそがわゆうさい古歌こかを書かきて忠興ちゆうかうを諫いさめめられし事

細川忠興ほそがわちゆうかう諸事しよじ嚴正げんせいに過あやむると、父ちちの幽齋ゆうさいに告つぐる者ものありければ、忠興ちゆうかうの長臣ちやうしんを呼よびて古歌こか二首ふたしゆ書かきてあたへらる。

あふ坂あふさかの關せきのあらしの寒ふせけれとゆくへしらねばわびつゝぞぬる

此歌このうたのこゝろを察さつせよ。

まこも草くさつつのぐみわたる澤邊さわべにはつながぬ駒うまもはなれざりけり

此歌このうたのこゝろをよく思慮しりょせられよと、忠興ちゆうかうにいへと教訓けうくんせられけり。

關せきのあらしの歌うたは、古今集こきんじふよみ人ひとしらず、まこも草くさの歌うたは、詞花集しくわじふ俊惠しゅんゑ法師ほふしのうたなり。

本多忠勝ほんだちゆうかつ功名こうめいを論ろんせられし事

或人あるひと本多忠勝ほんだちゆうかつに思慮しりょある人功名こうめいをとげ候まうか、思慮しりょなき人功名こうめいをとげ候まうかと問とふ。思慮しりょなき人も思慮しりょある人も功名こうめいするなり。思慮しりょある人の功名こうめいは士卒しそを下知しし、大なる功名こうめいをとぐる物ものなり。思慮しりょなき人は、槍やり一本いっぽんの功名こうめいにて、大なる事はなしと答こたへられけり。

井伊家いゐけの附人つけひと連署れんじして直政ちかまさを諫いさめめし事

非伊直政壯年銳氣甚しかりしかば、東照宮よりつけ置かれし「諸本脱」以下連署して諫書をさへげたりし其中に、人には必向ふざすと申す事を思ひ設けたるが然るべく候。臣等が前の主君の事を申すも如何なれども、信玄はわかき時より一つとして心より善事はなき人にて候へども、常に越後の謙信を以て向ふざすとして、謙信にまさるべきとつとめはげまれ候ひき。されば信玄一生の間手をおろしたる大事の合戦五度に及び候へども、大なる敗北はせられず候。殿にも本多中務大輔忠勝を以て向ふざすとして、勉めておとらじとはげみ給ひ候へかし。いにしへより進まず退かざる良將と申すは、中書相かなひて覺えたりと書きたりけり。

堀秀政を名人太郎といひし事

堀久太郎秀政後左衛門督といふ。士より下部にいたるまで、つかふ上に下の情をつくすを第一に専ら心がけられたり。かゝれば、下に恨むる者なし。奉行の従者と荷を持つ者と輕重を争ふを聞き、其荷物を自らふりかたげ往來し、我力は彼者よりまされり。然れども一里ばかり負ひたれば勞れたり、持つ事あたはじといふは、尤なりと決断せらる。或時武者押にはたさし後れたりけるを尤めけるが、秀政自ら旗を負ひて試み、さては吾乗つたる馬の肝よき故ならんとて、肝よき馬に乗りたれば、旗さし後れざりき。世に名人太郎といひけるは、かく下をつかふ心を用ひられし故にこそと、人いひあへりけり。小田原陣中に卒せらる、年三十八なりとかや。

大久保忠隣忠直の事

大久保相模守忠隣は忠貞の人なり。關ヶ原の時台徳院殿木曾路より攻めのほらせ給ひしに、石田敗北の後、御著陣ありしかば、東照宮御對面まします。忠隣近習の士を以て申したき事の候と申す。中口にもいひ出されずといふを聞き、さらば直に申さんとて、座を立ちけるを、さらば先申して見んとてかくと申せば、色を變じて内に入らせ給ひしが、やゝ有りて相模は歸りたるかと仰せあり。猶待居て退かんけしきは候はずと申せば、あくまで剛直の者なり、よも空しくは歸らじとて召されけり。忠隣御前に參りて、先何とも言出ださで涙を流しければ、それはいかにと仰せ有る。忠隣此度上田を攻め候うて道に遅留の候ひき。上田を攻め候は、忠隣と正信がしわざに候。二人の中一人は召出され罪を糺させ給ふべきにて候。さはなくて不和に及ばせ給ふ事、ひが事にてこそ候へ。過ぎし年大軍にて攻めたりし時も、眞田が智勇に挫かれ候ひき。上田固くとも遂に攻落すべきをすてゝのぼらせ候ひしに、關ヶ原にて、石田今しばし支へなば、など戦功のなかるべきに、石田もろく敗れて手を空しくなし給ひぬ。君萬歳の後に、日本を治め給ふべき御嗣に人の侮り奉るべき事をなし給ふは、怒にひかれて忘れさせ給ふにや。とく嗣君に自害をすゝめ奉るべしと申されしに、汝が言無禮なりとて立たせ給ふ所をおしとめ、忠隣が申處理ならば聞し召し入れられよ、正しからずば、首を刎ねられ候へと憚る氣色なく申せしかば、聞し召し入れられ、汝がいふ所尤なりとて、やがて御對面おはしま

しぬ。忠隣は相州小田原の城を賜はりたりしが、慶長十八年切支丹を改むる仰を蒙りて、京都に赴きたりしに、謀反の志あるよし訴へ申す者あり。本多正信忠隣が惡逆の志あるよし申しけると世に申せしが、忠隣をば井伊直孝の領國佐和山にとぢめ置かれけり。板倉勝重仰を承つて忠隣が旅宿に行く。折節忠隣恭を圍み居たるに、かたへの人殿を流罪の爲に板倉來れるよし云ひけれども、驚く體もなく勝重に逢ひ仰せを承り更に恨の色もなし。從者大に怒り、讒言により流罪にせられ候事、口惜しき事なり。切死せんといひしかば、京都のさわざ大かたならず、二條の城にて門々を守りけり。忠隣武器を細にてからげ、勝重にさづけしかば、京都のさわざしづまりぬ。夫より佐和山に行かれしかば、直孝よくいたはり申されしが、ある時申し開くべき旨候べし、直孝承りて達し申さばやと語られしに、忠隣理を正して申さんには、聞し召し明らめられん事必定なり。さらば讒言を聞し召し、無罪の者を流されし過を人しらは、君の非をあぐるなり、此忠隣が志にあらず。われかく朽果つるとも、つゆちりばかりも惜しからずといはれしかば、直孝感服せられけり。忠隣つれづれのあまりに、忠臣記二卷を作られけるとぞ。

天野康景廉潔高國寺の城を去られし事

天野三郎兵衛康景は、天野遠景が苗裔にて、百貫の地を領し來りしを、東照宮瀧坂におかせ給ひ、遠江榛原郡を切取に仰出されし大剛の人なり。後駿河の高國寺三萬石の地を賜る。駿府の城經營の時竹

をからせ積置き、足輕に守らせしに、御領地の百姓竹を盗みしを見咎めて、斬殺す。殘る者ども逃げちりて、代官井戸某に訴へしかば、井戸百姓を殺したる解死人を出せと天野にいふ。天野盜を殺す事罪にあらず。守る者罪あらば、先づ天野罪に行はるべしと云ひければ、井戸訴へけり。東照宮足輕を誅せよと仰出されしに、天野始のごとく申せしを聞し召し、天野は不道のわざする者にあらず、仔細あらんと仰せられけるに、本多上野介正純天野に逢ひて、仰せをいなむは臣たる者の道にあらず。臣として君命を承らざる事やあると云ひけるに、天野さては臣たらずば苦しうも候はじといふまゝ、に、三萬石の祿を辭して、慶長十二年三月廿九日高國寺を去つて行方しらす成りにけり。程經て大久保忠隣尋ね出し、年ごろ親しかりしかば、小田原の入かといふ所に隠し置かれけり。罪なき人を殺すに忍びず、三萬石の祿をすて、隠れし志を人々稱しあへり。

井上正就駿府へ御使の事

台徳院殿太田某に五百石の祿を賜はりし時、太田折紙を擲げかへし退出しけるを、死罪と思召しけるに、井上主計頭正就駿府に申して後罪を定められ候へと申す。さらばとて、井上駿府に參りて、東照宮にかくと申すを聞し召し、泰平久しかるべき基なり、太田は誠に無禮なり。凡賞罰中らざれば、下の恨むるは常の事にて、太田も無禮とは知りたらん。己が身をすて、諫むる心なるべし。臣下の直言して諫むる者怒りに逢ひて刑罰せられ、家を亡し、大軍の中かけ入る者は多くは身を全うして功名を

立つる故に、昔より諫臣を忠の第一とす。然るに今太田にあたふる祿賞に中らざるやと、汝を以て問はるゝ事、政務に心を盡さるゝなれば、秦平の基と謂ふにてこそあれ。汝にものがりせん事あり。われ三河にて池の鯉を鈴木久三郎が取て煮て喰ひ、信長より賜ひし酒をもわれにあたへたりとて、おもふさまに飲みたりき。吾怒つて眉尖刀を提げ、鈴木を呼びしに、鈴木肌をぬぎ大音をあげて魚に人を替ふる不道にて、天下に旗揚げんとは思ひもよらずと罵りし時、予鈴木が詞に屈伏して内に入り、つくづく思ふに、走りの者池にて鳥を取りし罪にてとちめ置きしを諫めん爲ならんと心付きて、走りの者を赦し、鈴木を近付け汝が志返すべく悦しきといひしかば、鈴木涙を流し、密に申すべき事を、今戦國の時なれば、手あらなるがよきと存じ候て無禮の詞を申せしに、かゝる仰を承りて辱さの身にあまりて候といひしなり。今太田にも三千石の祿をあたへられよとて、井上をとめ給ひ、御刀を賜はりしかば、江戸に歸りてかくと申す。太田にも祿を増賜はりしかば、涙を流して喜びけり。台徳院殿井上には、汝が詞によりて孝行を知り、賞罰の道をわきまへたりと仰せ有りて、左文字の刀を賜りけり。

東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松におはしませし比、ある夜本多正信御前に有りしに、誰人にてかありけん、姓名を知らず 懐より書を取り出し諫め奉るべしと、かねてより存する事の候うて書き候ものなりと申せば、大によろこば

せ給ひ、夫よめと仰せ有りければ、披きてよみけるに、一條よみ終る度毎にうなづかせ給ひ尤なりと仰せられ、よみ終りければ、汝が志感するに詞なし、これより後も心置きなく告げよ。返すべくも神妙なりと、くり返し仰せければ、忝きよし申して退出す。正信居残りて、只今諫め申せし事用ふべき事に候はずと申す。東照宮大にけしきかはらせ給ひ、いやとよ、己が過はしらすして過ぐるものなり。國を領し人を治むる身には過を告げ知らせ諫むる者は鮮くて、唯諂ひて主君のいふ事道にたがひてもさは候はじと、詞を返す人はなきぞかし。諫をふせぎし人の國をうしなひ身を亡し、後世の笑ひ草となりしためし多し。只今われを諫めし者、日比心を盡し見及ぶ様に付き諫めんと思ひて書きしるし、時もあらば見せんと思ひ居たりし志、何にたとへんやうなし。其の用ふべきと用ふべからぬとはよらざるなり。唯彼が忠心を愛するなりとぞ仰せける。又或夜の御物語に、凡主君を諫むる者の志軍に先がけするよりも大に踰えまされり。其故は戦に臨みて一番に進み出づるは、素より身をすてゝの事なれども、必しも討死せず。又討たれたりとも、後の世に名を残し死後のほまれとなるぞかし。幸に功名をとぐれば、恩賞にて家富子孫榮ゆるなり。されば得有りて失なき忠なり。諫は然らず、主君不道にて善をにくむにすゝみ出て直言する者、十に九つは刑罰にあひ、妻子をほろぼし果つる様に成行くぞかし。失ありて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし、諫言は聊も身の爲をおもふ心あらば、いかで主君の前にて直言すべき。唯人に君たるもの、賞すべきは、諫臣なりとぞ仰せあ

りける。

三河國箭矧橋を修造せられし事

箭矧の橋水に壞たれしを造れと仰せられしに、兼てより船渡にすべしといふ人の有りけるが、幸にて候、船渡よかりなんと申すを、東照宮汝等未を知つて本にくらし。費をいとふは民の爲なり。往來の旅人を苦めんは、吾志にあらず。又要害も其もとを論ずれば、唯國民の和と不和とにあり。險をたのみて敵をふせぐは、道を知らざるなりとて、橋をまたかけさせ給ひけり。

山名禪高徹衣を著られし事

いづれの時の事にや、山名豊國入道禪高古き羽織の所々徹れたるを著て、東照宮の御前に參られしに、それはいかにと仰せ有りければ、萬松院殿より賜はりたる物にて候と申すを聞し召し、蓆を忘れず本に背かぬ者かなと御感有りけり。

東照宮禮を正し給ひし事

東照宮大度勇略におはしませし事は、誠に申すも愚なり。中にも禮儀を正させ給ひしかば、今川義元討死の桶狭間を御鷹狩にて過ぎさせ給ふ時、必御馬より下りさせ給ふ。是は御幼時義元のよしみを思召し出されての事なりけり。上杉景勝に途中にて行逢はせ給ふ時、興より下りさせ給ふ。是も父謙信のよしみを思召しての御事なり。

駿府城中へ水を引かんとせられし時の事

駿府の城中の池に、阿部川の水を引入れよと仰せ有りしに、水筋に小寺有りければ、外の處に引移さんと申しけるを、東照宮寺を移す事をとめ、水を入るゝにも及ばずと仰せられけり。此ほどの寺移し候はんに、いか計の費の候べきといへば、それは大なる僻事なり。田の爲に水を引かんに左あるべし。吾庭の水はなぐさみなり、夫に人を勞する事やある。無益の事に地を捨つるは、敵に取られたるに同じ、百姓の苦みなりと仰せられぬ。

東照宮御中指の事

東照宮御指の中節たことなり、年老いさせ給ひては屈伸しがたくおはす。是はわかき御時より數度の戦ひに、初の程は應にて下知せさせ給へども、事急なるに及ては、かゝれゝとて御拳にて鞍の前輪をたゝかせ給ふに、血流れて出る。かくのごとき事幾度ともなき故となり。

金の七本骨の扇の御馬印の事

東照宮金の七本骨の扇に、日丸付けたる馬印は三河の設楽郡牛窪の牧野半右衛門がしるしなりしを、永祿六年に乞得させられて、馬驗となし給ふ。夫より前の御印は、厭離穢土欣求淨土の八字を書きたるにて大樹寺の登譽が筆なり。そのしるし明暦丁酉の火災にかゝれりといへり。然れども、扇の御しるしは其前よりの事にや。天文十四年、公矢矧川にて織田家と軍有りし時、利なくて危かりしに、

本多吉右衛門忠豊と岡崎に入らせ給へ、御馬驗を賜はり討死すべしと申せども許されず。扇の御馬  
じるしを取りて、清田噉にて討死しける。其間に危きを逃れ給へり。御しるしは忠豊が嫡子平八郎忠  
高が家に相傳へ、忠高も又戦死しける。其子忠勝が時に至りて、永祿二年、東照宮乞返させ給ひたり  
と云へり。

加藤忠廣物語并飯田覺兵衛が事

加藤肥後守忠廣或夜物語に、吾は大力あれかしと思ふなり。重き甲二領重ねていくさに出ば、恐る、  
ことあらじと云はれしを、飯田覺兵衛つくくと聞き、先殿物具一領にて數十度の戦に終に手負はせ  
候はず。朝鮮に攻入りて鬼將軍と異國の人も惶れ候。死生存亡は天命にて人力の及ぶべきにあらずと  
いへども、能く戦へば生き悪しく戦へば死ぬると申す事も候。國中の民を撫育し諸士よくなつき従ふ  
時は、席上にて勝敗の理を論じ、軍兵を下知して進退自然に整ひ候へば、三軍の著たる物具は皆大將の  
一身に重ね著たると同じ事に候。たれか鋒を争はん。臣は力を好ませ給ふ事、然るべしとも存じ候は  
ずと申して退出しける時、先殿にはいかでかくまでおとり給へるとて、聲をあげて泣きけるとぞ。此  
覺兵衛は清正の時武功の大將なり。初は角といふ字なりしに、太閤覺の字に書替へさせられしとぞ。  
覺兵衛云ひけるは、我一生主計頭にたまされたり。初て軍に出て功名しける時、朋輩多く鐵砲に中り  
て死しけり。危き事よ、はや是までにて武士の仕へはすまじきとおもひたるに、歸るやいなや、清正

時をすかさず今日の働神妙いはんかたなしとて刀を賜りき、斯の如く毎度其場を去りては後悔すれ  
ども、主計頭其時をうつつさす陣羽織或は感状をあたへ、人々もみな羨みてほめたたりしゆゑ、其に  
ひかれてやむ事を得ず塵を取り、士大將といはれしは、主計頭にたまされて、本意を失ひたるなり  
と、忠廣没落の後、京に引籠り再仕を求めずしてありける時、語りけるとかや。

前田利常戦死の士を弔はれし事

前田利常大阪の軍に功有りて加賀に歸り、討死したる士の爲にとて報恩寺といふ一字を建立し、戦死  
の人の追福にせられ、自ら彼寺に詣し時、討死の士の親族を供に連れられける。自ら香を焼き涙に沈  
みて深く悲れしを見る人聞く人、此殿の爲に死なん事露塵計も惜しからじとて、一同に哭し泣きけ  
るとぞ。

黒田如水遺言の事

慶長十九年黒田孝隆入道如水病重く成て、子の甲斐守をよび、汝は親にまされる事有り。我もまた汝  
にまされる事二つあり。語つて聞かせん。今我死ば我士はいふにや及ぶ、汝が士大將より士に至るま  
で悲みなげくべし。汝死して我ながらへたらば、誠に大いなるさかしまことなれども、如水おはしま  
すとして、力をおとす士有るべからず。是人のなづき従ひて吾に服する事汝に勝る其一つなり。次に我  
は無雙の博奕の上手なり。關ヶ原にて石田今しばらく支へたらば、筑紫より攻登り、下部のいふ勝相

撲に入りて日本を掌の中に握らんと思ひたりき。其時は子なる汝をもすて、一ばくちうたんと思ひしぞかし。又紫の袂に包みたる草履片足に木履片足取出し、軍は萬死に入つて一生にあふ習ひなり。十全を思慮しては叶ふまじ。たとへば草履木履をはきたるごとく、二つものかけの軍をする心得せられよ。汝は才智有りて、先の事を豫め料る故に、大功はゆめ／＼叶ふまじ。儲めんづと云ふ物は飯を盛るものよ、上天子より下百姓に至るまで、一日として食物なくては世にながらふる者はなき事なり。國を富し士卒を強うするの根本一大事此飯入にあり。必わするべからず。かゝる故に、此めんづをかたみに參らすといはれけり。

本多正信加藤嘉明を諭されし事

加藤嘉明關ヶ原の戦ひに大功有りしかば、五十萬石を賜はるべき處に、本多正信其事をおしとめたりと嘉明傳へき、本多を恨みられけるに、正信行かれしかば、願ふ處とて對面せらる。正信の曰く、大國を賜ふべきとなりしを、我然るべからざるよしを申止めて候ひき。是忠ある仔細の候。其仔細は御身は武勇智謀たぐひ稀なる人にて、又豊臣家の恩深し。人の疑有るべし。功成り名遂げて身退くと申す事の候。今領國の少きに、聊の恨なくおはさんに、恩遇子孫に到らん。若大國を領し給はば、必人の後にかゝむ人にあらずと世疑ひおそれて、禍あるべしと存する所なり。去れども、恨みられんには力なしと云ひたりしかば、嘉明詞なくて止みけり。

安藤直次先見井本多正信遺言の事

安藤帶刀直次物がたりの時、本多上野介正純は家亡ぶべきなりと云ひしに、程なく本多に祿を賜はりけり。人々直次にしか／＼いはれしに、いかにと問ふ。直次聞きて後を見られよと云ふ。又下野の宇都宮二十萬石を賜はる。人々又直次に、我等承り候所へくるしうも候はず、再三かゝる事ないはれそといふ。直次打笑ひ、正純家亡びん事近きにありといふ。やがて正純國を召放たれしかば、人々又直次に神智有るが如くに候、いかなる故にやと問ふ。直次さればとよ、台徳院殿關ヶ原の軍の時木曾路にて逗留の有ししを、正純是みな父正信が仕わざに候。死罪に行はれなば、嗣君の過なき事を人存すべきよし申せしを、台徳院殿、我爲にかくまで云ひつると仰せられし由、正純聞きて己が功と思へり。父を死罪にといへる、三千の刑不孝にまさる事や候。此家の亡ぶべき理なり。まして忠を君にいたすは、誇るべき事にあらず。正純の亡ぶる、いと遅かりきとぞいはれける。

正信に三萬石の祿地まし賜はりし時、臣はもと應帥にて候を、かやうに取立てられ候へば、只今の祿分に過たり。必天の冥加に盡き申すべしと固辭せしが、其後子の上野介に、我なからん後汝に祿をまし給はりなば、三萬石は我に賜はりたれば辭すべからず。それより増賜はりなば、必固辭すべし。祿の身に過ぐるは禍なりと遺言せられしが、正純父のをしへに背き、終に國亡びたりといへり。

台徳院殿御行狀の事

台徳院殿は殊に禮儀正しくおはしまし、荷にも疾言おはしませず。事なき時は、泥塑人のごとくになんと人申せしが、極めて下民に御心を盡させ給ひ、孝道深くおはしましけり。又信を失ひては、天下は保ちがたしと常に仰せられ、御鷹狩に出で給ふ時も時を定められ、御膳の半にも辰の鼓をうてば、箸を捨てて出給ふ。近習の人奉膳終らざれば、辰の太鼓をうたす。非伊直孝是を聞き、近習の人々に向ひ、是君を愛すると思へるは大なるひが事にてこそあれ、君正しき道を好みたまは、汝たちも正しき道にて仕へられよ。かやうに事を料られなば、必阿諛をなして寵愛を好するにも及ぶべし。とく膳を奉りて、鼓の前に終りなんに、何の苦しきことやある。是等は誠に小事なれども、君を欺くともいふべし。君子は禍を未然に防ぐものなりと戒められけり。

林道春格言の事

直孝ある時林道春に物語して、焚槍が勇氣たくまじきと聞く、されども弓箭取の珍しき事にもあらす。我とても槍が下に立つべからずといはれしに、道春槍は誠に穢多の子にて筋目もまさり給へり。されども爰に一つの故の候。戦ひに臨みて矢石の中に先掛するのみを勇氣とはいふべからず、是は匹夫の事なり。槍が顔を犯して高祖を誅め申せし事有り。足下にはいかゞ候べき。廣言をはき給ふとも、よくく自ら省られよ。槍に及ばぬ事の有るべきといへば、直孝恥る色あり。是は其比大

猷院殿御病氣とて、大名に相見なかりし故に、斯いはれしとかや。世に道春一生の格言とせり。

藤惺窩秀吉公を論せられし事

惺窩藤斂夫東照宮の御前にて、秀吉は大膽なる人なれども、大心なりとは申すべからず。朝鮮より明へ攻入らんとは、大膽なれども、秀吉を信長のあとへ仰がれず、自立して日本を掌握せられしは、大心にあらずと申されけるが、後に此事を四辻亞相公理卿にかたる人あり。亞相の曰く、われも其論尤なりと思ふなり。大佛建立は、かの猿どころがはなれぬなりといはれき。

紀伊大納言頼宣卿諫言を歡び給ふ事

紀伊大納言頼宣卿は、東照宮の十一男にておはしませしが、幼き時より東照宮の膝下におはして、文武の御物語を聞き召し、尋常の質におはしませず、諫を納れ給ふ事も、なみくならず。或時腰帶といふ備前長光の刀にて、立ちげさを試み給ひしに、快く切れて、其まゝ立たるをつき給ひければ、二つに成りて倒れけり。左右一同に驚入るばかりなり。大に悦びて、那波道圓に、異國にもかゝる利劍もありや、又かく手のきゝたる人やあると仰せ有りしに、道圓承り、異國には龍泉太阿など申す利劍も有之候。人を殺して樂む人は、夏の祭王殿の紂王と申す悪王おはしまし候。凡人を害して面白しとおもふは、禽獸のしわざにて人間にてはなく、日本にて罪人を切り候は穢多こそいたし候へと、憚る色なくいひしに、つと入り給ひぬ。やがて道圓を呼びて、先に申しつる所こそ至極の道理なれ、これより



再び自ら試る事有るまいぞ。諫言こそ返すくも淺からねと、賞美ありけり。又ある時大高源左衛門といふ士に、司る事に付て、われ不幸にして良き士持たざる故、何事もおこたりに成りぬとしかりて、人のなきなりと有りしを、道圓聞きて、己が目のくらくて人のよしあしを見明めざるを咎めずして、人のなきとは何事ぞや。外様古參にも新參にも、よき人を選び出さんには、智者も勇者もいかほども有るべきに、人のなきとは目の明かぬ故なりと直言しけるを、つぐくと聞き給ひ、道理至極せりとて、再三感せられ、深く先の詞を悔み給ひけるとぞ。道圓常に其子にかたりて、亂世には臣士君の爲に死する事有り。太平の世諫めて死する事を忘るべからずと戒めけり。

由井正雪反逆の時頼宣卿出仕の事

慶安四年 辛卯四月二十九日 大猷院殿過ぎさせ給ひて、其七月江戸にて浪人由井正雪反逆をたくみ、紀伊大納言殿の仰せと稱し、判形を似せ謀書を所々に遣し、丸橋忠彌芝原又左衛門以下數百人徒黨し、御鐵砲の藥藏の奉行川原重郎兵衛も是に與し、埋火にて遠くより火をさし、徒黨の者ども船にて海上に出づる時、藥に火を移して江戸を一時に焦土となさんと巧みたりしに、心替したる者三人有りて、訴へ出であらはれしかば、丸橋をはじめ生捕られ、正雪は駿河宮の町にて自害しけり。右の謀書を數通浪人どもの許に有りける故、大臣集りて一大事と案じ煩ひ、とかく頼宣卿を殿中へ召して、此書を出す外有るべからず、其時様子あしかりなんには、直に捕へ申せとて、くつきやうの兵をかくし置て出仕を待居た

りしに、尾張中納言光友卿、水戸中納言頼房卿も出仕有り、此事を告げ申しけるに、尾張中納言何條かかる企有るべきや、是謀書にてあらんとなりしに、水戸中納言も、いかにも左候ひなるとぞ宣ひける。されども、各手に汗を握る處に、頼宣卿出仕有りて座に付き給ひしかば、井伊直孝、酒井忠勝、松平信綱、此度浪人どものたくみの次第を申述べたる處に、阿部忠秋かの狀を披露しけり。頼宣卿殘らず見給ひて、氣色うちとけて、返すくも目出度こそ候へ、もはや何のおそるゝ事も候はず。其仔細は彼徒黨の面々外様大名の判を似せ、謀書を作りたらんには、三代の御恩を忘れ、もしや氣ちがひて謀反を企つるとの疑も有るべきに、我等が判を似せたる故、事故なく治りたるなり。幼き公方の御身にて、もし御疑ひもあらんには、我等只今國さし上げ、いかにも仰せに従ひ奉るべし。天下安全にてこそあれと、悅面にあらはれて見えしかば、兩公をはじめ一同に感じ譽めぬ人もなかりければ、頼宣卿、其浪人どもの中壯年の者四五人助け置かれよ、重ねて詮議有るべき爲なりとの給ひけるとぞ。

水野重長諫言の事

頼宣卿、紀州にて松江の西の庄といふ所にて鷹狩ありて、港に船を付け陸路を経給ひしに、折節春きたる麥を莖にならべ、僅に路明きたりしかば、皆農民の年中の糧なるぞ、供の者ふむべからずと再三制して歸り給ひければ、百姓ども悦びあへりしを、供なりし横目の、長臣の前に參りてかゝる次第に候と申す。何れも感じあひけるに、水野淡路守重長一人、今日殿の御ふるまひこそ心得ね、かゝる事故、下々

の奴原殿の内胃を見て馬鹿にするぞとよ、殿の通らせ給はんには、麥を脇へ引きのけ、水を打つてこそ有るべきに、何ぞや麥をほして通路をさゝはる事奇怪なり。一國の主の仁はさは無きものなりといひしを、頼宣卿聞き給ひければ、君も君たり臣も臣たりと人々申しけり。

松野惣太郎前田權之介賞せらるゝ事

頼宣卿馬を乗給ひ、駟の中に頭巾の風に落ちけるを中に取つて、又鞍に乘直り給ひしを、吉見喜右衛門といふ者、松野惣太郎といふ者に語りけり。折節頼宣卿馬場におはしける時なるに、惣太郎聞きて殿にはいまだ馬上は練れ給はぬなりといひければ、頼宣卿仔細いかにと尋給ふ。惣太郎、さん候、東照宮は海道一番の馬上の御名人と申し奉りたると承り候。小田原陣の時山道を武者押して過ぎさせ給ふ。丹羽長重、長谷川秀一、堀秀政衆筋をおしけるが、東照宮の御旗をみて皆々おし前を觀る。茲に一つの谷川の細橋有り。此の橋へ行かゝる人々橋の下を皆歩みわたりにす。東照宮馬上にて、橋際へ著かせ給ひしかば、三人の大將聞ゆる馬上の達人の、細橋を渡さるゝ、みよと云ひあへりけるに、馬より下り玉ひ、御馬は遙の下を口つき四五人にて牽渡しけり。人々是はいかにと云ひけるを、かの三人の大將大に感じ、馬上の達人とは是をこそいふべけれ、馬上の達者は危き事はせぬものなり。殊に大事の軍を前に置きての事なれば、かく有るべき事よと感じたりと承り傳へ候と申しければ、頼宣卿つくづくと聞きて大によろこひ、其詞を書きて硯箱に入れられけり。又前田權之介といふ士、ある時頼宣卿へいひけるは、今朝ひとり思慮せる事の候ひしに、大將の一言ほど重き事は候まじ。千金にも人の命を替ふるものは有るまじきに、大將の一言により、忽命を露ちり計もをしきとは存する事なきは、昔よりの事に候と申しければ、とかくの詞なくて、時服をあたへ給ひぬ。

佐々九郎兵衛經濟格論の事

京極 刑部少輔高知播州龍野を領せり。國用甚乏しかりければ、公儀の事は堀田若狹守に計り、藤堂大學頭高次高知の長臣岡七郎兵衛定次相加りて評議し、新參の士に年を限りて永く暇を出すべしとの事なり。佐々九郎兵衛長光年老いぬれども、思慮ある者と呼ばれければ、江戸へ行き藤堂堀田に相會す。評議の始終書記して、佐々に見するに、是は存寄らざる事なり。是非新參の面々に暇を出して足らざるを足さんとならば、祿多き者然るべし。かく申す佐々一人が祿數十人より多し。流浪すともさのみ艱難にも及ばじ。小祿の人々は道路に乞食せん。是不仁の至にて行ふべき事にあらず。つくづく論せられよと諫む。佐々が思慮を問はるゝに、高次五百貫目を取次で貸されんには、五百貫目は臣歸路に京にて借り求めん。されども爰に一つの大切の事あり。幾度かくすとも、殿の能、歌舞妓、鷹狩、屋敷の設、衣服器物萬事に費をなし、國の長臣其職に有るもの身がまへしてあらば、何の益かあらん。此諫言は外戚といひ大祿なれば、高次の任なるべしといふにより、一座感じて佐々が言を用ひ、暇を出さるゝ者一人もなし。さて長光定次に向ひて、此事を一旦評議に及ぶとも、國の長臣とし

て狼に順從して一言も争はず、不忠なり。世の國の長臣となる者、其身の饒なるを省す、尙貪ぼる心より其主君に諛ふ。古より軍に臨みて死するは多く、諫めて席上に死する者は尠し。成難きをなすをすぐれたりとす。何ぞ諫めて死せざるべき。大かた財用の乏しきに及びて、よその金銀を借求めて忽困窮に至りては士の祿をはぎとり、約束の詞を違へ、非義不道の事を申行ふにも成りぬるぞかし。常に儉ならで足らざるに及で、俄に思ふるとも、其本正しからずば、武備を全うせんとおもへども、いかで事よく成るべき。君臣とも國郡を盗み祿を竊むの凶賊なるに、其恥づべきを恥とせず、是非なき事ならずや。汝其職に居て、かゝる心なきはいかにといへば、定次一言の答もなかりけり。

不破彦三武備の事

加賀中納言利常の士、不破彦三四千石の祿を受けて、武名を知られたり。其子も同じく彦三といふ。性質愚鈍に見えて、常に怠りがちな事多し。是を諫むる人有りて、時節といふ事有りといふ。悦入候といひながら、聽用ふるしるしも見えざれば又いさめたり。其時不破あざ笑ひ、才覺ある御身五百石、我思なれども四千石、さのみな誹られ候ひそといへば、色を變じて、人の勝る劣る祿の多少によるべきや。何とてさほど理の不通なるぞといふ。不破それは我も知りぬ、今の詞は戯なり。亡父常に我を誠めて、小ざかしき利根だてなる事ゆめくすべからず、人の心に入らんとて、かりそめにも諛ふ事有るべからず。唯守るべきは義の一筋なり。汝武勇の身なり。士の義を忘れざれと申しおきたりしに、

違はんかと日夜是を勤むるの外他事なし。衣食の美を好まず、従者と艱難を同じくせり、日本第一の大家なる加州の士中、我と祿同じき者多し、くらべ見られよ、人馬のすぐやかなる、武具の揃ひ整ひたる、我に勝る者有りとも覺えず。又利にたよりたる事やなしたる、誂ひたる事や候、偽を申したる事や候。平生日々身に省みて、弓箭の家を生れし職をゆるがせにせず。御身は亡父と親しき人なりし故、かく諫めたまはる事も忝くよろこび存するなり。されども正しき道に教へ給はるべきに、只時を見て世に従へとや、實の本意には非るべし。さらば言に従はずして本意に従はんは如何候らんと答ふれば、諫めし人大に心服したりけり。

井伊直孝衣服儉約の事 附戦國の時質素なりし事

井伊直孝大阪冬の軍に物見二騎をやるに、雨に濡れて歸りければ、則著られし小袖二つを脱ぎてあたへられけり。扱安藤帶刀の許より、小袖をもらひて鳥の小袖草袴にて、兩御所の御前に出でられけるとぞ。直孝の領地近江の彦根は、湖上より船を泛べて都に行くに甚近し。太平に及て、やゝ奢靡の風俗になりて、彦根の士も都近ければ、衣服美麗になりけるを、直孝戒めずして儉約にすべき道をはかり、江戸より歸る時、木綿の衣服を供する士の數密に用意して、彦根に著く時、俄にくばりて著せられけり。彦根の侍衣服をかざりて迎へけるに、供の士皆木綿の衣服なり。彦根の人々身を省て、美服を裂きたくありしとぞ。一事の法令をも出さず、彦根のおごりやみてけり。

戰國の時、衣服質素なる事論するを待たず。瀧川左近將監一益關東の管領として麻橋に至る時、諸將對面の爲來りしに、只今一つ有る衣服の垢つきたるを濯ぎて、赤裸にて候程に、暫く待ちて給はれといひし事語り傳へて、直孝の衣二つ物見の士にあたへて著替のなかりしも、皆符合したり。泰平に及て、や、衣服の美に成りしかども、寛文の頃まで尙其遺風あり。然れども金銀利倍の物語する事は、士の恥と心得居たりけり。酒井雅樂頭忠清大老たりし時、江戸の殿中にて、春の末にや休所にて、下に著たる服の汗づきたるを欄干にかけてるが、所々つぎたてたるが見ぐるしきと、歸りて語られしに、其事を司りし老女の、時移りて君の奢り給ふにこそ、わが一生は今の如くならんといひし事あり。此事は嚴有院殿の御時なり。古の武士は大やう無用の奢侈を縮めて、用ふべき事には吝ならざりしなり。關ヶ原一戰の後、成瀬吉右衛門は伏見に有り。其子隼人正駿府に在りけるが、折節父の許に金を贈りけり。居間の天井に釣置きて客來れば、あれ見給へ、肴を調味せよとて隼人が贈りたる金なり。是を見れば、美味に勝れりとぞかたりける。大阪冬陣和平の後、隼人が子何某祖父の所に來りければ、此度は事故なけれども、やがて事あるべし。其時よき馬をもとめよ、江戸廣しといへども、金二拾枚の馬はさのみ多からじ。これをとて、二人の孫に各金二拾枚をあてへしとなり。昔の士風想ひ見るべきにや。

## 永井尙政執政の用意を直孝に問はしれ事

永井信濃守尙政に執政の職を仰出されし時、井伊直孝に對面し、不肖の身かゝる任を受け、甚恐懼に及び候。教訓を得て其職に居候ばやと申されければ、直孝尤の事に候。我をしへ申すべし。身を潔くし、明朝來られ候へと有りければ、辱きよしいひて沐浴し、禮服して其明の朝行かれしかば、直孝出であひて、世の諺に、ゆだん大敵と申し候事定めて知られたるべし。萬事の危きに及ぶ事、皆是ゆだんより破るゝ事の候。此事かたく忘られなといはれけり。

## 中院通茂公幼宮を教訓の事

青蓮院の宮にや、幼き宮に中院内府通茂公後見たりしに、常に恭雙六を制せられけり。ある時公參られしに、將基の盤の在りしを見て、家司坊官を招き、兼て申せしにかゝる物を何とて置きたるぞ、はしたなき業は素よりあしけれども、たとひ有りても、年の長じて心づきの有りてやむ事もあるなり。是等の類はさしも悪事にあらざる故、其の事に慣れ空しく月日を過し、學問の志怠るものなれば、第一のあしき物にこそあれとて退出せられけり。又ある時其の宮に參る人尺八の名管を持ち來れり。重器なりとて人々遊びける時、公參りて、是れは誰れが業ぞ、かやうの物をとて、柱に打ちあてて碎かれけり。かの主の甚だ重器と思へるに、かく計になしていかにせんといひけるに、其の主來り事のよしを聞きて、誰某が持ちたると内府の聞し召されん事恐しく候ふに、それとしられ申さぬは、大なる幸に候ふといひけるとぞ。

松平信綱恭敬の事附信綱幼年奉公の事

松平伊豆守信綱出仕の時、裏付の上下著る事なし。屋敷に有りても、是を著られず。常にいはれしは、人の心衣服によりて變ず。出仕して恭敬を存せずしては、忠を盡す事を得難し。先衣服より心を付けて、恭敬をわするべからず。我をおいてはかくの如くつとめざれば、忠勤を成しがたしと云はれり。

信綱實は大河内金兵衛元綱の子、伯父正綱の嗣となる。幼名長四郎とぞ申しける。殿有院殿御誕生有りし時より、御家人になされ、御あそび相手にぞ候ひける。大殿の御寢殿の軒に雀の巢をくひ子を産みたるを、若君こなたより御覽じて、長四郎よ取りてまゐらせよと仰せけるに、年十一歳なれば、いかにもかなふまじきよしを申す。晝は驚きて飛去りもやせん、よく見置きて日暮れてこなたの軒に梯さして登り、忍び行きてとるべしと、有りあふ人々進めければ、力なく、日暮に忍びのぼり、やう／＼つたひ行きけるが、ふみ損じて御壺の内にとつとおつ。大猷院殿御刀とらせ給ひ、障子ひからせ給へば、御臺所ともし火とつて出でさせ給ひ御覽するに、長四郎にて有りけり。大猷院殿、汝は何ゆゑ爰には來れるぞと御尋ね有りしに、けふの晝御殿の軒にすゝめの子産みたるを見て、餘りのほしきにとりに參りて候と申す。いや／＼己が心にはあらじ、誰がをしへけるぞと、さまざまに御推問あれども、幾度もあらずひぬ。年比にも似ぬ不敵なればとて、大なる袋の中へおし

入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱に掛けさせ給ひ、事のよしを有りのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へと仰せけれども、猶詞をかへす。夜既にあけて、常の御座を出でさせ給ふ。御臺所は早く心得させ給ひて、かれが幼き心にて身の悲しさを願す、竹千代君の仰せなりと申さざる事を深く感じ給ひ、女房たちに仰せ有りて、朝飯をめてたべ候へとて賜はりて、又口を封じ給ひてけり。晝ほど入らせ給ひて、又御推問あれども、つひに其詞屈せず。御臺所御わび言ありしかば、さらば重ねてを慎めよと仰せ有りて御赦しあり。御臺所に向はせ給ひ、かれが今の心にて生立ちたらんには、竹千代殿の爲には双なき忠臣にてこそ候はめと、殊の外によるこばせ給ひけるとかや。されば諸國大名の代々奉りし人質をかへし、殉死を禁じ大佛を鑄て錢とし、明暦の火災東都の城廓を始めこと／＼く灰燼となり、諸人焦爛にくるしむ。殊に去年由井正雪の逆徒のさわぎ有りし後なれば、人々心安からざりしに、信綱事に臨みてたち所にとり行ひし事、皆其所を得て、ほどなく世の人心も静まり、昔に替らぬ時となりぬる事、いにしへの賢輔にも恥づべからずと申傳ふる所なり。

卷之十九

細川忠興の立物の説

細川忠興に冑の物ずきをいかにせばやといふ方の有りしに、詳に書きしるして使にあたへられけり。使、立物の下地桐の木とかき給へるは、折れやすきものにていか候らんといへば、忠興色を變じ、汝は弓箭取の使とも覺えぬなり。軍に臨む者誰か生きて歸らんと思ふべき。二つなき命だにしかり、何條立物の折るゝを厭ふべき。かろきこそよけれ。立物の折るゝばかりに働きたらば、何の見ぐるしき事あらん。ひと面目にてこそあれといはれけり。

天正元癸酉年七月信長淀の城を攻落されしに、岩成主税助を細川藤高の士下津権内打取し時、忠興八つの年なりけるが、長岡監物が肩にのりて、監物が立物鹿の角に取りつき見物して、興に入たりしを人見て、後年の生ひさきをおしはかりけると也。

忠興飯河豊前同肥後父子を誅せられし事並肥後が妻節義に死する事

細川忠興豊前に在りし時、同州龍王の城に飯河豊前宗祐祿三千石、岩石の城に長岡肥後宗信祿六千石、宗祐の子龍せられて長岡の姓を興へられしに、父子とも罪有りて、慶長十一年七月廿一日二人とも誅せらる。宗祐は河北石見逸見治左衛門を討手とし、宗信は増田藏人を討手とせらる。宗祐散々に戦ひ

て死傷多し。宗信が妻は米田助左衛門是政が女なり、宗信と睦まじからず、對面せざる事三年に及べり。忠興是政が後室の尼雲仙院といへるをよびて、豊前肥後罪有りて誅すといへども、汝が女と孫の女に罪なし。密に告知せて命を助けよとなり。後室の尼聞きて肥後が妻常に中よからず。然れども夫をすて、かゝる時にのがれんとは、得こそ存すまじけれど、仰せの忝きをば告申さんとて、文して告げやりければ、賊に仰せは忝けれど、今はのきはに夫をすて、遁れん事人道にあらず。女子は東西をわきまへざる者なれば、養育して給はれとて、使につけて尼のもとへ送りけり。宗信是を聞きて大に悔み、我過を謝し、終に共に自害したりけり。

黒田満徳丸袴著の時母里但馬舞をまひし事

黒田長政の嫡子満徳丸とて、四の歳袴著のいはひ有り。母里但馬はひき目親にて、常にちいとなつかれしが、その時但馬満徳丸の髪をかきなでて、とく成長して功名し、父上より克したまへと申しければ、長政何といふ事ぞや、我武器をさみするか。若き時は汝また備後山とも相謀りき、朝鮮にわたり、又關ヶ原の合戦も、皆汝等が扶によらず大敵に勝ちたり。その後世太平なれば、立つべき武功もなし。満徳いかにおもふとも、我を越えること存じもよらずとて、膝立直し、但馬をにらまれしかば、人々汗を流すところに、但馬かたへに向ひて、故なき怒かな、人の子に功名したまへと云ふはひが事かとして、物ともせざる體にて長政の方を見向もせず。長政いや父よりまされとはいかにと怒られしかば、但馬

打ちわらひ、心を静めて聞玉へ、武功は幾度事にあひても仕すまじたりと思ふ事はなく、度ごとに不足なる者に候。他人はたぐひなしと褒めたつれども、黙して過ぎ候よ。よき軍兵を引其し、地の利よく幸に勝ち玉へるを、自讃は以の外のひが事にてこそ候へ。今まで勝軍になれて毎度斯の如くならんとならば、必敗北あるべし。味方崩れたる時、一足も引かず討死は殿の得ものなり。其は大將の道にあらず候。味方を討せず軍に勝つを良將と申し候。殿の武略進む一途は得ものにておはせども、進退圖に中る一途は、かけておはしまし候。此是非の論は備後老功の者にて候間、時々とはせ給へ。満徳どの只一人かけ出でて討死する事は、葉武者の業なり。死なぬやうに軍に勝つを大將の道にはする事に候。此詞よく覚えてとより能し給へと髪をなでて、長政の怒を物とも思はぬけしきなり。備後守次の間に酒宴して有りしが聞きつけて、銚子かはらけ取持ちて走り出で長政の前に跪き、慚も願すすめ奉り候とて、盃を差置き、若き時如水公の小姓たりしかば、御酌はいたしならひし小笠原の禮儀存出し候とて、酒をすめければ、長政うちとけ盃をかたむけられしかば、それを但馬にたまはり候へとて、氣ちがひよ、それへ罷出よといひければ、但馬すみより、其盃を戴きて三度引うけ飲みて後、殿はよしなきに怒り給ひ、今日の祝ひに興さめ候。少し酔玉へと云ひしかば、長政も又盃に十分引受けられし時、但馬いざ肴よとて、田村をうたひ出し舞ひすましたり。鬼のごとくなる男の稽古せしか、拍子も耳目を驚かせり。皆一同に兵のまじはりとうたひて、酒宴盛になりければ、備後守高聲に若き

人々能聞かれよ、心掛の深きも殿、又思慮なきも殿なり。大たはげは但馬、又たのもしきは但馬なり。黒田の家の武勇目出度時ぞよと、みなく酒を酌みかはし、事有らん時槍を合せ、なすべき事をなし置く時は、何事もゆるしたまふぞ、人々うたへや舞やとて酒宴やみてけり。又長政或年の春、歳始の祝に、栗山備後守がもとに行かれしに酒宴あり。四つ比に及んで長政われ居たらば、若き者ども酒おもふほど得飲まじ、あとにて打ちとけて酒もりせよとて歸られしに、但馬今少し居て、若きもの共に懇に詞をかけ、人々悦ぶやうにこそ有りたけれ、とかく我まゝの直らぬ殿なり、頂に大なる灸をしてこそよかりなめと、大音に云ひしを、長政聞かぬ體にて歸られけり。

龜田大隅江戸の石壁を築きし事

江戸の石壁をきづかる、時、淺野長晟仰せを奉りて、龜田大隅高綱を奉行とす。石壁成りて後、崩るる事三度に及べり。台徳院殿打廻り御覽じて、何とて崩れしやと仰せ有りしに、龜田謹んでその事に候、大隅軍の時、鷗の嘴の槍を掲げ先かけ候。陣つひに崩る、事はなく候。石は無心ものにてせんかたなく候と申す。事終りて鹿毛ぶちの馬を大隅に賜ひけるに、士の二毛の馬に乗ることや候。にげたる事もなく候に、口惜しく候といふを、土井利勝申上げられしかば、別の馬を換へて與へよと仰せられけり。龜田大剛の者にて、十文字の槍下阪忠親が造りにて、さやは鷗の嘴に造り栗色にぬり總螺鈿の柄なり。

吉岡建法狼藉太田忠兵衛手柄井太田武技を論ずる事

慶長年中禁裏に散樂の有りし時、貴賤群參しけり。吉岡建法といふ染物屋劍術の妙手にて有りしが、無禮の事有りしを、雑色咎めければ、建法外に出で羽織の下に脇差をかくしもの所に入り、先の雑色をたゞ一打に切つて、夫より縦横にかけ廻る。もとよりあくまで手きなり、手負敷をしらす。板倉伊賀守勝重日の御門に有りしが、眉尖刀の鞘をはづし向はれしを、太田忠兵衛何條手おろさせ給ふ事やあるとてかけ行くを、勝重此長刀にてとてあたへられしかば、太田吉岡に向ひ、惡逆無禮のこの首をのべよと走りかゝれば、吉岡は紫宸殿の階に息つき居しが、我に太刀打せん者、汝ならではといひて階を下りて立ち向ふ。太田已に眉尖刀は無益なりといふまゝに、刀をぬく。吉岡走りかゝりさきに倒れけり。太田大言あげ、倒れたるを切るは士の恥なり、立つて勝負せよといふ。吉岡立ちあがる所を飛びかゝり、一太刀に切殺しけり。勝重悦びて、太田に祿を増し、盃をあたへて後、吉岡が倒れたるを切ざるは勇餘り有りといへども、氣に驕の失あるに似たり。吉岡商賤しき身なれども、劍術はいかなる人も及びがたし、倒れしは天の與へなり。然るを切らざるは、虚を打つの理にくらしともいふべきにやと云はれしに、太田仰せ誠に辱く候。こゝに一つ存する故の候。多く敵の倒れ候をおこしも立てず打たんとする故に、身を忘れ脚を切られて倒れたる者の勝になり候。倒れ候に、虚實の二つ有り。吉岡が倒れ候は、虚にて候。吉岡たとひ實に倒れ候ともたやすく斬らるゝ男にあらず。倒

れし時は、身を防ぐ事虚に似て候へども、近付ならば、切らんと存するは實にて候。虚にも實にも倒れ候ものゝ立ちあがらぬといふ事はなく候。其立あがる時は、躬を防ぎ敵をきりはらはんと存する心虚になり候。そこを打つてたやすく切とめ候ひき。誠にかゝる小き業匹夫の事にて、殿のしろしめす理にても候ふまじ。されども陣をわかち軍する道にも相かなひ候事もやと、憚を省すして申すにて候といへば、勝重大に感せらる。

柳生宗矩劍術師範の事并宗矩先見の事

柳生但馬守宗矩は大和國にて、世々柳生の庄の地頭なり。關ヶ原の戦の後、徳川家に仕へ奉りて、父より劍術を受傳へ、無雙の妙手と聞えてけり。大猷院殿御年わかゝりしより、此技を好ませ給ひ、宗矩御師範に參りて、御心を盡させ給ひ、頗其妙を得させ給ひけり。只此藝によりて、其人を信じ敬せさせ給ふと、人々おもひけるに、實に其技によつて、治平の政事を諭し申しけるにや、常に御側の人々に、天下の治めは但馬守に學びてこそ、その大體を得たれと仰せられしとぞ聞えける。宗矩年老病重かりし日も、辱くも家に入らせ給ひき。正保三年三月終に空しくなりけるに、其ころためしなき贈位の事を執し仰せられ、從四位下にあげさせ給ふとかや。宗矩死せし後、事にふれて生て世にあらば、尋問べきものと深くしたはせ仰られしは、誠に有がたき事なりし。其中一事相傳ふるは、島原凶徒の亂、江戸に聞えし頃は十一月十日なり。宗矩有馬玄蕃頭豊氏の家に散樂有りて行向ひしに、家



隸尋來て、但馬守を呼出し、肥前國島原に土民相集りて楯籠り候ひぬ。是切支丹宗門の者にて、松倉にぞむき候うての事なりと早馬來り、板倉内膳正追討の御使を承り、はや御發向候とぞ申ける。宗矩さらぬ體にて、もとの所に歸り坐し、用人に向ひ急て宿所に歸るべき事出來ぬ。よき御馬をかし給へといへば、心得たりとて、馬に鞍置きて牽たつ。宗矩打乗りて品川にはせ付き、板倉は如何にと問へば、遙に過させたりと答ふ。川崎に馳著て問へば、今は二三里も隔りたりと申す。日已に暮に及べば、引返して御城にあらがり、近侍の人々を以て、申すべき旨有りて伺候し候ひぬと申せば、やがて御前に召して、何事にやと仰せ有り。宗矩畏り、只今承り候へば、九州に切支丹宗門の逆徒發起し、内膳正重昌追討の御使を承りはせ向ふよし、仰せと稱しおしといむべきと存じ、追かけ候へども、追つかず候、此よし申さん爲なりと申す。何故におしといめんとは思ふぞと、御尋あり。さん候君はひたすら土民ばら立籠り候と思召して、追討の御使かろくこそ候へ。宗門に付て起る軍は、大事のものにて候、重昌一定討死仕り申すべし。いかにもはかつてといめばやと存じ候ひしと申す。以の外御氣色損じ御座を立せ給ふ。宗矩猶夜ふくるまでも退出せず。此よし聞召し、又御前に召して、重昌討死すべき仔細いかいと御尋あり。宗矩さればこそ、兵の道は勇を先とす。勇士は死を悲まず。三軍みな恐れざる事は、今の名將の專一とする事にて候に、凡愚の輩宗門を深く信じ、其法をかたく守りて死を以て身の悦とす。百千の人死を恐れざるの勇士となり候事は、宗門の故にてこそ候へ。織田家の武

威を以て、一向門徒に勝事能はず。天子の命を假りて和平になり候ひぬ。三河國の一揆も近き御家の事にてこそ候へ。大阪の時重昌年わか候へども、數十萬人に撰ばれ、唯一人大事の御使承りたる者なれば、是等の土民打亡すべきに、何事か有るべき。誰かは其下知を背くべきと思召したらんは事の違ひにて候べし。重昌位高く祿も有りて、年頃重き職を司つて常に人の敬ひ候はんには然るべく候、今の重昌が身にて城を攻候ひなんに、西國の諸侯いかは下知に従ふべき。おもふにも似ず攻めあぐみて候ひなんには、又御一門の人々か、さあらずは宿老の内重ねて追討の御使下され候べし。しからば重昌何の面目ありて、生きて再び關東に歸るべき、あたら人を土人等に打たせ候ひなん事、誠に口惜くこそ候へ。是は御家の恥辱とも申すべきをや。御ゆるしを蒙て候は、追付け参りてとかく押へといめて具して歸るべき物をと憚る所なく申しければ、御後悔の色あらはれさせ給ひしが、それも叶ひがたくや思し召けん、夜も更けたりとて入らせ給ひしかば、宗矩も退出し、ひそかに人にかくと語りけるとかや。誠に宗矩が計りし事、掌をさすがごとくなりしかば、尤深計遠慮ありとぞ申べき。

板倉重昌肥前國島原の賊追討の事并周防守重宗先見の事

島原にて寛永十四年切支丹一揆の時、討手に石川主殿頭忠綱板倉内膳正重昌なるべしと云ひけるを、石川聞きて我年老いたり。板倉其器に當れりといはれしが、重昌仰せを奉り肥前に赴き城落ちざりしかば、又討手の大將を下さるべしといふを、石川聞きて、我始は其撰にあはん事をさのみ悦ばざりき。

今思ふに泰平の世に徒に死なんも志に非ず。あはれ仰を奉りて、西國に赴かばやとぞいはれける。重昌筑紫に向ふ時、京都にて所司代板倉周防守重宗に對面ありて、今度の仰せを承る事、辱き由を語られけり。重昌既に京都を立つて後、重宗重昌がおもふ所を察するに必討死すべし、再會是までなりといはれけり。松平伊豆守信綱肥前に進發せらると聞きて、重昌城を攻めて討死せられたり。人重宗に其いはれをとふ。重宗城にこもる者は百姓の身なる故に、内膳正忽攻落すべしと思へる色あらはれたり。たとひ此城を攻落すとも、一揆の奴原さのみ功名ともいふべからず。只今四方無事の時、一揆たのみなき城に籠りて降参するとも、悉くうち殺されん事を知つて其心一和すべし、たやすく落べからず。日數を経ば、又他の大將を指向けられんに、内膳何ぞ生きて歸るべき。吾是を以て討死せん事を知りぬといはれけり。

川北九大夫肥後國川尻を守る事

細川忠利の士川北九大夫といふ者あり。川尻の代官を勤めよとなりしに、出陣の時供に連れられなば、代官の職つとむべしといひければ、尤として出陣のとき供すべしと定めらる。天草はやもすれば、一揆をなす所と西國の人のいひける事なれば、心にかけて川尻は海邊船の著く處にて、細川家の米藏あり、天草へ海上七里と聞ゆ。川北兼て地鉄砲の數をしらべ置けり。地鉄砲とは獵師の事也。天草の一揆起ると聞きて、川尻の海岸に一間に一木づつ竹を立てさせ、一本ごとに火繩をゆひ付け、五本に一人の地鉄砲を

配りけり。後に天草にて生けとられし者のいひけるは、其夜川尻の米を取らん爲に船をおし出して見しに、川尻にいくらともなく鐵砲を備へて見えたる故、さては熊本より、軍兵のはや川尻に来れりとして、船をもどしけるとなり。川北なかりせば、川尻の米を取られ、天草の城たやすく破れまじかりしに、川北が謀にて、天草の糧はやく盡きてけり。

天草一揆夜討の事

天草の一揆を圍み攻めらるゝに、城中糧米既に乏しくなれば、夜討して米をとらんと本田但馬が謀にて、先諫早口の堀の外の水を汲せける時、鐵砲をならべて寄手に見せたり。かくする事三度に及びて、後には漸々に遅く夜に入りて汲ませけり。是は夜討に出づる時の鐵砲の火を見咎めさせじとの事なり。其後毎夜堀裏にて切支丹のとなへごと、天帝といふ事を數千人一同にをめぐ。是も夜討に出づる時の物音をまぎらはさんとの謀なり。斯くて寛永十五年二月二十一日の夜、五百人をもて、黒田忠之の陣所におしよせ、二陣の兵二千人を二手に分ち、細だすきして額にはくるすを鉢巻にして、相辭は丸か丸と定め、首なとりを、食物をとり來るを第一の功名にせんと下知し、諫早口より出て、出廓のかたへなる有江口へ退入るべしと定め、陣屋を焼かん爲に、檜の木を削りかけにして腰にさゝせ、丑の刻ばかり、月もおぼろにくらかりしを便に、黒田の陣所に押寄せ、同時に関の聲をあぐれば、城中にも関の聲をあはす。士大將黒田監物しよりぎはにありて、父子ともに面もふらず支へ戦ひしが、流れ矢

に中りて討死しければ、從兵四十三人枕を並べて討たれけり。一揆大に勇み進みしかども、黒田美作入道睡鷗物しにて、柵壕きりの守かたくためらふ中に、黒田市正高政槍を提げ出であひ、二三人突伏せ小姓に首とらせ、市正こゝにあり、一足も引くなきたなきふるまひせば、軍神も照覽あれ、斬つて捨つるぞと呼はる聲を一揆聞きて、爰は破りがたしとて寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行く。三宅藤右衛門支へ戦ひ痛手負ひたり。一揆又鍋島勝重の陣所の非樓に火をかけたりに、松平信綱より夜廻りの士岩上覺之介尼子八郎兵衛紀州の使者山中作右衛門と打連れて來りしが、山中は銀の冑にて十文字の槍を持ちさんぐに相戦ふ。鍋島の軍兵馳集り入れたてじと防ぎけるに、竹把に火もえ付きて白日の如く、一揆かなはで引かへす時、四郎矢倉に有りて勝鬨をつくらせ、それより城中静りけり。其後水野日向守勝成島原に著陣し、黒田睡鷗に夜討の有様かたらせ聞きて、むかしより四方を固く取りまかれ、竹把を付け、柵の木二重三重にゆひたる寄手の陣に討て出でたる事を聞かず。古今無雙の武略をしたる一揆なり。されども一揆を一等超えてはたらかぬは、わが士卒なりと云はれたり。

鍋島神原島原城先登の事

同じ城攻に、鍋島のしより堀二三間ばかりに竹把を付寄せ、軍兵ひと押寄せ居けるに、城中殊の外に静なれば、ひそかに堀の内をさしのぞき見るに、一揆一人もなし。士大將鍋島安藝是を聞き、堀裏をさしのぞく。其有様只今攻入べきけしきなりしかば、あはやと云ふ程こそあれ、我先にとかけ集る。

鍋島の陣に附けられし神原飛騨守の士ども、竹把を付習ふとて、毎日かはりくに来りしが、是を見ていざといふまゝに押寄する。神原の嫡子左衛門佐真先かけて乗入りければ、戸田左門氏鐵の陣所に、諸將あつまりて軍評定有りし時なるに、井樓より鍋島の軍兵只今城に攻入り候と呼はる。さらばとて諸將陣を寄せて攻落されけり。その後勝重に今度軍令を背き、城攻有りし事を問はるゝに、勝重承り、神原父子先がけて乗入り候ふうへは、目附を討たせて叶ふまじと不意に攻入り候と申さる。神原に問はるゝに、嫡子にて候若き奴、軍令を忘れ先がけしける故、恩愛にひかれ子を眼前に討たせ候うては生がひなし。父子は同罪と存じ、つゝいて攻入り候と申されければ、鍋島も神原も門をとちておひ込まれ、三十日過ぎて御ゆるされあり。勝重人にあふごとくに、筑紫にて卒忽の城攻せし罪ゆるし給はり、忝きよしはれしかば、江戸にて城攻の卒忽人よとて、勝重の通らるゝを珍しげに觀けるとなり。又神原申されけるは、若き者どもに竹把の付やう習はせ度候。攻口四五間分ち給はれとなり。皆くるしう候はじと云ひけるに、勝重聞入れず、わが攻口を人にわくる事やある。一寸も叶ふまじと答へらるゝに、神原しひられしかば、飛州の士をわが士共にさし加へられよといはれけり。此時一丈にてもわけたらば、領地を削らるべきよし議ありけるに、勝重の遠き慮なかりし故に、其事やみたりしと、人々いひけるとぞ。

黒田勢天草丸を攻破る事并黒田睡鷗武略の事

黒田忠之天草丸を攻むる時、本田但馬きびしく防ぎ支へて、先陣攻入り得ざりしかば、忠之素はだに  
て進まれけるを、黒田睡鷗物具恃むにたらぬとは申せども、大軍を下知し給ふ身の甲を著ざれば、う  
ろたへたりと人の嘲り候べしといひければ、忠之物具とつて肩にかけ、胃をば著す手ぬぐひにて鉢巻  
し走り出で、わが士ども年頃吾家の恩にみちし奴原、けふはいかにして進まざるや。われ此處を一足も  
引くまじきとて、槍の鏢を地にさしこみ、折りしきてすゝめ者共と下知せらる。雨の如く打出す鐵砲  
に、打すくめられたためらへり。睡鷗は是を余所に見てひかへ居しかば、忠之何とて一方を下知せざる  
や、年老いて老耄したるかど、大音あげ齒がみして罵られしかども、少も騒がず、いまだはやく候と  
しづかにいへば、忠之いよく怒り罵られしを、弟市正彼入道は物しにて候、またせられ候へとい  
ふ所に、睡鷗つと立上り、魔を取てかゝり候へといふ。詞の下より軍兵一同にとつと進みて、天草丸  
に乗入り攻取たり。後に忠之睡鷗を近付け、軍兵我下知を用ひずして、汝が一言にて忽ち城を攻破り  
たるはいかなる故ぞと問はれしに、すべて城攻に四方より押寄せ、先陣ひしと攻めつむる時を見はか  
りて、無二無三に進んで手負死人を願す乗入り候へば、攻破り候事を得候。四方の味方いまだ押寄せ  
ず、一方より攻破らんといそぎ候へば、城中も外の防をすて、先きびしく攻むる方を支へ候もの故、  
外の持口よりも防ぎ甚つよく候。其ひまに一方より攻入り候時は、容易く撃破り候。早過ぎたる方は  
却て手後する事常の理に候。臣のわきまへをしりてしづまらせ候へと申せども、殿いそがせられ候

故、味方に手負討死多かりきと申しければ、忠之高政ともに大に感せられけり。

水野勝重父子有馬永純本丸一番乗を論せられし事

島原を攻落す時、水野美作守勝重は、江戸にて賜りたる白川月毛といふ遅ましき馬に乗り、戸田氏鐵  
の陣所より、わが陣所に乗切つて歸られしに、勝重の軍兵ども、金の束のしの馬じるしを見るより、  
我先にといさみけるを、勝重馬上にて胃を取つて著、武者奉行河村新八士大將上田玄蕃に向ひ、わが  
下知なき以前にかゝるならば、軍神にかけて斬棄てよと大音あげて呼はり、魔を拔出し軍兵をすゝめ、  
塀を破りをめき叫んで攻入りけるに、自分馬より槍を杖にして、本丸を目にかけて進まる。嫡子伊織  
十四歳真先にかけて出づるを、祖父の勝成後陣より見て、本丸をうち破れと下知せらる。本丸にたてこ  
もるもの共數千人、けふを限りと思ひ定め、防ぎ戦ひければ、討たる者多し。鍋島の軍兵ひるみて  
見えし處を、水野父子横さまに面もふらず切かゝりて、三の丸より本丸へ逃入る一揆を討取る事數を  
しらす。本丸の石壁より打出す鐵砲の玉霰の飛びちるが如し。石壁は五間七間計も高く登り兼たる處  
に、水野父子大音あげて、今日本丸を攻めとらずは、生きて誰にか面を向くべき。死やくと聲々に  
呼はり、うてども射れどもひるまず、われ先にと攻めかゝる。旗奉行神谷奎之允、旗十本の内一本持せ  
來りて自竿に手をかけ、本丸に入らんとす。糺奉行進藤七兵衛小野田正大夫金の束のしの馬印をふり  
かたげ來りて、松の丸に押立てしかば、神谷も旗を入る。水野父子の兵念なく石壁を登り本丸に攻入

りたるを、勝成二の丸より見やりて、われ今生の思ひ出なり。美作は大阪にて武功あり、伊織はけふを始めの軍なるに、本丸を攻取りし事、家の面目なりとよろこばれたり。有馬左衛門佐康純の嫡子藏人永純は寺澤忠高の後陣なりしが、唯一人從者に槍をもたせ、寺澤の先陣をかけぬけて、天草丸の方へはせ入り、本丸に進んで五六間計の石壁に登り、今日本丸の一番乗有馬藏人なり、心ある士はよく見候へと呼ぶ處に、勝重の士鈴木半之丞取つたる首を、石壁の上に置きて息を繼居けるが、此聲を聞きて槍を横たへ藏人に向ひ、只今こゝに來り一番とは何事ぞや、本丸は水野美作守攻入り、旗馬印入れ置きぬ。二番とならば是へ上らせ候へといふ。藏人聞入られずは、唯一槍にとおもへるけしきなる上に、水野の旗本丸に建てしを見て、さらば美作守についでては、藏人なりといはれしかば、其時鈴木半之丞美作守父子の外大將たちは、いまだ本丸には見えず、まぎれなき二番にて候とて、手を取つて石壁に引き上ぐるに、永純つめの丸くひ違ひの處に進み行き、美作守はいづくにやと問ふ。神谷美作守は腰廓の上に居て、爰に旗を入れ候と答ふ。永純聞きてさては美作守は我より後にてこそあれといはれたり。永純本丸に押入りたりと、勝重聞きて使をたて、只今攻入られしよし、くるわ有る所にあり。もし夜に入つて一揆討つて出づる事もあるべし。爰に一所に有りて下知せられ候へとなり。藏人聞きもあへず、作州はわれより後に攻入られしよ。藏人は一寸も敵近き所を好み候ほどに、後へは引候はじ。一揆打つて出づるとも、藏人爰にあらば危き事候はずと答へられけり。勝重よし／＼詰の丸

より切つて出ば敗北すべしとて、士三十人計槍を横たへ、鐵砲を前に並べたり。藏人は鐵の柵を取寄せ、前に押立て、夜の明くるまで待かけられしかども、一揆討つて出でず。信綱下知して勝重も鍋島の陣に入かはられしかども、永純はしりぞかず、使度々に及んで引かへされけり。落城の後三月朔日永純勝重の陣所に行き、本丸の一番は藏人にて候といふ。勝重年若くて左の給ふ本丸の奴原命を限りに防ぎ候ひしを、美作守父子おし寄せ打破りて、旗を一番に入れしこと、誰かあらそひ申べきと答ふ。鈴木も進み出でたれば、永純また鈴木が申せし言もいかでわすれ候べき。作州父子は一番とおもひて、藏人二番と申せしも分明なり。されども旗入れ置かれし所に行きて見しに、夫より遙かの跡に控へてこそおはしたれ。鈴木も旗を證にして利口を申したれ。とかくに、一番は藏人に候と云はれければ、勝重陣所に在りたればとて、旗を一番に入れしは、是軍の法に於て、誰かは一二を論すべき。父子が兵とも身を棄て、力攻に乘取りし本丸を、他の一番に定めん事想ひも寄り候はず、能慮し給へと答へられしに、永純旗の前後は論せず候。將たるもの、先がけは、藏人が外誰か候。作州は跡より使を給はり候へば、一番は藏人なりと怒られしかば、勝重只今のあらそひ無益の事に候。軍に慣たる物しに問うて一二を定められ候へと言はれしかば、永純打ちつけて小姓を呼び、茶を飲て出でられしが鈴木に向ひ、いかにも詞和らかに云て歸られしかば、藏人もなみ／＼ならぬ人なりと譽めあへり。

陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事

一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取りけり。二の丸にて鐵砲にあたり倒れし者の首を斬りしに、忠利前髪ある首をえり出させ、鞭にて彼首をさし、四郎が首ともおぼしきに、誰か見知つたると問ふ。須佐美權之允四年以前に四郎を召しつかひし事の候、紛ひなき四郎なり。左の耳の下に瘡の候、是其しるしなりとて、生捕りたる四郎が母に見すれば、吾子なりとて泣倒れしかば、忠利使をたて、首を石谷十藏の方に送られけり。後陣に千石の祿を與へらる。

松野龜右衛門鐵砲修練の事附松野才覺の事

島原の城攻に、細川家の士大將松野龜右衛門井樓より見るに、本丸と二の廓の間に坂有りて人集る。中に大紋の羽織著たる者あり。松野指さして、鐵砲にて打ちたるに、五町ばかりにてたゞ中にあたりてけり。それより空箭なく打ちしかば、彼坂を夫より後たまく通る者身をかゝめ走り通りけるとぞ。松野は鐵砲の妙手留刑部一火に學びて妙を得たり。

熊本にて一夕の筒をみがき居しに、庭の南天蜀の實をひよ鳥の來て喰ひけるを、かなものしはめて藥をこみ、目的を見ず著にて火をさして打つに中らざる事なし。島原の前の事なりしにや、細川家の長臣南條大膳恨をふくむ故ありて、細川家を傾げん事を謀りけるに、其比深く密する事ありて、泄れなば、細川家の禍なる事を知りたりければ、先切支丹の事訴へけり。江戸より南條をめす。細川家驚きたれどもせん方なし。松野我にまかせられよとて、囚人なれば厚き板にて詰牢をつくり、

醫者一人に、密謀を云ひふくめ、熊本より出づるに、天氣を待つとて處々に舟をとめ、日を経る内に、人參の入りたる藥をあたへ、朝夕の食物まで人參湯にて飲食させけり。南條は氣の鬱したる上、人參數百斤飲みたりしかば、心狂亂したりけり。松野江戸に打具し至りて、南條は數年狂氣の者に候とて出しけり。切支丹訟の事を問はるゝに、狂言のみなり。とく熊本に歸すべしとて、松野に返されぬ。此謀たゞ醫一人のみ知りたりと云へり。

藤堂高虎阿野津にて勢揃せられし事

元和五年藤堂高虎領國阿濃津にて俄に勢揃せられけり。人或は怪み、或は高虎何事に謀反すべきや、萬に一つも反心あらば、事を密にすべきに、あらはに人のおどろくべきやうになしたるは、仔細あらんといひしに、福島左衛門大夫領國を削られけり。

福島正則領國を召放さるゝ始末の事

福島左衛門大夫正則は、關ヶ原の軍功によりて、尾張の清洲より安藝備後を賜はりけるが、物荒く政悪しきのみならず、多く罪なき人を殺し、且東照宮に對し奉り無禮多かりければ、元和五年台徳院殿御上京の時領國を削られけり。

本多上野介正純に就きて、廣島の城池を浚ふべき旨を申す。申上べきよしを答へられしが、御上京の事繁きにまぎれて、其事なかりしに、廣島の城普請の事を聞し召し怒らせ給ひしに、正純其時驚き

て、正則の書翰を出されしに、證文の出し後れとて、聞し召し入れられずともいへり。  
二條の城にて、土井大炊頭利勝藤堂和泉守高虎をめして、此事を仰せ出され議決せり。  
板倉伊賀守勝重此事は非伊掃部頭直孝に仰せ聞けられよとて、直孝を召す。御前に参りて、福島左衛門大夫國を召放たるべき事故、召され候やと申す。其事なり、誰か使にせんと思ふぞと仰せあり。直孝京都よりの御使ならば、江戸に残れる者は是程の事辨へざるやと申事も候べし。只今江戸に罷有る者に仰出され然るべし。又正則を京に召され罪の趣仰出され申譯あるか、又は國に引こもり思慮せよと仰せられ候うても然るべく候。事により直孝能向ひ打破り申すべしと申す。和泉守若き掃部頭には似合ひたり、但福島もさすがの者にて剛の者餘多あれば、小路軍になりていかにあらんと申す。直孝和泉守は何方にて小路軍をしたるぞや、直孝が家には武功の老武者多し。古き戦の事を聞きしに、今川氏眞の許にて、濱松の城主井伊半人を氏眞の城下へ召し寄せ誅せられし時、小路軍になりて、殊の外むつかしかりきといふ、唯一事を聞きたりと云へば、和泉守詞なし。台徳院殿いはれざる小路軍の論ぞとて、先退出せられしが、井上主計頭を以て再び直孝を召し、仰せには、わが思ひたる所も汝が言の如し。人々皆口々にいひて一同せず。掃部が存する旨に従ふべし。さて誰をか使にせんと仰せなりしに、直孝が様の使久世三四郎坂部三十郎兩人よかりなんと存するなりと申せば、是も符合せりとの仰せにて、兩人使たり。かくて酒井雅樂頭忠世太田善大夫を近付け、福島左衛門

大夫領國を召放たるべきよし仰せ出されたり、福島はさるものなり、いかなる事をか仕出すべきと危く思ふなりと語られければ、太田、いや何事かいたすべきと事もなげにいふ。酒井又いつものわちやくなる詞かな、危き事と思ふなりと申されければ、太田、ならざる事する福島にあらず候。すべきをしらざる者こそさは候べけれ。福島は非道不仁の男なれども、勝負の理をよくしりて候男なれば、何事も仕出さじといひしが、果して一言にも及ばず、仰せの旨を奉りたりき。

六月に福島領國を削らる旨、廣島へ聞えければ、福島丹波諸士を皆呼集め、預置かれたる城なれば公方の仰せなりとも渡し難し、又備後守殿爲なれば渡すべきかと評論す。上月文右衛門進出て、人はいかにもあれ、我は本丸を預りぬる上は、命あらん限は人に渡すべからずと申し切つたり。丹波心得ざる氣色なり。村上彦右衛門聞きて、福島上月兩人の思ふ所に、同心の面々別々に判形せられよとて、二通書きて差出す。酒井主膳とて丹波が従子なるが座を立ち、鎌田主殿を呼び、いかにおもふぞ、丹波は伯父なれども、上月がいふ所尤なりといへば、主殿も上月に同心して判形をしたりければ、皆是に同心しけり。其時上月人々皆かくの如くなれば、丹波が妻子を本丸に入らるべきやといへば、丹波即妻子を本丸へ入る。それよりわれ先にと妻子をこめけり。城を受取るべき爲に、諸將うち向はれしかば、丹波吉村又右衛門水野治郎右衛門二人を使として、左衛門大夫領國召放たれ候により、仰の旨は謹で承り候。然れども主君預置かれし城を、證據とすべき書簡なくて、渡さん事は人々の存する處思

ひやられ候。次に領國に入給はん事、おなかの若き奴原無禮の恐れ有り、領國をさけられ候へと申送る。さらば左衛門大夫は程遠し、伏見にある備後守の書簡を證據にせんやと云はせらるゝに、父子たる事は論なしといへども、備後守が領國にも城にもあらず、備後守が言は用ふるにたらずといふ所に、正則が書簡來りしかば、城門の大手にて書簡を受取りぬ。さて廣島は船入二所あり。人多くさわがしくて、士どもの妻子退去る時争ひあるやの恐れも候ふとて、一方をば人をとめ、一方の口より退散す。城中の士は門の左に付禮服して並び居、城受取の使安藤對馬守重信は、城門の右にそひて城に入られけり。

安藤城門に入る時、並び居たりし人々に向ひ、左衛門殿事申すべきやうもなしと詞をかけらる。其時皆禮せしに、獨茶筌髮にて、しかみの撞木杖をつきて、對馬守の詞を聞きかたはらを見て禮しけるを、山崎甲斐守見て、なみくならぬ人なりと知つて、姓名を問ふに、長尾出羽と答ふ。山崎退散の後、家族を養ふべし。又他國に行く中寓居せられよとて、使をもて云はせられしに、出羽甲州の御事は承り及びたり、忝き旨を謝す。やがて森美作守忠政禮を厚うして招かれしかば、森家に仕へけるとなり。

丹波と文右衛門とは密に相計りて、初よりたてこもるべきといひて同心する人なき時は、別にすべき道なき故に、事を二つにして土の心を試みたるなりと、其比いひあへり。さて後城を守るに決せし時、

丹波上月に向ひ、吾と文右衛門腹切つたらば、何事も外にすべき事なしといひしとかや。

左衛門大夫罪せらるゝと聞きて暇を乞たる士、三十人ばかりありしかば、狭間くゞりといはれけり。妻子を本丸へ入れたるは、諸ごもりと名付け、妻子を城外に出し、其身のみ城を守らんといひしは片籠りといふ。後に京都耳塚に札を立て、三色に分ちて姓名を書きて世の人に見せしゆゑ、さまざまぐりの面々は餓死に及びぬといへり。上月は祿五千石士大將たり。正則上月が志を感賞し、書簡をあたへらる。今度我等事御預に成候。是に依て城を枕と存じ候よし、心底察入り候。然れども存寄有之候間、早々城相渡し可申候。貴殿志之段不淺過分之至に存候とぞ書かれける。大崎玄蕃長行も福島家の士大將なり。同じ時大崎は備後鞆の城に有り。秋田下總も同じく鞆に有りしが、大崎を廣島にやりて、己一人にて鞆を守り、討死して名を揚げばやと思ひけん、大崎に向ひ、江戸より城を受取るべき使近き内に著陣有べし。とく廣島にこもられ然るべからんと云ふ。大崎聞きて、殿の下知なくて城を出でんこと思ひもよらずといふ。秋田城中を廻り、防戦の支度専らなりしに、大崎は柱によりて眠る外なし。人々大崎をそしりたるに、大崎あざ笑ひ、秋田はかくゆゝしく防戦の用意するなるべし。われは思ひ定めたる事有つて、萬事ひまなりといへば、其仔細を問ふに、大崎此城を守り日本を敵になし、萬に一つも勝つべきや、あたら人々を徒に殺さんもいかいなり。われ一人大手の門外へ出て、城代大崎玄蕃と申す者なりとて、腹切らん後、城を受取り給へ、城の人々残らず



たすけられよと云つて、各たちの命に換るべし。何の用意の有るべきといひけり。かゝる所に、正則の證書來り事故なく城を渡せしかば、大崎と村上彦右衛門眞鍋五郎右衛門と同じく、紀伊の家に仕へけり。大崎は若き時木村常陸介師春に奉公し、後正則に仕ふ、鬼玄蕃といはれしものなり。關ヶ原の時尾州清州の城に大崎を置かれけり。石田三成大垣の城に入りて使を以て、福島家は太閤の恩篤き人なれば、今度無二の味方に候。清洲を明けられよ、兵を入れなんとぞたばかりける。津田備中繁元は、げにもとおもひて同心すべきに、長行事はいかにもせよ、殿の仰なくて他國の兵を城にいれん事、存じもより候はず。しひて兵を寄せられれば一軍せんと、目を見出して使を罵り追返しけり。かくて大崎門を固く守り、さまくばりして、かくと小山に告げたりしかば、正則悦ばる。東照宮正則に、清洲の守りに誰か有ると仰せあり。正則大崎玄蕃を留置きて候と申す處に、斯と告來りければ聞し召し、大崎は世に譽れ有る者なり。さぞあらんと仰せられしが、其後も清洲を敵にとられざりしは、大崎が功なりと度々仰せありしとなり。紀州にて安藤帶刀大崎村上眞鍋に逢ひて武功を問ひたりしに、眞鍋は十四の時より軍をし、數度の功名をかたり、村上も十四竹子の軍より、壬生川の先駈等をいひしに、大崎は、われ木村が許に小祿にて有りしが、士大將になり、又福島の家にも士を下知し候へば、左のみにぶうも候はずといへば、帶刀大に感じけるとなり。又一説に、福島正則流罪藝州へ聞えければ、長臣の者ども福島丹波がもとに相集り、城を渡すべきや否やを論ず。

村上彦右衛門通清殿流罪たりとも、御存生においては御判形を見て國を引渡すべし。御判形來らずば、此城を枕にして討死の外他事なし。但本丸は上月文右衛門預りたれば、上月に談合然るべしといふ。上月聞きて、御判形を見ずして、いかでか本丸を渡すべきといふ。備後三次に尾關石見、備中城東條に長尾隼人一勝、備後三原に大崎玄蕃長行有りしを、石見隼人をつぼませ、廣島三原の兩城を守り、各人質を城に入れ、天守に燒草を積み、大手搦手の持口を定めたり。安藤對馬守、永井右近大夫中國西國の軍兵を率ゐ、備中の笠岡に著陣あり。丹波吉村又右衛門大橋茂右衛門を使として、主君の判形を見ずして、城を渡すこと迷惑なりと、竹中采女へいひ送れり。上使聞きて狀を取寄すべしと返答有りて、笠岡に滞留の所、正則の狀到來す。丹波已下是を見て城を渡すべしと相定む。笠岡より尾道へ八里、初は陸路と定められしを、安藤船にて行くべしとなり。加藤嘉明聞きて、上使は船にて早く惣人數は陸にて遅からん。上使より遅くば、われらは男をすてなん。是非陸をとすめらるれども、安藤聞入れず。船の事を蜂須賀阿波守に相計らる。加藤も船を用意したり。せめて某の船に乗られよとす、め、此船に乗つて、上使尾道に到り、人數は陸を廻りけり。大崎玄蕃使を以て、主君の狀廣島に來る上は、三原も相違候まじ。然れども三原へ狀來らずして、城は明渡し難しと、竹中のもとに云ひ送る。安藤聞きて、跡先の思慮にも及ばず無二無三に城へ乗入り、上使討死の時爰に有り、城の門際にて上使討死せば、續く者なきといふ事有るべからず。只今まで笠岡に滞留

し、又爰に日敷を送るべきにあらずと云ひ切つたれば、加藤尤然るべしとて、子息式部少輔の先陣をはや押出さんとする處に、三原の城へもはや正則の狀來りければ、玄蕃事故なく城を渡したり。城に入りて見れば、士足輕の名を書付けて、さまざまに配り置き、城の隅々まで掃除して、座敷には釜に湯を沸し、茶をひかせ置きたり。翌日廣島に著ければ、丹波今日渡すべきに、城中掃除未だ終らず、下々の荷物ものけ兼ねたり。明日までまたれなんやといふ。永井聞きて、我かねて聞きつる事有り、城和平になり渡すに及びて下人の荷物を片付兼ねたり、一兩日またれよといひしを、荷物は札を附けて大手搦手其手より出さるべし。相當のあたひに買取らんとて城を受取りたりし、其翌日寄手の大將頓死しぬ。城中のいひにまかせば、城を持ちかへす變も計りがたし。危き事なりと云傳へたり。唯一刻も早く受取らんとて、大手へ進み行きて、繪圖を披き、城内の物主共を呼集め、番所寄口を渡し濟み、城へ入つて飛脚をもて此旨言上ありけるとなり。古き人の詞に、城の受取り渡は互に證據をとり、唯今事に臨むが如く心得べし。城主進退窮りたるなれば、憤むべきなりといへり。

## 卷之二十

## 福島正則信濃國へ赴れし時の事

正則配流の時、正則の邸表の門前に蒲生下野守忠郷、裏門へは鳥居左京亮打向ひ、皆士卒物具したり。芝の邸へは最上源五郎義俊打向へり。蒲生の士ども正則公命を承りたりと聞きて、いそぎ邸を出でらるべしといひ入れければ、正則仰にも及ばずとて、信州に赴くべきにて候とて、熊澤半右衛門守久上月新八兩士をよび、奥筋の風俗常にかさつなり、蒲生鳥居の者ども門内へこみ入るに於ては、吾士ども無禮を咎めて事の破も有るべきなり。汝兩人門内に有つて理を盡すべし。それとも聞入れずば、かけ來りて告知せよ、自害すべしといはれしに、半右衛門これは畏り難き仰をも承りけるといひも果てぬに、正則我今日公儀に背き、かく成果てし故、おのれさへあなとるやと大に怒られしに、半右衛門驚かず、新八に向ひて、只今仰せのごとく出羽奥州の風俗のがさつなるは勿論なり。立向ひかに理を云ひたりとも聞入るべからず。其時かけかへりなば、追立てられ逃入りたると同じ事にて、未の世までも恥辱なるべし。さらばこみ入る奴ばら、腕の力のつかんほど、切りあひてそれを注進なし、其後殿はいかにもならせられんやと云ひけるに、新八ももとより同心に候と答へしに、正則悦んで打ちうなづき、二人がいふ所尤至極なり、幾重にも穩に理を盡し、承引せずば、志のごとくにせ

よといはれしかば、兩人畏り承り候とて、座を立ちて門内に出むかひけるに、事故なかりしかば、正則信州に赴かれけるとぞ。

正則茶道坊主が義氣に感せられし事

正則常に物あらく人を誅する事を好めると、世の人もいひあへり。或時近習の士少の咎ありて城内島の槽に押しこめ、食物をあたへず餓死せしめんといはれしに、其士の恩を受けたりし茶道坊主罪なくてかゝる有様をいたみ、潜に夜焼飯を携へ行きたり。彼士われは罪ある故に斯成りたり。汝只今のふるまひを殿聞し召されなば、われよりも罪重からん。又飯を食ひたりとて命助かるべきにあらざればとく歸れといひしに、茶道云ひけるは、同じ罪に行はるゝとも後悔なし。われ先に既に殺さるべき事の有りしに、君の救ひにて一度たすかり候ひぬ。恩をうけて報せざるは人にあらず。こなたも又よわげなる心おはして、吾志を空しくし給ふ事こそ口惜けれといへば、彼士悦んで、さらばとて是を食す。夜ごとにかくの如くしたりけり。程経て死したるならんとて、正則矢倉に行かれしに、顔色少しも衰へず。正則さては飯を送りたる者あらんと怒られしに、茶道來り、某こそ送りたれと申す。正則はたとにらみて、おのれ何故にかくしたるや、頭二つに切りわりなんと膝立直されし時、茶道少もさわがず、我昔罪を得て、既に水せめにあひて殺さるべかりしに、彼人の申しひらきたりし故、今日まで思ひがけず命存らへ候ひき。其恩を報せん爲、毎夜のびて飯をはこび候といふ。正則怒れる眼に

涙を流し、汝が志感するにあまれり、かくこそ有るべけれ、彼士をもゆるすべしとて、其まゝ矢倉の戸をひらきて、罪を宥め茶道をも深く賞せられけり。されば暴悪の人と世に稱しけれど、かゝる義に感ずる事の切なる故に、士のおもひ慕ひて力を竭し、正則の爲に身をすて、奉公しけるも、げに故ある事にこそ。

非伊直孝直諫の事

台徳院殿諸大名をめし、土井大炊頭利勝をもて、來年嗣君に世を譲らせ給ふべき旨仰出されしかば、皆祝し奉りたる處に、非伊直孝默然として有りしかば、利勝かたへに招き、いかなる事ぞと問ふに、天下亂の本たりと存すれば、目出度事とは存もよらずと申す。仔細はいかにと問ふ。されば其事に候、大阪の亂幾程なく、江戸石壁のいとなみ日光の土木、天下の諸大名以外の外に困窮せり。又世を譲らせ給ひなば、諸大名獻上奉る物に費多く、將軍宣下の饗禮を取行ふべし愈困窮に及び下を剝ぎ民を苦むるの外、更にせん方なからん。是民のなげき亂のもと、存するなりと申されしかば、利勝尤なり、此旨有のまゝに申すべしとて、直孝を御次の間にもなひ、利勝御前に参りて、しかぐのよし申したりければ、即直孝を御前に召され、汝が申す所尤なり。されども既に仰出されれば易難し。猶是より憚る所なく申せと仰られしかば、直孝臣が申むね然るべからずと思召し候により、聞し召し入れられず候か。臣が言尤と思召しなば、御用なからん事仰とも覺え候はずと申されけるに、暫く御詞なかり

ければ、利勝臣既に年老いぬ。壯年の者直言を申し候事、治世長久のもとに候。明日諸大名を召し、掃部頭申旨尤なるにより、相とめらるべきよしを仰せ有りて然るべう候ものと申されければ、台徳院殿則諫に従はせ給ひけり。其時直孝臣が申す旨用ひさせ給ひ、辱き旨謝し奉りて退出せられけり。台徳院殿の諫に従はせ給ひし事、直孝の直言美を盡せりと人申しけり。

又一説に、台徳院殿世上太平といへども、嗣君いまだ幼穉におはします。總郭を築かるべしと仰出されしに、直孝一人とかくの詞なかりしかば、各退出の後、いかなる故ぞと問はせ給ふに、仰の旨心得がたく候。嗣君幼穉におはしませども、治平の時なれば一郭滅せられ候てこそ、人々安堵いたすべけれ。嗣君幼穉により郭を増れなば、人々危ぶむ心を生せん事必然なり。且御上京も候うて過分の財用を費し、五三年も儉約ならざれば、債ひ難く有るべきに、又費を多くなしたらんには、郭は堅固に成り候とも、武備有るまじく候と申されければ、翌日諸大名を召し、掃部頭申旨尤なるにより、昨日の仰せ出されは、相輒めらるゝのよしを仰せ出されたりといへり。孰れか是なる事をしらす。

明の鄭芝龍援兵を乞ふ事并稻葉正勝諫言の事

大猷院殿の御時國姓爺日本に援兵を乞ひければ、諸長臣を御前に召出され、是を捨て置かれなば日本の恥なり。援兵をつかはさるべき旨仰られしに、小事たらざる故に、各とかくを申出かねられし處に、及ぶまじき由仰せ出されたり。

明の末鄭芝龍といふもの、萬曆年中日本に來り、肥前松浦の平戸にあり。又長崎にもありて、崇禎年中に明帝より召返されけり。平戸に在りし時、妻とりて子を生む。其子を鄭彩といふ。芝龍官を得て、長崎の奉行に告げて妻子を迎ふ。公に申してゆるされを蒙りたり。明滅びし時大祖の苗裔を福州に建て、元を隆武と號す。清と度々戦ひに及て、勝難き故に、援兵を乞ひたりしなり。明帝朱姓を賜ひければ、國姓と稱し、爺は老成を尊むの詞なり。芝龍が事明末の書に詳にしるせり。

大納言頼宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事

正保元年は、明の崇禎十七年なり。明朝亂れ陝西の李自成などいふ者、盜賊の長となり、一揆を起し北京へ攻入り、明の天子も自ら縊びれて崩じ給ひけるに、福建の鄭芝龍書簡をさへげて加勢を乞けるに依りて、紀伊大納言頼宣卿異國より加勢を頼み申す事、日本の武威四海にかゝやくとも申すべし。諸浪人を集め候ひなんには、數十萬も有るべし。それに西國中國の大名小名差加へられ然るべからん。拙者に總大將仰付られ候は、何事の悦びか是に過ぎん。異國に攻入り、おもふまゝに日本の武勇を見せ候べしと願ひ奉り給ひけれども、御加勢の事やみければ、兼て仕へ申せし武功の物しども、清兵と

一軍して、老後の思ひ出にせんといさみける人々、残多き事よといひあひけるとかや。

酒井忠勝直言の事

大猷院殿の御時、晴の猿樂有らんとする前夜に、大雨にて御前に見えわたるべき塀の白土壞れしに、

一説に、朝鮮來聘使者出べき夜、櫻田の矢倉の窓の白土やぶれたるともいへり。

いかいせんと人々云ひける處に、松平伊豆守信綱白き奉書の番を以てはらせられしかば、皆其捷智のほどを感じあひける處に、酒井讃岐守忠勝一説土井大炊頭利勝ともいへり伊豆守に向ひて、讃岐守が存する處は貴人にはならざる事はならざると知らせ奉るぞよき。仰出されんに何事も仰せのまゝならんと思召れんには、驕奢をみちびき奉るにてこそあれ、其時はいかゞし給はんといはれしに、信綱ふかく心服せられけり。

墨田川に橋を掛られし事

江戸の墨田川に橋なかりしを、酒井忠勝中て橋を掛けられけり。要害の爲あしかりなんと云ふ人あり、忠勝天下を治むるに、人を以て要害とすべし、人苦んで何の益か有るべき、人を苦めて要害とせば、江戸は一日ももちこたへ難しと答へられけり。

板倉重宗京都所司代の事附板倉勝重器量の事

板倉周防守重宗京の所司代たりしが、江戸に下りける時、松平信綱對面し、公方にも政事に御心を盡され候。京都の事も委細に聞き召し度候。是より後は同職にさし越れ候書狀、京都の事詳に記され候へといひしに、周防守百二十里の行程隔りたる事、何程に聰明におはしますとも及びごしなる事は、得知し召されじ、其故に周防守を京に指置かれ候事なれば、申上くるに及ばすと答へたるを、さては周防守は身致ものなりと感せさせ給ひけり。

重宗の父を伊賀守勝重といふ。初は四郎右衛門とて、祿五百石なりしに、京都の所司代を仰出され二萬石賜はりけり。是は本多正信が薦め申せし故となり。勝重仰を奉りて、佐渡守に向ひ、重職の任を身にうけ候事に候程に、歸りて妻なるものに相談りて、若同心せずば、職を固辭申上ぐべきよし申しけるに、正信打うなづく。勝重家に歸りてかゝる仰を奉りしなり。重き任なれば、内縁を頼み訴する者あるべし。公私に付て口をそへられずば、仰を畏り奉らん。もし少しにてもいろはれんとならば、只今其よし申して、京には赴き候はじといはれければ、こはいかなる事をのたまふぞ、仰せをかしこまらせ給へ、女の身いかで公の御事にたづさはり申すべきといはれしかば、さらばとて出づる時、はかまの腰をねぢらしてさらしを、それはいかにといはれければ、勝重さればよくあるべしと思ひしなりとて、重々にいましめて後仰を奉りたりと世にはいひ傳へたり。勝重尾張の惠阿寺といふ曹洞宗の長嚴和尚が弟子にて長祐といひしが還俗して、四郎右衛門といひけり。勝重嫡男を重宗次男を重昌といふ、二人とも江戸にあり。或時大猷院殿訴訟をひとつ巧に構へさせ給ひ、二人をめして判断せよと仰せ有りけり。重昌仰を奉り理非分明に決定して退出す。重宗や、久しく

思慮して後、重ねて決断の旨を申上候は、やとて退出し、二三日過ぎて後御前に参り、判断の旨を申したるに、弟の重昌が申したるに相同じ。人々兄にまさりたる重昌なりとほめあへり。其後勝重京より江戸に下りし時、大猷院殿かの訴の判断の事、詳かに示させ給ひ、重昌が才器を御感あり。勝重承り内膳正はわか氣にて思慮なく候。周防守は國家の政事を取候とも、其任に叶ふべし。其故は訴を判断する事は、政事の一つの條目にて候。政事は至つて重き事にて、一言を以て天下の利害にかゝり候。苟にきはめ申すべき事にはあらず候。政事は大事とくりかへし思慮いたし候へば、重宗は政事とり候とも仕損すまじく候。只打見たる所を以て、己が智慧を人に見せんと存する所は重昌がわか氣と申す物にて、思慮なく候と申しければ、御感淺からざりしとなり。其後伊賀守年老いたり。所司代の職に任すべき才をえらび候へ。汝が替りにせばやと仰せ有りしに、勝重子にて候周防守所司代の任にかなひ候よし申したりければ、内々其ごとく思召されしと仰せ有りけり。周防守は斯ともしらず、御小姓にてありしに、父伊賀守がかはりに仰せ出されけり。周防守上京せられしに、伊賀守衣服をあらため、左右の職に居る人を並べ置き、記録をも悉く取出し、周防守を上座にまねき、謹んで江戸靜謐の事を窺ひ、今日より所司代なれば、萬事引渡し候といふ。周防守只今まで、御側に仕へ奉り、世の有様ゆめ／＼存じ候はず、仰にも父を見ならひ候へとの事なりと申されしに、伊賀守いや／＼其職に居るべき者なりと擇み出されし故、かゝる重任の仰は奉りたりと覺ゆるなり。人の心は面の同じからざるが如し。我に付きそひ居たればとて、我にはなる、時は、自ら決断するより外の事なし。汝が不才を隠しなば、五畿内はいふにや及ぶ、西國までも禍有るべし。ちつともかざる事有るべからず。只不才とあらはすを第一とすべし。不才をしろしめされなば、其任に當るべき人を擇ばれて、仰せ付けらるべし。更に恥辱にあらず。今日より所司代の職に居るべしといはれしかば、周防守其詞に隨はれぬ。勝重は町家をかり置きたるが、そこに引移り、碁を打つて口ずさみに、今度の所司はきびしいものよ。われをあひしらひたるが如くならば、必罪せられなんとて、碁を打ちてありしとぞ。

重宗訴訟を聞かれし心得の事

周防守重宗京都の職に有ること凡三十餘年、人敬ふ事神明の如く、愛する事父母に似たり。父子誠に同じ名臣とぞ聞えし。されば重宗は寵恩も殊に厚く、從四位上にのぼり、官左近衛少將にす、まれけり。重宗職に任じて後、毎日決断所に出づる時、西面の廊下にして、遙に伏拜む事有りて決断所に出で、此所に茶磨一つする置き、あかり障子引きたて、其内に座し、手づから茶ひきて訴を聞く。人皆不審しあへりけるに、遙に年経て後問ふ人有りしに、重宗答へて、先決断所に出づる時、西面の廊下にて遙に拜する事は、愛宕山の神を拜するなり。多くの神の中、殊に愛宕は靈驗新なると聞きし程に、所願ありてかくは拜しぬ。其所願は今日重宗が訴をことわらん、心の及ぶほど私の事あらじ、

若あやまりて私の事あらば、忽ち命をめされ候へ。年頃深く頼み奉る上は、少も私心有らんには、世にながらへさせ給ふなど、毎日祈誓するにて候。又訴をわかつ事の明かならぬは、我心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は自ら動かざらんやうにこそあらめど、重宗それまでの事は及び難く、唯心の動と静なるとを試みるには、茶を挽きてしる。心定りて静なる時は、手もそれに應じて磨のめぐる事平かにして、きしられておつる所の茶いかにも細やかなり。茶のこまやかに落つる時にいたりて、我心も動かぬと知り、其後やうやく訴をわかつ。又明障子を隔て、訴を聞く事は、凡人の顔かたち、打見るより憎さげなるとあはれましきとあり、誠しき有り、かだましきあり、其品多くしていくらと云敷をしらず。見る所の誠しきと思ふ人のいふ事は、眞實ときかれ、かだましきと見ゆる人のなす事は、何事もみな偽と見ゆ。あはれましき人の訴は托げられたる所有るかと思はれ、にくさげなる人の争ひはひが事ならんと覺ゆ。是等の類は目に見る所に心のうつされて、彼詞を出さぬうちに、はやわが心の中に邪ならん、正しからん、よからん、直ならんとおもひ定むる程に、訴の詞に及びては、我おもふ方に聞きなす事多し。訴のなるに至りてはあはれましきに憎むべきあり、にくさげなるに憐なるあり、誠しきに詐有り、此たぐひ殊に多し。人の心の測りがたきかたちを以て定めん事叶ふべからず。古の訴訟を聞くには、色を以てすといへども、それは重宗が及ぶべきにあらず。又さらぬだに、訴の庭に出でんはおそろしかるべきに、まして生殺を司れる人を見ては、いぶせて自いふべき

事をも得いはで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬにしかじとおもひて、かくは座をへだつるにてこそあれと答へられしとぞ。

板倉重矩の事

板倉内膳正重矩のいはく、

重矩は伊賀守勝重の孫にて、島原に於て討死有りし内膳正の子周防守重宗の従子なり。睦にて長卑く以の外見ぐるしき人なりしかども、有徳賢才のきこえありて、寛文二年祿二萬石増賜はり、大阪の御城代たり。寛文五年大雨にて雷天主に落ちて火出て焼上りしかば、大阪のさわざ大かたならず。萬治三年雷火有りし時、鹽硝の藏に火入りて死人多かりし事を聞きたりし故なり。内膳正町奉行彦坂壹岐守石丸石見守兩人に、鹽硝は皆濠中へ入れたるよしふれさせられしかば、騒ぎ静まりけるとぞ。内膳正豫め警衛の備かたく下知し置かれし故、尼ヶ崎の青山大膳亮、人数をひきゐる大阪に來り、其備を見て深く感せらる。此旨江戸へ聞えしかば、御書を賜はり稱美ありければ、内膳正即ち家士を集め、是皆汝等が功なりと譲られしとぞ。同年の冬江戸にめし一倍の祿を増賜はり、執政の職を仰蒙られけり。同八年京都所司代牧野佐渡守正親のかはり仰出さるゝ内、しばし内膳正をもつて京都の事を司らしめ給ふ。上京の後参内の事あり。此禮儀御簾を半卷上げらるゝ例なれども、内膳正恐懼すべき事なれど、天顔に咫尺し奉るの名有つて其實なし。御簾を高く卷上げられ候へと奏

聞有りしに、尤なりとの勅にて御すだれを高く巻上げらるゝ事、内膳正一人なりしとぞ。其後又一萬石増賜はり、下野の鳥山の城主たり。重矩若きより詩歌に心をよせ、學問を嗜み、熊澤伯繼が門人にて、嘉言善行多かりき。京都にて加茂川洪水の時、白川より加茂川四條の間へ堤をつかせ、また鞍馬の往來市原といふ所に水流れ、往來の困なりしかば、田地をもとめ川筋を除き、山路を開かれしかば、内膳死後に及びて此地の百姓ども仁徳を慕ひ、如意谷に内膳正の位牌を設け跡をとぶらひしとなり。

財寶を奪ひとる者をむかしより盗と名づく。我つらくおもふに、大名に盗多し。下士民の善あるをあげずしてすつるは、是人の善を盗むにあらずや。親族朋友にも善あるを稱せずして過ぐるは、是も人の善を盗むなり。中にも君たる人は下の善をあぐべき職に有り。是天より命せられたる任なり。人の善を盗みて、天命の任をかぐは盗の大なるものなり。われもし人の善を盗まんやと是のみ心を盡すよと語られける。又伯父周防守が語りしに、人の性質さまざま有る中に、見たる處のにくき者あり、愛すべき人あり。此にくき人を見ては、善言をあしさまに聞きなすぞかし。況や直言をいへば、いよく憎むものなり。又愛すべき人のいふことは、よからぬ事もよく聞きなすものなり。これ心得べき事なりと、父なりし伊賀守常に戒められしは格言なりと。又語られしは儉と吝と相似て、其本大に異なり。儉は事の費をいとひて奢侈ならず、用ふべき事に財を用ふるをいふ。吝は是非の論なく、一向に物を

惜むなり。又戒められしは、わが心に叶ひたる者のいふことは、何事もよく聞え、行路のよからぬも心づかず。又我事を憚る所なく直言する人は、道理の至極せるをも外になし、其詞の無禮を罪とす。是皆事を過つのもとなりと、其前一萬石の中甚貧しかりしに、新に儉約の法を定め、先自らの事を第一に守られし時の歌、

もとめなき心もこともおのづから任せて過ぐる身こそ安けれ

毛利勝永大阪に入る事

關ヶ原亂の後、毛利森と豊前守勝永は土佐へ流罪せられしに、大阪に事起ると聞き、或る夜妻にいひけるは、我罪在つてかゝる所に居住し、汝にも斯うき事を見る事ぞとよ。されども我志あり、詞にあらはしがたしと語りければ、妻のいはく、世の變はいかなる人もはかるべからず。かく成りはてたりとも更に悲しむべきにあらず。妻は夫に従ふ道とこそ聞きて候へ。其御志を承らばやといふ。勝永云く、我武名を傳へて數世に及びぬるに、かく沈み果てなん事口惜しき事なり。命を秀頼公に奉りてんと思へども、我愛を忍び出でなば、愛が上にも猶うき事や御身の上に添ふらんと涙を落しけるに、妻つくくくと聞きて打笑ひ、弓箭取の妻となりていかでかかゝる事を恐れなんや。はや此曉船に乗て武名を深くし給へ。君のため家の悦び何事かこれにしかん。わらはが事は思ひ給ひを。いかにもなり給ひたらば、此島の波に沈み候べし。運命めでたく頓て逢ひ奉らん。急ぎ給へといひければ、勝



永悦んで、小舟に取乗り大阪に至り籠城しけり。其後山内對馬守より豊前が妻を固くいましめおき、かくと告げられしかば、東照宮聞し召し、勇士たる者の志感賞すべきことなり。豊前が妻罪する事有るべからずと懇に仰有りければ、豊前が妻大阪の城中に入りけるとぞ。

一説に、父壹岐守勝信も土州に流されしが病死しぬ。勝永土州に在りて、年月を送りけるが、時々其従士宮田甚三郎を大阪にやりて、其従弟なりし大野修理亮が方まで秀頼の無事を問はせけり。かかる所に、大野より秀頼兵を起すの旨告げやりしかば、勝永土佐守忠義を欺き關東へ忠を致すべし。先非を改め、舊領に復せん志なりと云ひて、土州より船に乘らんとしけるが、甚三郎を呼びて、我大阪に著きたらば、嫡子式部次男藤兵衛ともに山内家より殺害すべし。如何すべきといひしかば、宮田夜に入て陸に上り、式部が乳母の子小原文右衛門と相謀り、難なく式部藤兵衛をつれて舟に來りければ、勝永悦んで船を出し、ともに打ちつれて大阪に至れりといへり。

池田忠繼朝臣士を懐けられし事

池田左衛門督忠繼は東照宮の御女北條氏直の北の方にておはしけるが、北條家亡びて後、國清公に再嫁ありて生れ給へりしかば、東照宮の御外孫なり。大阪冬陣には十六歳なり。一旦和平に成りて師を返へされし後、軍に従ひし士ども寄集りて、物語する時、一人の云ふ、若き殿の此度の軍に日比と大に違ひて、諸事の下知兎角いはん詞もなし。中にも今まで詞に出さぬ事一つあり。仕寄場にて寒氣はげし

きにさぞ苦勞ならんとて、小き手樽に酒を入れて給り、又綿入の肌著を賜り、此事ゆめ一人にな泄しそと仰られし志の忝さ、忘れがたけれど、語るなど仰ありし故、今までは泄さざりしといへば、一座十四人手を打てわれくも其通なりき。我一人のあひしらひなりと思ひしに、皆斯の如きはためしすくなき事なりと感じあひけるとぞ。

芳賀内藏允武者振の事

大阪冬の城攻に興國公の攻口は天満橋の邊なりしに、先陣の士大將波多野掃部須加左京竹把を付くるに兵少くして、夜にならではいかにも調ひがたく候。日のうちとならば、兵を増し給はり候へといひしかば、其様を見て來れとて、芳賀内藏允先陣に行く。芳賀は茜染の羽織著たり。先陣の兵ども家屋の焼後土藏の陰に控居て、橋より上にしるしの株の候、見られよといへば、芳賀すゝみ行く。芳賀近頃寵せらるゝ者ぞ、武者振見よといひあへり。芳賀馬よりおりて徐に川岸を、歩むを城中より打出す鐵砲川水にひきわたれり。芳賀ちつともさわがず、足の數をかぞへて歸り、いかにも兵少くはかなひ候まじというて、旗本に歸る。この芳賀はもと祐筆なりしが、岐阜落城の日、國清公勝軍の書を芳賀に書かせられし時、麓に將机に倚りておはす。芳賀其前に跪いて在りしに、城中の焼きたつる火鹽硝の庫に入りて、其音山嶽の崩るゝがごとく、敵押寄るかと思ひしに、芳賀が筆把りて書きし様少しも駭く體なかりしかば、事によせて試みらるゝに、器最大なりければ頻に用ひられて、祿二千石賜はり、

後國政を執りしに、度々直言を申し諫め争ひてことよく治りけり。

佐竹勢今福口を攻むる事附杉原常陸武功の事

大阪冬陣に佐竹義宣今福口を攻むる、士大將澁井内膳先陣して柵の木を打破る。佐竹に付られし軍の目付安藤治右衛門屋代越中守先がけして、安藤さわやかに物具せしを、柵の中より鐵砲以て冑の上を打ちかする。安藤折りしきたれば、頻りに打ちかけて立上り得ず。屋代父子伊藤右馬允駈來り、いかに安藤日比は年若しとして自慢せしに、はたがへりといひて柵を打破る。木村長門守重成城より助け來り、柵を隔てゝにらみ合ひたり。木村は黒き平袖の羽織を著し柵に取付きて、あはれ槍にてたゞき崩さばやといへども、鐵砲の足輕ちり亂れて來らざりしに、井上忠兵衛といふ者、鐵砲持たせ馳來りければ、あの鳥毛の羽織著たる敵は物をしよ。打落し候へと下知して、柵の木に鐵砲をもたせて澁井が胸板を打通す。木村をめてかゝり寄手を追崩す。平塚五郎兵衛澁井が屍をふみこえしを、木村が從者首を取らんとすれば、平塚其のひえたる首何にせんというて、敵を追たつる。義宣使者を上杉景勝に遣はして、加勢を乞はれしかば、杉原常陸横合に兵を出す。杉原は大阪に師を出す時、吾物具以ての外ふるくて、日本國の弓取に笑はるべしとして、猿樂の半臂を用意せしが、其日其物具の上に著て塵の緒を腰に結びてさげ、七百計をひきゐて川の中の洲に進みしかども、水深かりしかば、玉薬を惜まずこみかへく城兵を打ちしります。軍兵を下知するに、進退思ひのまゝなり。杉原が士卒を下知する有

様を、諸將の陣なりを辭めて見物す。譬へば馴れたる雀の子を呼ぶに似たりといひあへり。東照宮遙に杉原が出立を御覽じ、上杉が家は古風なるゆゑ、鎧直垂を著たるなるべしと仰せ有りしは、半臂を遠く御覽有りての事なり。其後上杉家の士大將に御感狀を賜はる。杉原御前にて、謹んで上を包みたるをとき讀終り、始の如く包み、本多正信のかたを見やりて感じ、仰せ候詞殊更に忝く覺え候。景勝武功を賞せさせ給ふゆゑに、陪臣までかゝる仰せを承る事、謙信弓箭の遺風を天下にあぐる所に候といひて、退出したりけり。

上杉景勝志貴野口合戦の事

志貴野にて、上杉景勝先陣柵をやぶり、井上五郎左衛門を始として、敵百計討取り大和川まで攻入る時、景勝直江を呼びて城兵援來るべし、先陣はいかにと問ふ。直江先陣は士卒少く候へ共、安田上總介二陣は隅田大炊介長則に定め候と申す。いやく隅田を先陣にして、二陣を安田に繰りかへよと下知せらる。是激の道なるべし。かくて安田は先陣を二陣にくりかへられ、口惜しき事なりと齒がみをなし、隅田が軍兵は安田に踰えて功名せんと勇み、兩陣とも勇氣倍しけり。二十六日曙に隅田押寄田切豊後守眞先かけて首を得、北條清右衛門等も討死し、遂に打勝つて井上五郎左衛門を討取り、柵二重破りたりけるを、城中より大軍我先にはせ向ひ、大野修理治長、木村主計頭宗重、渡邊内藏助、竹田永翁等競懸る。隅田は百挺の鐵砲を一の木戸口に立固め、打たてさせけれども、城中よりの加勢眞

黒に成つて切つてかゝるを、半時計さへて戦ひ、鐵砲の物主石坂新左衛門一足も引かず討たれ、終におし立てられぬ。二陣の安田は兼てよりかたへに陣をおし出せし故、隅田が士卒景勝の旗本前へ崩れかゝる。景勝三陣の士大将杉原常陸親憲金の輪拔の立物打つたる冑を著、金の鎗の馬印を取て、大将の仰せを隅田人數兩方へわかれ候へと呼はりて、馬じるしを打ちふりて下知しければ、隅田が兵忽ち兩方へわかれて引取りけり。杉原敵をおもふ様に近々と引受けて、前に立てならべたる鐵砲を雨の降ることく打ちかけしかば、安田二町あまり勝にひかへたるが横あひに槍を入る。隅田も忽ちもり返し、城兵を追崩す。隅田は初に討負けたるを口惜くおもひて、従者五人にて敵の中に紛れ入り、首二つ取て歸る。景勝進んで押詰めんと見えしかば、久世三四郎乗來り、俄に城を攻めば死傷多からん、後陣の堀尾山城守忠晴と入かはられよと仰候ぞといふ。景勝聞きもあへず、弓取の先をあらそふ時、一寸ましといふ事あり。今朝よりはげしく軍して取敷きたる所を、人に譲りて、退く事や候とて少しも動かす。丹羽長重景勝の陣に行きて見れば、景勝將机に倚りて城中をはたと睨み、物具もせずして青竹を杖につき、左右に軍兵三百計槍を横たへ跪きて、紺色に日の丸の旗毗の文字の旗二本に、淺黄の扇の馬じるし押立て、しづまりかへりて長重を見むきもせず。長重も勇將なるが、後に人に語りて景勝を譽められたり。

上杉家の士大将に御感状を賜ふ事

東照宮志貴野にて功名せし景勝の士大将に御感状を賜はりしに、安田上總介は横槍を入れて城兵を打破りし功大なりといへども、直江と不和なりし故に、其功上に達せず、御感状賜らざりしかば、其後人に向つて、此度御感状を拜受し給ひて目出度候。上總一人は申立つる人なくて、さばかりの武功むなしくなりて候。されどもおとりし事は候はず。是ほどの事武功は申達するまでもなし。且殿の御爲に命を捨て、軍仕候。露ちりばかりも公方のためにする事に候はず候へば、是より後も殿をこそ大事におもひ候へ、公方の御感状何條面目に存すべきやと語りしとぞ。

井伊直孝陣代の事

大阪の事起りし時、井伊掃部頭直孝を召して、兄右近大夫直勝の陣代をぞ仰出されける。直孝は直政の二男にて、母は松平周防守康親の従者の女なり。直孝六つに成りし時、母の方より直政に送りけるを、百姓の許に置かれけるが、十三の時民家に盗の入りてさわぐを聞き、かけ出でて、暗夜の事なるに、盗山へ登りけるを追つかけて高股を切つて落されけり。かくて人あまた來りて、盗をば打殺しぬ。直政に申せば、よび寄せて冬の事なるに、北に向きたる座敷の雪の入る處に、跪かせて置かれたり。雪ひざを降りうづめどもちつとも動かす。直政悦んで呼入れられ、犬の子をあたへられけり。十四の時直政病重くて死に及ぶ時、其の生きさやするかりけん、塵に鐵を添へてかたみにあたへらる。直孝は上州にて一萬石を賜はり、大番頭を命せらる。直政の長子父の跡を嗣ぐ

といへども、多病にて公事勤勞しがたしといへり。

直孝しばらく仰に任せず、先づ宿所に歸り、彦根の長臣を集め、仰はしかぐなれども、各我下知に従ふべくば、陣代を勤むべし。しからずば、仰を固辭し申すべしといへば、皆いかでか下知に背くべきといふを聞きて後、仰に任せて陣代仕るべしとぞ申されける。井伊の家に兵庫といへる物しの年老いたる有りしを、直孝呼出し、汝日比軍術に長せりと聞く。相傳ふべき事やあると問はるゝに、兵庫年老い候うて、今日をしらざる體、戰場に打出でざる事遺恨に候とて、懷より一巻の書を取り出し、大將たる人志を決斷して、狐疑なく下知あるべきかと問ふ。直孝聞きて、教はいかにも我思ふ處に他岐なく決斷すべしと答へられければ、兵庫臣が年比思慮せし處、只是のみにて候。兩端を持して兵の道行はるべからず。外に申すべき言なしとて、其書を焚きけるとぞ。

元和元年の春、直政の領國直孝相嗣がるべき旨仰出さる。安藤帶刀をもて再三辭し申せども、許されず。十八萬石を分ちて、直勝に三萬石、直孝に十五萬石賜はりぬ。其後五萬石増與へられ、台徳院殿、大猷院殿五萬石づつまし賜はり、中將に任せられけり。

本多伊豆守出陣聯句の事

越前忠直大阪に師を出す時、士大將本多伊豆守僧を集めて聯句しけり。將机によりて聞居りしが、勇將麾下無弱卒といひしに、かたへより高祖帳中有張良といふを聞きて、門出の目出度さよとて打出で

けり。

東照宮御父子御陣替の事

大阪冬の軍に、東照宮は茶臼山、台徳院殿は岡山に陣所をうつし替へらるゝ事あり。諸將も城近く陣を寄する時、若し騒ぐならば、城より撃つて出づる事あらん。陣を整へしづまり候へと、五の字の御使番乗りめぐりて、仰を傳へし處に、井伊直孝陣所を替ふると、鐵砲を押しならべ城中に打ちかけ、陣の聲をあげ、只今城に攻入らん體なりしかば、台徳院殿直孝兄が陣代となり、人そばえしけるよと怒らせ給ひ、本多正信を東照宮の陣に使を命せられけり。御前に參り、未詞に出さざる處に、直孝は父の子なり、けふ陣所を換ふる時、味方を競はせんとして、鐵砲をうたせしよと仰せられければ、正信承り、かくまで思召の同じきと申すもあやしきほどに候。直孝がふるまひ感じ思し召し、參りて其由を申せと仰せ候ひきと、申して出でにけり。

後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事

大阪にて城兵千波を焼きける時、後藤又兵衛備前勢必ずつくべし。若き人々待伏して功名あれといひければ、後藤が詞たがはじとて、待伏しける所に、敵つけ來らず。後藤が功名だてと嘲りけり。後藤積りも時々はたがふ事あるものなり。備前勢付けざるは、花房助兵衛まだながらへて居るならんといふ。

按ずるに、此時備前は池田左衛門督領せさせ給ひたれば、花房が事を司るべきにあらず。若や花房をもて付給ひしか、そのいはれをしらす。

此時戸川肥後守達安を始として、煙粉れにつけんといひしに、花房ききて城中に後藤といふ功者あり、必兵を伏置きたるべしと止めて付けざりけり。煙消えて見れば、花房が云ひしごとく、果して敵待ちかけ居たり。其後和平に及んで、肥後守が弟彌左衛門後藤に對面し、様々の物語する時、千波の事を云出し、備前勢の付けざるは如何にと問ふに、兩人のはかりし事更にたがはざりければ、人々聞傳へて稱しけり。花房助兵衛職之は、秀吉の心に忤ふ事ありて、佐竹が許に流され居けるに、東照宮御心を付けられ、花房が子を武州長榮山本門寺の上人に預置きしを、後に榊原康政養ひて飛騨守といふ。助兵衛老衰席上にも人に扶けらるゝほどなりしに、東照宮の仰せにて、大阪の軍にも従ひたり。乗物にて攻口に向ひ、急ならば吾乗物を敵に向つてすてよ、爰を慕と思ひて出たりとぞ云ける。東照宮御打廻りの時、道のかたへに乗物を置き、其中に蹲居したりしを、戸川肥後守かくと申し、かば、花房大事の時とおもひ、武を好む事、老いぬれども志はおとろへず、誠に大丈夫なりと仰せられけり。

卷之二十一

大阪にて台徳院殿諸將の攻口御巡見の事

大阪にて、台徳院殿諸將の攻口を御打巡はりありて、有馬豊氏が陣所にて井樓に上らせ給ふ時、御馬印を城中より見て、火矢大銃を打ちかくる。井樓を下りさせ給へと申せども、聞かぬ體にてまします所に、水野日向守参りて物見と巡見とは、別に仔細の候。陣々悉く御覽あるべければ、一所にのみましますべき様なし。志貴野を御巡り然るべしと申せば、即ち井樓をおりさせ給ひけり。

東照宮志貴野御巡見の事

大阪にて東照宮志貴野を御打巡りあり。上杉の攻口にかゝらせ給ふ時、鐵砲をならべ立てたるが、一同に城に向けて打ちかけたり。大將巡見の時の故實なりといへり。景勝攻口の陣所道筋に砂を盛り水を洒ぎ、さらびやかに掃除して、景勝直江只一人打具して、平伏して御目見申したりければ、東照宮いかにみな骨折たるぞと、御詞をかけられしに、童部いさかひにて、骨折候事もなき旨答へ申されけりとぞ

小田切所左衛門平野彌次右衛門武者振の事

眞田が本丸を攻むる時、小田切所左衛門、

一説に、嘉兵衛といふ。後齋伊豆といひ、又道仁といふ。武者修行して名高し。長久手にて直はたのはたらきあり。松川の軍にも武功あり。加賀利常に仕へて大阪の軍にも従へり。

城ぎはに近く寄せたるが、鐵砲にあたり、其玉をとり出し、脇に並びたる平野彌次右衛門に見せて打笑ひ、物語する體平生の如し。又玉一つ額に中るを取出したれば、血流るゝに、尙は大事の物よ、此尙は信玄公の許に有りしなりといひて、少しもひるみたる色なかりしとなり。平野も小田切と相ならびたる武者ぶりを、敵味方ともに譽めあへり。平野が従者五右衛門といふ者、矢面にたち、鐵砲頻に打ちかけしかば、かすり手十八まで負ひたる大剛のふるまひを、城中より高聲に稱美して、姓名を承らんといふ。平野則ち五右衛門に吾氏を譲りあたへしかば、五右衛門大音あげて、平野彌次右衛門が下人、五右衛門といふ者、是まで付きたる褒美に、只今氏を譲られて、平野五右衛門と申すなりと名乗りけるとぞ。

真田が丸を攻めたる時の事

十二月四日雪深く真田が丸へ、加賀の陣も非伊直孝も攻寄せける事、軍令に背きたれば、如何すべきと、台徳院殿仰せ有りしかば、先伺ひ奉り然るべからんとて、本多正信東照宮の御陣に参りけり。東照宮、いかに今朝は將軍にも悦びに有るべきよ、掃部頭堀際へ押詰め、敵に威を示して味方を勇め立てたるよと仰せ有りしかば、急ぎかへりてかくと申す。嘔て御本陣に御出あり。其道筋掃部頭陣を打

過ぎさせ給へば、直孝出向ひたるにらみて通らせ給ひぬ。孕石備前にかくと告ぐれば、孕石聞きもあへず、其如く物に心得ざる大將は、此方よりもきつとにらみかへすが然るべく候といふ。程なくかへらせ給ふ時、直孝出向ひければ、今朝の軍賞譽の御詞有りて、打過させ給ふを、孕石聞きて合點ゆきたらんには、其筈の事なりといひけり。

はじめ陣を移しかふる時、井伊家鐵砲をうたせし事ありし時、本多正信申せし事と相同じ。一事を二事に、云傳へたるなるべし。

塙團右衛門阿波の陣へ夜討の事

大阪冬の陣に、塙團右衛門重之阿波蜂須賀の陣所に夜討せんとはかり、

團右衛門は遠江横須賀の人なり。加藤嘉明に奉公して、祿千石足輕を預りしに、關ヶ原の時嘉明塙に下知して、そびき來れといはれしに、塙行きて見るに、諸將みな陣々を整へて、ひかへ居たり。君命とはいへども、敵に後を見せん事口惜しく思ひ、種ヶ島の鐵砲をならべ、散々に打立て歸りければ、嘉明汝は勇のみ有りて進退の理を辨へず、大將と成りて士卒を下知する事は思ひもよらず、汝を遣したるは、我過なりといはれければ、塙敵弱ければ詮方なく、無理なる答を深り候とて、夫より怨をふくみ伊豫を出奔しける。其家の中に、

遂不<sub>レ</sub>留<sub>二</sub>江南野水<sub>一</sub>高飛天地一<sub>レ</sub>閑鷗といふ二句を大文字に書きたり。嘉明怒つて塙が行

先の奉公をかまはれしかば、塙所々にて落ぶれ、後には京の妙心寺大龍和尚の許に居て僧となり、名を鐵牛といふ。けさの上に刀を横たへ鉢を招く。人或はにくみ或は誹りけるが、遂に秀頼にまねかれたり。

年十六歳已上五十已下の士八十人をすぐり出す。從者各一人と定めたり。塙と御宿越前と門口に槍を入れまじへて、一人づつしづかに出しけるが、槍を取とて從者をよび、さわがしければ、塙怒りて刀にてせよ、何槍とる事やある。首な取る。敵の旗を始めとして武器を奪ひとれと下知し、どつと押寄せたり。蜂須賀至鎮の士大將中村右近白小袖を著、冑ばかり著て馳合せけるを、木村喜右衛門突伏せしに、稻田修理透間なく走り來り、木村と突合寄手駈集り防ぎ戦ふ。米田監物は池田左衛門督の陣所を押へ居しが、これもかけ來りをめいて攻入しかど、寄手おひ／＼にかけ集りしかば引返す。生駒又右衛門首とりて、大野主馬が許に持たせやり、猶進んで中村が倒れたるを見て、首をとらんとする所を、修理が子九郎兵衛十五歳なりしが、生駒を討取りたり。

此夜討の前蜂須賀の士大將樋口内藏助今夜々討に入るべしといふ。若士どもいかゞして見定めたるやとさ／＼やく所に、中村右近もちをやきて振廻んとて、内藏助をかたへに呼入れ、何とて夜討有るべきやと問ふ。内藏助さればとよ、城の橋残らず焼落したるに、本町口の橋ばかり焼かざるは夜討すべき爲なり。今日狭間より外をのぞき見る體見ゆるゆゑ、夜討入るべしと答ふ。皆さあらんと

いふ。隣の陣小屋稻田修理に餅をふるまはんと云遣す。修理其まゝ來る、道はまはるなれば、七八十間もあるべきに、とく來られ候といへば、修理間のしきりの板ある所にわらをこみおきぬ。それをばづして來りたりと答ふ。果して其夜半夜討入りたり。右近眞先に出づる、修理おしつゞき出でたり。右近は冑ばかり著たるに、從者物具を持來りて著せたりともいへり。右近刀をふり廻し、敵の槍を切拂ふ。修理大音あげて右近とともにたらしき、右近は槍七八本にて突伏せたりといふ説もあり。右近が子若狭は阿波の留守に残し置かれしに、其背に右近修理に向ひて、若狭此度の戰場に出でざる事を口惜くおもひ、度々來るべき旨いひおこせしを、軍法を破る罪をおそれ呼びよせずと語る。修理尤にこそあれ、いひやりてとく來られよと告ぐべしといふ。そこにとく若狭は陣屋近きあたりに來りてかくれ居しかば、よび入れて其夜手に逢ひたり。右近父は次郎左衛門とて信長の扨從阿波守につけられて、祿千石七十人添へられけるとぞ。

塙はかねて支度して夜討の大將塙團右衛門と書きたる木札を道々に撒せけり。和平の後今福口の南に長二尺あまりの木に、塙團右衛門と書きて建てたりしを、人々あやしみ問ふに、塙加藤嘉明我をにくみさがし出して誅せんといはれしと聞くゆゑ、討手を待つといへり。塙が好ある面々あまた訪來りけるに、水野勝成の士黒川三郎右衛門尋來りしかば、過ぎし昔の交りをおもひ出して來られしこそ悦びなれ。林半右衛門は日比親しみ深かりき。いかにして一度の音づれもせぬにや、いぶかしきといひけれ

ば、黒川開きて林は池田の家に奉公して、今天満橋の陣所に有り。かくと尋ねて見んとて歸りしが、林にしかなくといへば、林さればよ、我塙と相約せしは、たとへ大國を領すとも手づから槍を提げ、おもふまゝに軍せずば、男子にあらじといひつるに、塙夜討せし時、橋の上に將机に腰かけ馬じるし押立て、應を取りたりと聞く。年四十八老いたりといふべきにもあらず。むかし相約せし詞にたがひたれば、使をも遣さざりといふ。黒川又塙が方に行きかくと語りければ、塙林がいふこそ理なれ。されども我嘉明に士卒を下知せんことおもひもよらずと罵られし事口惜しく、一度應をとり、軍を下知して嘉明にしらせばやと思ひて、其夜も手づから槍を横たへ突いてかゝり度おもひしかども、さはせざりき。既に志を遂げたれば、重ねて軍のあらん時には、槍刀の折るゝほど戦はんといひしとかや。

木村畑田屋牧野四士武功の事

塙が夜討の時、木村喜左衛門、畑角大夫、田屋右馬助、牧野湖太四人槍を合せしに、田屋は薙刀なり田屋をば槍といふべからずといひしに、御宿越前聞きて槍も薙刀も柄は櫛の木にて、及も同じ事の形の少したがひたる故に、名は同じからねども、薙刀は短ければ、敵に近き事槍より一等近し。槍といはんに何の仔細の有るべきと秀頼に申して、四人とも槍を合せたる感状を與へられたり。

木村重成感状を辭せし説

大野主馬が組の士此夜討に功名有り。木村長門守を頼みて感状を賜はらん事を申す。木村聞きて上に

もよく聞し召したれば、感状においては定めて下し賜はるべし。但し感状を拜領して、誰に披露せられんや。一本槍の士ならば、又他國の主君に奉公せん時の眉目にすべし。大野兄弟は大坂の長臣たる身、君と存亡を共にすべき人の、何のための感状ぞやといひしに、主馬恥ぢて詞なかりけり。

稲田九郎兵衛武功を語らざりし事

東照宮後稻田に御感状を賜ふ。太平の後御旗本の人々稻田に逢ひて、大阪夜討の時の事語られよといひしに、九郎兵衛聞きて十五の年の事隔たりてみな忘れたりとて、強ひて問へども一言もいはず。公方より賜りたる感状の詞をとへども、存寄らざる賞を得て深くをさめ置き、再び見たる事なければ、これも忘れたりとて語らざりしとなり。

細川三齋夜討評論の事

細川三齋病を養ふとて、吉田に寓居せられける時、渡邊睡庵勤兵衛訪ひて物がたりする時、大阪にて塙が夜討せし時、蜂須賀の士に感状を賜はりたるは、如何なるゆゑにや。夜討は虚を見て討つ事古今同じ。虚有りて討たれしに賞有しはいふかしくこそといふ。三齋聞きて、夏又事有るべきに遠く慮らせ給ひて、諸將の軍兵すゝめはげまされんとの故なるべきにやといはれけり。

大阪城中軍評定の事

大阪和平破れて後、秀頼軍評定の時、第一座に長曾我部、次に真田、其の次に毛利豊前守列座せり。秀



頼大野修理を以て、今度の合戦各所存を問はれけり。真田先長會我部に申され候へと辭し申しければ、長會我部聞きて真田殿ならで、かゝる圖を申出さるべき人有りともおもはれず、まづ申され候へと答へけり。真田さらば申して見ん、去年の軍は城固く兵糧も又多かりき。日數を過ぎば必西國の内を心替も有るべしと、何れも存寄りたる處に、おもひの外に和をよする人もあるべきか、寄手の中に心替も有るべしと、何れも存寄りたる處に、おもひの外に和に及んで總堀はうめられぬ。今度は守り遂ぐべき道有るべしとも存せず。只打出でて軍する程ならば、君御出馬候ひて、伏見の城を攻落し、即御上洛候うて洛外をば焼きはらひ、宇治勢田の橋を引落し、所々の要害をかたく守り、まづ洛中の政を御沙汰有るべし。其後勢によりて合戦の謀候ふべし、祝は申し納めぬ。若御運盡させおはしまし候とも、御上洛にて一度天下の主と號し奉り、洛中の御政務を執行はれんにおいては、後代の名聞是には過ぎ候ふまじといひしに、長會我部を始として、みな然るべしと同心しけるに、修理秀頼公の御旗を出されん事、かろくしきに似たりとて、背がはぬ色を見て、修理が母を人質に出し置きぬ。いかなる所存にやと、人々疑ひて議決せずしてやみけり。かゝる所に、修理が母の人質に出し置きたるも返し賜はりぬ。すでに關東の人數伏見に著くと聞えしかば、秀頼又諸大將を集めて、再び軍の評定に及びけるに、長會我部また、最前の如く真田にゆづりければ、真田駿河大御所の軍だて常にはやりたると承り候に、少しも違はず覺え候。其故は、昨今伏見へ著陣して軍兵の疲をも休めず、はや茶臼山におし寄すべきと申す沙汰は、はやり過ぎたるに候はず

や。伏見より大和路をおさば、行程十三里なり。彌疲れ候べし。明夜は軍兵いかに存するとも、胃を枕として一ねぶりせぬ事や候べき。一夜討すべき圖に當りたると存じ候。左衛門佐能向つて一舉に勝負を決すべしと申しければ、後藤又兵衛いかに此謀然るべう存候。されども真田殿をもて夜討の大將とせんに、萬にひとつも討死あらん時、人々力を失ひ候なん。今度國々の諸浪人馳集る事、偏に真田殿一人を目あてに仕候。夜討をばかく申す又兵衛能向ひ候はんといへば、真田とかくわれ能向ふべしといふ。後藤は有無に後日の合戦大事なれば、真田殿残りといまられよと争論して、終に一決せでやみけるとなり。

## 堀直寄見切の事

大阪夏の軍に、水野日向守勝成に大和口先陣の大將を命せらる。堀丹後守直寄松倉豊後守重政大和口に向ふ。五月五日夜ふけて、勝成敵よせ來ると見えて、松明多く見ゆ、懈るべからざるよしを諸將にいひ遣はす。丹後守聞きて、日向守は物になれたると聞きしに、功者ともおもはれず。寄來る敵何ぞ松明を多くともさんや、敵にはあらじといふ處に、日向守又使を以て松明みな消えたり、敵にはあらじと告知せられたれば、丹後守さては敵なり。何ごころもなく火をともしつれたるが、功者ありて消せたるならんといはれしが、果して後藤又兵衛なりけり。

## 山本權兵衛功名の事

松倉豊後守重政後藤又兵衛が陣を切崩す。松倉が士山本權兵衛義安十八歳にて槍を合せ、首をとりけるひまに、槍を敵にとられたり。其槍じるし敵の中に見えしかば、今は是までなり討死せんと云ひすて、敵の中へ入りて槍を取返し、其槍にて又敵を突伏せ、首を取りて歸りけり。

毛利孫左衛門野村越中を詰る事

大阪冬の軍に、池田左衛門督の使番毛利孫左衛門先陣に行きしに、村山越中毛利に向ひ、我今朝より敵近く居てつかれたり、指物を散々鐵砲に打破られぬといふ。毛利我五百人の士の中より撰んでほろを許されたり、汝に誑かされんや、汝竹把の外に出すと覺ゆ。指物の先のみさけたるは、其證なりといへば、村山答ふる詞なかりけり。

井伊木村挑戦重成討死井伊家諸士功名の事並横田甚右衛門藤堂高虎を激ます事

庵原助右衛門は井伊家の士大將にて軍奉行なり。大阪夏の軍に五月六日に道明寺に向つて先陣たり。井伊家の士大將川手主水成次は、去年の冬より直孝をうらむる故有つて討死せんと思ひ定めたり。出でたちける日、父子最後の盃したりとかや。金の懸口の指物にて眞先にかけ出づる。山口伊豆守重信、山口修理亮重政嫡子伊豆守重信二男長次郎弘澄は御潮氣を蒙り、塾居の身ながら井伊が陣をかりて忍びて出でたり。

遠山甚次郎鸞阪彌五郎満座七郎右衛門も、おとらじとさきがけす。

一説に、内藤新十郎、佐久間藏人山口左馬介三百計面もふらず切りかゝり、井伊が先陣を押崩す。

此時井伊家の剛の者ははれなる槍を合する士ありといへり。山口伊豆守は、川崎和泉守を討取りたり。

木村重成は田の中なる小高き處にひかへて下知しけるを、山口目にかけて畔をつたひよりて、沼の有りけるにふみ入れて、畑の上なる重成と槍を合せ、山口爰にて討死しけるといへり。

木村長門守重成が一陣槍の銚を揃へて待ちかけたれば、川手を突伏せたり。庵原は堤の上に折りしきて居たるが、川手が倒るゝ時、腰にさしたる金の塵のひらめくを見、つと立ちあがりかゝり候へと下知する詞の下より、八田金十郎走り出で、眞先かけたる味方の斬伏せられたる屍をふみ越えて大音あげ、一番槍と名乗り、槍を入れけるを、敵三十人除り取巻きたるに、えいゝと呼はり面もふらすたきあひたるが取巻かれ、二十一ヶ所甲冑を突きさかれ、既に討死すべき所に、戸塚左大夫を始として胃のしころをかたむけ、黒けむりを踏みたて、井伊が軍兵一同にとつと押しかゝり、木村が陣を切崩す。庵原は十文字の槍をよこたへ、進んで木村を目にかけて立向へり。木村庵原を二槍まで突きたりしに、庵原槍のしほ首を握り、數珠を手に懸けたるが念佛をとなへて、野猪のあれたるが如く、木村が槍の下に走り入りて突伏せたり。安藤長三郎かけ來りて、其首給はらんやといふ。庵原聞きて大阪落城日あらし、敵の大將の首とする事易からじ、あたゆるぞといへば、安藤木村が首を取る、庵原ほろかけたる武者を討取つて其首に母衣絹添へて奉る事軍法なり。大御所の寶檢に備へんに、母衣絹につゝ

まれ候へとて、母衣絹を安藤に與へしかば、庵原が從者母衣の出しにしたる白熊金のねち竹は、庵原が許にといめけり。

一説に、陣所に馬盜あるべしとかねて警めしに、安藤長三郎不敵者にて用心もせず馬を盜まれ、翌日の軍に井伊家の軍兵木村と戦ひける時おくれたり。敵敗北に及びて、長三郎走り付たるを、助右衛門見てあれに腰かけたるは能敵なり、討取といへば、長三郎動かすして死人の如くなる者討つて功名にあらずと答ふ。庵原しゆれば、長三郎あゆみより詞をかくれども、只首とれとのみいひて立ちあがらず。長三郎則突伏せて首を取る。是木村重成なり。長三郎を賞して五百石あたへらる。此軍に千石の賞をあたへらる、者ありければ、長三郎憤りて立去りけり。將の首を取りたれども、其法をしらざる故、賞少しと直孝語られしとかや。長三郎は安藤帶刀の從子なり。又後井伊の家に歸り仕へて、千石の祿をあたへられけり。

川手滿座山口は軍の場に死し、遠山は敵の首を取つて庵原に見するとして立ちながら死す。驚阪は小溝の中に倒れしが、口の中に暖りありて、百姓の家にかけ入りたりしが、息出でてたすかりぬ。みな敵に逢ふ所早かりしかども、軍奉行の庵原が下知なき以前ゆるに、ぬけがけとし、八田を一番槍に定められ、東照宮御感状を賜はりけり。

金十郎は、一番槍を合するのみならず、山口左馬介山口が弓頭飯塚太郎左衛門二人をも討取たりと

いへり。御感状に黄金御馬を添へて下さるともいへり。

木村が首を御前に出すに髮にたきしめし奇南香の薫せしかば御感あり。木村が冑は四方白にて鍔形の立物打つたり。

安藤を伏見に召し、青江の御脇差を賜はる。又一説に台徳院殿、長三郎に黄金二十枚時服三つ賜はるといへり。

庵原が子の主税助、北る敵を追つかけて組討ちしけるに、助右衛門はせよりて、いかに主税こゝろしづかにせよ、爰にて見物するといひけり。主税是に力を得、脇差を抜いて刺通し、よわる處に従者はしり來り、遂に其首を取る。横地修理西郷伊豫是を見て、東照宮に主税が幼年の武功を稱し申しけり。後に人々子の敵にくみたるに、掬げざりしは如何にと問ひけるに、庵原たれも子はかはゆきものにて候とのみ答へけり。

直孝木村と軍する時、中に堤あり。又藤堂高虎も同じく敵に向ふ處に、久貝因幡守高安筑後使をもて敵と味方の中に堤の候。是をとらば味方勝ち申すべし、とく御旗本を進め給ふべしと申す。東照宮怒らせ給ひ、これほどの事思慮なくて我先陣の大將つとまるべきや、敵堤をとらばすて、敵にあたへてこそ勝つべけれ。高虎とも覺えぬもの哉と仰せ有りし處に、小栗又市はせ來り、直孝只今敵にかゝり、堤の候に此堤をとらば勝たんといさみ候と申す。東照宮さぞあらん必定勝なりと仰せら

れけり。又矢尾にて、藤堂が先陣敵に向ふ。渡邊勘兵衛敵とせり合ひし時、高虎馬を御旗本に乗來り、御旗を寄せられよと申しもあへぬに、横田甚右衛門馬上より大音あげ、御旗を寄せられよと申すは何者ぞ、あれ追つちらし候へと罵りければ、高虎馬を乗歸る、是も激勵の術なるべし。東照宮品山入庵を召して關東の武者ども、軍になれて物いふ詞のおもしろきと仰せ有りしかば、入庵只今の一言横田ならではと感じ申しけり。一説に、東照宮の御旗本へ藤堂高虎乘來りて、敵の大軍押出し候と申すを、横田甚右衛門聞もあへず、何の御下知を待つことやある、とく切崩して討取り候へと云ふ。東照宮無禮なりと怒らせ給ひ、高虎にはよく見切つて、味方に手負討死なき様にはかり候へと仰らるゝを、甚右衛門大音あげて、敵を殺すに味方に手負死人なき事やある、とく切崩され候へと罵る。東照宮横田推參なりと以の外に怒らせ給ふ。高虎は我陣に乗歸る。和泉は見えぬかと仰の後、横田を御側近く召されければ、人々いかにと手に汗を握る處に、横田が耳に御口を寄せられささやかせ給ひてけり。其後いかに仰せけるぞと、横田に問ふ人ありしに、和泉を汝再三罵りたるは、一段然るべけれども、一戦をとげよとは、遠き御慮有りて仰せられがたきとの事にてありしよし語りけるとかや。

脇五右衛門某氏三彌武功の事

五月六日井伊家の士脇五右衛門、今日の合戦は跡より段々におし詰め來れば、大かたの事にては功名遂げがたし、若き人々力のかぎりはたられ候へといふ處に、直孝の近習の士三彌といふ若年の士首二つとりて脇に見する。脇もまた二つとりけり。翌七日三彌又首二つとりて脇に見すれば、脇もまた二つとりたり。後に老功の武名の聞え有り。人々あつまりたる處にて、三彌何れも老功の人として崇め、其身も泰なる體をふるまはるゝ事ぞかし、大阪の軍に事替りたる事も候はず。老功とて崇め候は何の故ぞやといふを脇聞きて、此度汝の功名の如くなる事度かさなりたる者ぞといへば、三彌さては仔細もなし。吾功名の如きは、いと易き事なりといひけるとぞ。

増田兵大夫討死の事

増田兵大夫は長盛の子なり。大阪冬の軍に城中よわると聞けば、涙を流し、寄手の攻めあぐみたる人いへば、大によるこびけるを、東照宮聞し召し、誠に長盛が子なりけり。豊臣家の恩を忘れざる志尤なりと感じ仰せられ、夏の軍に御赦を蒙り、城中に入り秀頼より賜りたる赤地の錦の羽織を着、若江の軍敗軍の中に獨ふみ止り、澤田但馬が従者と引組んでくみきたる處に、藤堂高虎の士母衣の者磯野平三郎はしりよりて討取り、其首を得たれども名をしらず、刀を分捕りしたるが、秀吉より長盛に給はりしもの故、兵大夫とはしられしとぞ。

青木長屋生捕らるゝ事井伊家赤備の來由

木村が一陣敗北しける中に、青木七左衛門黒母衣かけ、長屋平大夫は白母衣かけて、直孝の兵の中

にまぎれ入りしに、井伊家の赤色の物具にたがひたれば、からめ取り東照宮の御前に引きまゐる。長屋は今福にて一番槍を合せ、青木はけふ西郡にて一番首を取たりと名乗申す。其體おはれ剛の者よと見えしかば、二人共たすけられ、美濃にておのく五百石の祿賜はりけり。

井伊家のあかき物具は、直政の時よりはじまれり。甲斐の武田家の士大將山縣三郎兵衛昌景が一陣の軍兵、皆一色に赤かりしを、東照宮御覽じてこのませ給ひ、直政に仰せられて、甲冑をはじめ旗指物鞍籠鞭にいたるまで、みな一色に赤いろなり。夫より後も、かくの如くなりしゆゑ、井伊の家に新に奉公する士あれば、武器奉行軍令を見せて、物具みな新に赤色にして、百石に二十兩具足びつに納め奉行の士受取りて城中の庫に入れ置き、其價は祿の内より返しけり。此故に井伊家の武備かぐる事なし。若し去つて他國にゆく士あれば、奉行の士武器を返しあたへけるとなり。井伊家の軍令として、赤いろの武器の事、しるせる書も今世に傳はりけり。

藤堂家合戦渡邊勘兵衛功名の事井渡邊始末の事

藤堂高虎の士大將渡邊勘兵衛了は、

了は若き時阿閉淡路守に奉公し、十七歳の時一日に首六つ取りたり。阿閉の家にて剛の者といはるる士、十幅一丈の鶴の丸を繪に書きたる母衣をかくる者六七人有しに、了に此母衣を許されけり。後中村一氏に奉公せしが、小田原の北條を攻めらるゝ時、山中の城を俄に攻落すべき様を見て、一

氏を進めて頓て打破り、成合平左衛門に一氏の馬じるしを、本丸のすみ矢倉におし立てさせ、中村式部少輔一番乗りと呼はりけり。秀吉錦の羽織を一氏に興へられしかば、我けふの功名は汝故なりとて、羽織を了にあたへられしに、固く辭しければ、羽織の片袖をあたへんといはれしを、それをも辭しければ、蓮生院鹿毛といふ馬を了にあたへらる。其後増田長盛に奉公せしが、關ヶ原の時は、大和の郡山の城に有り。關ヶ原の軍破れて郡山の城を受取らんと、筒井伊賀守打向ふ。城代橋與兵衛鹽屋徳順等了と共に城を守るに、了は三の郭を持口とす。大將なければ、盜賊商家に入つて女わらべをなやます。了五百計の兵を打連れうち巡りて、盜を切殺し追つちらす。或夜盜賊城外の町家に火をかけんとせしを了出てあまさず討取りしかば、これより盜來らず。敵おし寄すると聞えしかば、城外の商家を焼拂はんといふ。了自焼は時あり、はやまりて焼かば商賈騒ぎてうろたへんも不便なりとて止めけり。城兵雜人を合せて三千餘りなりしに、士三十人下部八百計かけ落ちしけれども、了に従ひたる者は一人も逃出す。又城中の士百餘人金銀をあたへずば出奔せんといふ。了大に怒りて、城中の藏に有る金銀は皆殿の物なり。殿の仰なくていかでか出すべき。且此城を幕所と思ひ定めたる身の金銀何にかはせん、出奔せんとの用意ならん、錢一文もわかつべからず。かゝる者に、兵糧米を費さんよりとく出奔せよと罵りて、三の郭より妻子を本丸へ入れければ、横巻儀右衛門もついでしかりたり。藤堂高虎本多正純郡山におし寄せて、此時長盛は高野にて殺されしな

といひふらす。大阪よりはせ来る士卒を合せて九千餘人ありしを、了下知して持口を配り、日夜打巡りて怠を戒む。凡將なくてたて籠るものは、各相疑ひてこゝろなく成ること常なるに、了が下知よりしづまりて、城に將あるが如し。長盛高田遠江山川半兵衛に書簡を持たせ、城に庫の物を添へて目録をしるし、藤堂本多に渡し候へと命せられしかば、さらばとて大手搦手の門の鑰を高田寄手の士にあたふ。かゝれば奉行をもて門を守らせ、本丸までも入らんと騒がしかりければ、了使をたて城中より守るべき門々を、寄手より人を付られ候事はひが事にて候といはせ、了下知して手あらく門の鑰を奪ひ返してけり。城をわたせし時、外堀の柳町より奈良の方大安寺をさして、しづかに兵をくり出す。よく了が法令の嚴正なりしによりて、一人も騒ぎし者なかりけるとぞ。了は跡に残り鑰を収返しける時の寄手の人々に向ひ、さきのしわざ無禮に似て候へども、武士の義理と申物に候。若城中の庫の物一つも失ひなん時は、増田が士どもは盜をして出奔したりと申されん事口惜く候て、計ひきといひけれども、答ふる人なければ、鑰を了投出し返して、大門を啓かせ殿して城を出で、大安寺に至り、それよりみな人々分れ去りけり。長盛高野にて了が下知せし始終の有様を聞き、九千の軍兵馬も凡八百匹もあらんに、よく下知したりとて深く悦び、感状を了に與へしとなり。了藤堂家に仕へて、祿二萬石子の長兵衛にも三千石あたへられしとぞ。

新に奉公しけれども、世に譽高き者なれば、高虎寵せらるゝ事大方ならず。舊臣ども大に嫉恨みあへ

り、大阪五月六日の軍に了は先陣の中の手なり。六日の朝道明寺に軍を進めんやいかにと評定いまだ決せず。了矢尾平野は兵を下知すべき地利にあらず候、見て來らんとて、猩々緋の羽織を著、鹿毛なる馬に乗り、千塚より五六町もち出でけるに、朝の物見堺與右衛門に逢ひ、いかにと問へば、後藤又兵衛とおぼしくて軍を出し、はや水野日向守と鐵砲を打合候といふ。了聞きて堺に士一人添へて返し、とく旗を寄せられよと云ひ遣し、頓て片山まで乗行き西の方を見れば、八尾より若江まで大阪の軍おしつゝき、しづらうで東方の先陣に目をかけ、馬の鼻を揃へて進み來る。了さてこそと思ひ、馬を引返し道明寺をさして進む味方を押しむる。藤堂仁右衛門何故ぞと問ふ。了あれを見られよ、手に取るほどに近き敵を打捨て、道明寺にゆくやうやあるといへば、仁右衛門も尤なりと同心しけり。高虎何とて進む味方を押しむるやと、母衣の者をもて下知せらる。了頓て高虎の前に參りしかくなりと申せば、高虎如何せばやと思慮の氣色なり。了何の手だての候べき、かゝり來る敵に、辭退する事や候。相がかりにして打破るの外道なしといへば、さらば仁右衛門よべとて下知せらる。了聞きて、此處泥にて足入りなり、陣を備ふべき地なし、敵あひいまだ四十町もや候はん。横堤は是より十町計も有るべし。横堤まで細なはての道四筋見え候、南に向ひたる味方を西向に押直し、横堤まで進んでそこに陣を整へ一軍せん、北二筋の道をば下知し給へ、南二筋の道を押行く。味方は勘兵衛下知して、横堤にて押とめ列を正し南北一つに合せて候はんには、必定味方の勝なるべしと云て、馬じるしは四五町

ばかり後にひかへさせ、細道を乘行きて、藤堂仁右衛門桑名彌次兵衛等にかくといへば、北より進む。藤堂新七同玄蕃等一騎がけに馬を乗出し、我先にと西郡萱根をさして進みゆくを了見て、さらば南の味方をおし止めても何の用にかたゝん。とくかゝられ候へと云ひ捨て、了は山土阿野村に向ひけり。高虎の士大將、我もくと八尾道を西に地藏堂を見てかけ行きしは、了去年故有りて高虎にいとま給はり候へと云ひし事の有りしに、今朝より殿の前に出でて、勝敗の理己一人して計りにくさよ、渡邊にまさる武功を立てんとて、了が詞を耳にも聞入れざるなり。長曾我部盛親は矢尾の堤森ある處にすゝむ所に、朝霧のまぎれより物色はさたかならねども、南の方より紺地の白きもちの紋付たる旗を、せて敵かゝり來れば、堤の上狭ければ、旗を後の車き所へおろして立つるを、敵は北ぐるといひて、仁右衛門先がけて、馬に鎧を合してかけ行きしかば、桑名乗りつゞきて一陣の下知せられ候身に、一騎がけはひが事なりといへば、仁右衛門ふり願りて、渡邊が己一人武勇にほころが口惜きに、討死までよというて馬を乗はなし、槍を横たへ大音あげてかゝりしを、盛親が兵槍の鎧を揃へ堤におりしきたるが、盛親間遠なるに一人も立ちあがるべからずと下知し、近々となりける時、一同に立上り、えい〜と聲をかけ、槍をならべてたゝきたてければ、仁右衛門をこにて討死し、ついでにかゝりける藤堂が軍兵どつと崩れ、冑の緒をしめたる士六十三騎歩卒三百餘人討たれて、一支もなく敗北しけり。了は山土にて向ふ敵を追崩し、南を見れば、先陣やぶれて旗を捨て、我先にと逃ぐる處に横さまにか

け向ひ、盛親がみだれ足を追返し、仁右衛門等が討たれし地をふみしきたり。盛親は矢尾一町ばかりの西に橋を後にあて、ひかへ居たり。了いよ〜勇み切つてかゝらばやとは思へども、先に首取たる者ども、みな旗本に行きて了が左右三十騎計に過ぎず。かゝる處に、母衣の士山岡兵部已下七八騎はせ來りければ、了頓て押寄せて盛親が陣に切つてかゝる。山岡兵部矢倉長藏二人は南の方にかけてはなれ、おもふほど戦ひてはれなる討死をしたりけり。了が兵少ければ、少し引退く。畑の高くひき、地を便に兵を集め、盛親と互に間近く睨み合せてひかへ居たる處に、高虎使をもて何ゆゑに引退かざるやと七度まで下知せらる。了聞きも入れず、此一陣にて強敵を切崩し候。旗をだに押詰められれば北ぐる敵を追つたて大利なるべしと答ふ。高虎また使をたて、今朝死すべき所を通れ、面目なくて退かざるやとて引返せと下知せらる。了聞きもあへず、かゝる廣き軍場にては、勝つも負くるも所々にて様々にわかれ候。味方のもの主軍の道をしらす、下知するわざもなく、まばらがけて敵に切崩され、多くの味方を捨殺し、旗をも棄て、敗れ候を、殿には忠と思召し候哉、心得がたし。かく申す渡邊は今朝より、敵に比ぶれば五分一又は三分一の軍兵にて毎度うち勝ち、八尾にて味方をたすけ横合に敵を破り候。渡邊なくば、味方は泥に追入れられ、一人も残らずみな打たれ候べし。漫間しき味方の物ぬしの有様に候。盛親わづかの兵にてひかへ居るを、討ちもらさば殿の弓箭の恥なるべし。とく旗本を寄給へ。盛親をたやすう討取り申さんとて、彌退く色はなかりし處に、直孝軍に打勝ち赤旗おし立勇み

進んで押來りしかば、盛親が旗本色めきけるを、丁見て時こそよけれど、どつと切つてかゝり追たてたり。久寶寺より城兵も足をみだして敗北するを、あまさじと鐵砲を打かけて追ひつむれば、盛親が旗竿も悉くうち折られたり。丁は三百餘人の首をとり、平野まで進んでとりかためければ、道明寺口より敗北して越中に引入る。敵道をふさがれ詮方なくためらひ居しかば、丁大に悦び、高虎の許に使をたて、敗軍の敵數萬の歸路を立切りて候。軍兵をだに賜はらば、疲れ果て氣おくれしたる敵を殘らず打破り、大阪の城をば藤堂一手の武勇にて攻落し申すべし、疾軍勢を寄給へ。平野をかたく守り敵を打破らん事、掌の中にありと云けれども、高虎更に用ひず使をたて、何とて引返さるやと怒らるるのみなりしかば、丁も力なく平野に火をかけて軍を返しけり。これも平野の煙にて、城中に引入る敵を妨ぐるの術なり。此時高虎兵をすゝめば、眞田も毛利も城中に歸り入る事を得まじきにと、世にいひしとぞ。直孝高虎の陣所に行かれしかば、高虎對面し、けふ先陣におくれたる者の候うて、同姓にて候物主あまた討死し、口惜しく候と語られければ、直孝我敵に勝ちて北ぐるを追ひ候時、むしろの指物さして軍兵を下知せし士大將の候ひしに、強敵を切りなびけ軍兵を下知せし有様、あはれ大剛の物ぬしにて候。其人はいかにと問はれしに、高虎物もいはず、其時丁胃を脱ぎて進み出で、むしろの指物さし候男は、此勘兵衛にて候。天の冥加にて今日の武功を非伊殿見届け給はり候と大音に申せば、高虎いよ〜いかり憎まれしほどに、丁終に藤堂の家を去つて京都におもむき睡庵と號し、寛永年中までながらへ居たりしとなり。

## 横田佐久間非伊家の陣へ御使にゆく事

大阪の軍五月六日に非伊直孝打勝ちたりしかば、東照宮より横田甚右衛門、台徳院殿よりは佐久間將監を使に命せられ、直孝が陣所に行く。佐久間先に歸りて、直孝今日の軍に打勝候へ共、川手主水をはじめとして討死多く、明日の先陣如何候はんと申す。東照宮聞し召し、聞かぬ體にておはします所に、横田歸りて、直孝大利を得て明日も勝ちたる勢に乗りて、殘る敵をあまさず討取るべしと勇み申すと申せば、東照宮さぞあらんと悦ばせ給ふ時、横田すゝみ寄り、こゝに一つ思慮あるべく候。直孝が軍兵過半手負死人も多し。いかに心はやり候とも、明日の先陣はくり換へられ候へ。直孝畏り候はずとも、強ひて仰出され候へと申せば、東照宮我も左思ひつる事よとて、加賀利常本多忠朝を先陣に命せられけり。陣中の使者は心得有るべき事にこそ。

## 片桐丹後守一番首を取る事

片桐丹後守は越前忠直に仕へしが、大阪夏の陣に勘氣を蒙る事のありしかば、先陣に忍びきてひかへ居たるを、本多伊豆守見て、片桐は必討死すべし、あはれ赦され候へかしと申せば、忠直片桐呼べとて、使番須田長左衛門先陣に乘行きかくといへば、片桐忠直の前に參り、胃を脱ぎ涙を流し謹んで居たり。忠直其時汝が日此の罪ゆるし候ぞと詞をかけたる。片桐今の時に至りかゝる事こそ心得ねと思ふ



色顯れ、忠直の方をきつと見て、馬引寄せ打乗り、先陣に向ひて軍始まると鬪首を得たり。越前の一  
番首なり。

卷之二十二

松平助十郎先登戦死の事

大阪五月七日の軍に、水野隼人正が組の松平助十郎秀信、今日の一番は他人に先をかけさすべからず  
といふ。水野丹宮口廣き事ないひそ、誰か汝におとらんと争ふ。助十郎各よく聞かれよ、今度朋輩に  
一番の馬は吾馬なり。上田吉之丞が弟子にて、馭は許印可まできはめたれば、誰か先を争ふ者の有る  
べきといひしが、果して一番に乗出し敵に向ひて討死したりけり。

安藤彦四郎討死の事

安藤彦四郎重能は帶刀の子なり。成瀬豊後守が組にて台徳院殿の御小姓組なりしに、武士長生して諸  
方の事にあひ、武功多く死なすして世をおくるは、さまで勝れたる勇士とは云ひ難し。只潔よく討死  
せんこそ本意なれと、常にいひけるが、大阪五月七日に、一番首といは彦四郎、一番に討死といは  
ば彦四郎と思ふべしといひて、しなひのさし物を巻きて井伊直孝の先陣に行き、庵原助右衛門に向ひ  
て、是非かゝれといへども助右衛門同心せず。待受けたる箭先にいかにしてかゝるべきといふ。彦四  
郎其箭先へかゝりてこそ、勇士とはいふべけれといへども同心せず。彦四郎さらばかゝりて見せんと  
いふを押止むれども、少しもためらはず、敵の中にかゝりて討死しけり。帶刀馬上に塵をとり軍兵

を下知しける時、從者彦四郎が屍を引きのけんとするを見て、犬にくはせよというて乗りめぐり、北る味方を立直せしが、軍終りて後、大に愁傷の色あらはれしとぞ。

本多忠朝討死の事

大阪冬の軍に、東照宮本多出雲守忠朝に京口に行きて、川水を見來れと仰せらる。忠朝歸りて水の勢甚強く候と申す。又井伊直孝に見て來れと仰せられしに、直孝歸りて水淺く渡りやすげに候と申すを聞き召し、出雲は父におとれり。川水は女童もする所なり、出雲に見せしむるに及ばず、出雲をやりしは心有りての事なるを、知らざりしよと仰せられけり。物見の詞は、仔細の有るべきに心付かざりしにや、是によりて忠朝口をしき仰せをも受けぬるかなとおもひて、夏の軍に必死を期して、我と同枕に死なんとおもふ者は、起請文をかけたいはれしに、加藤忠左衛門、大屋作左衛門、藤井次左衛門、臼杵七兵衛等起請文をかきたりける。小野勘解由は士の軍に出でんに、命惜む人やあるとてあざ笑ひて打立ちけり。かゝる所に、五月七日天王寺口の先陣を忠朝に仰出されければ、忠朝大に悦ばるる時、小野進み出で、明日一の幸にて討死、二には一番槍、三には高野に入らんといふ。忠朝打ちうなづきて居られけり。茶臼山の下へ進んで、毛利豊前守勝永に向ふ時、小野かゝる足輕の竝居様は忽破るべしといふ。忠朝耳にも聞入れず、小野、口ぎはの黄なる殿の何を知り給ふと嘲る時、加藤も進み出で、足輕の竝居候有様は軍には見ず、只大多喜にて鹿狩にはよからん。あれに見ゆるは忠左衛門が

足輕なり、誠に戦に向ふ有様なりと打笑ふ。忠朝にくき詞かなとて、眉尖刀を提げてかゝられしかば、小野只今討死して殿に見せ申さんといふまゝに、眞しぐらにはせ行く。加藤は眉尖刀の鏑にてたゝかれて是も乗出す。忠朝は百里と名付けたる馬にのり、一文字に進む所に、小野敵に取りまかれ槍玉にあがりて討たるを見て、本多出雲守ぞつゞけ者共と大音あげて呼はりけるを、毛利に付けられし秀頼の物頭雨森傳左衛門以下七八人、透間もなくかゝりければ、忠朝持槍つかざりしによりて、數槍をおつとり突伏々々戦はれしを、紺の羽織著たる足輕二間はかりに詰寄せ鐵砲にて打ち、忠朝の胸に中りしかども、忠朝ちつともひるます馬より飛下り、その敵を只一太刀に切殺す。口取に兼ねて持たせられし鐵の筋がね入たる鼻ねちを左に持ち、右に刀を提げ、敵七八人切伏せ多兵に取りまかれ、散々に戦ひ、痛手廿餘ヶ所おひて討死せられしかば、大屋は其屍の上に取付て切死にしたり。藤井臼杵を始として皆同じく討死す。忠朝の首は雨森取りたり。後家に仕へて六千石あたへらる。

孕石備前廣瀬左馬之助討死の事

大阪夏の軍に、東照宮は伏見におはしまし、井伊直孝は宇治の北六地藏より軍を出して大阪に打向ふ。東照宮は、伏見船入の矢倉より行軍の有様を見物しておはしませしとなり。

宇治より伏見にかゝる道にて、旗をはり立てず。直孝般若野宮内を使にして、旗奉行孕石備前廣瀬左馬助に何故ぞと問ふ。二人承り、旗の事は此二人にまかせられ候へと答へておし通る。直孝怒りて、

又使を立て是非はり立てよと下知すれども聞入れず、伏見を過ぎて旅をはり立てたり。此は宇治より伏見にゆく道、東照宮のおはします所に向ひ奉るが故に、かくはしたりしなり。五月七日直孝御旗本の先陣として、天王寺の東北にて、大阪七組の敵に向ひて相戦ひ、軍危かりしかば、孕石廣瀬に向ひて、我年七十五、又恥をすゝぐべき時なし、討死せんと思ふなり、とく引退れよといへども、廣瀬士の恥は同じ事よ、孕石を捨殺し、逃げたりといはれん事こそ口惜しけれとて、二人共に旗竿に手をかけ討死しけり。廣瀬をば青木が組の稻葉伊織討取りけり。廣瀬は美濃が子孕石は主水が子にて、共に甲斐の武田の家の子なり。

## 廣田圖書が事

廣田圖書は水野勝成の士にて、大阪五月六日の軍に功有りしかば、明日は殿の馬前にて相働かんといへば勝成よろこばる。明石掃部が陣を打破る時、廣田鐵砲に玉薬をこめ、一はなしと思ひて打ちたるにたち消えしければ、鐵砲をなげ捨て、槍を取り、築瀬又右衛門といふ敵にわたし合せ、突伏せられしを、勝成はしり寄り築瀬を討取られけり。後に鐵砲を見しに火ぶたをきらでありしとなり。廣田人に語りて、事の急なるに臨みては、思ひの外にあわつるものなり。我すでに先がけ殿數多して自負せしかば、殿の前にて槍脇を打たんとおもひ設けしに、かくうろたへぬ、あつばれすべきと工みたる事のかくの如くなれば、まして不意の事をや、能思慮すべき事ぞとかたりけり。

## 毛利勝永軍配相違の事

大阪五月七日毛利豊前守勝永は軍をおし出せしが、住吉の松かげに白旗見ゆれば、これ駿河の大御所なるべし。一文字に切てかゝり、討死せんと志して兵をすゝむる所に、白旗見えざりしかば、長井傳兵衛水野伊右衛門に見て來れとてやりけるが、暫有つて乗り歸り、住吉に白旗は見えずといひけり。此は東照宮御旗を俄にまかせ給ひ、茶臼山の後にひかへさせ給ひける故とかや。勝永は小倉の城主豊岐守が子なり、勝永が子を式部といふ。父子共に秀頼にしたがひ、芦田矢倉に籠りて自害せり。

## 伊藤武藏守馬印を拾ふ事

同じ日、秀頼は樓門に打出て、澀金を緋緘にしたる物具著て、太閤の時より傳へられし金の切さき二十本、茜染の吹貫十本、玳瑁の千本槍を竝べたて、太平樂と名付けたる、七寸有りし黒の馬引きたてられし所に、先陣皆敗北しけると聞えければ、今は是までなり、敵の中にかへ入り討死せんと進まれしを、速水時之今打つて出たりとも勝利候まじ、疾く本丸に入らせ給へとて引かへす。かゝりければ、士卒ちり／＼に成りて馬じるしを棄てたりしに、伊藤武藏守おくれり歸り入りしに是を見て、朝鮮まで聞えし豊臣家の馬印を敵ひろひなば、大阪城中にをのこは一人もなきと、日本國中の物笑ひとならんといふまゝに、手づからふりかたげて、城中千疊敷に歸り入りけり。

## 郡主馬が事

郡主馬良利は秀吉の臣なり。石田権威を恣にせんとはかり、人をなつけん爲に、公用に金銀を出す事あれば、必其半をわけて密に私にあたふ。郡にもかゝる事有りしに、あらそふならば禍にあはんと思ひ、辱きよし石田に謝して、其金は大阪の庫に納め置けり。それより病と稱して出仕もせず。後に旗奉行たりしかば、大阪落城の日千疊敷に歸りて、床の上に旗を置き、去年の冬藤堂高虎天王寺におし入りし時、速水時之と謀を合せ夜討すべきを寵臣に妨げられぬ。住吉平野の陣所に忍びを入れ、火をかけて不意に一軍せんといひし謀も用ひられず。逆盡きぬると思へば、口惜しとて従者に、此小脇差は黒田長政我に贈られし時用る事有りて、功を立てんといひし詞あるゆゑなり。よく長政にいひて返し候へと遺言し、其子兵藏ともにも自害す、行年七十一歳とかや。秀吉の時より黄母衣ゆるされたり。

野村越中才覺の事

大阪落城の日、興國公池田利は城の北に陣し給ふ。かねて下知なき前に軍を進むべからずと仰出されしかば、陣を整へて御下知をまつ所に、寄手門々に押寄せしと聞えしかば、野村越中に見て來れと仰せらる。野村馬をはやめて行く所に、城より煙もえ上りければ、寄手攻入たりと思ひ、先陣伊木長門池田出羽が陣に馬をかけよせ、疾川を渡して攻入り候へ、仰ぞといひければ、先陣即攻入りて、首六百餘を得しは野村が功なりけり。

長曾我部盛親生捕らるゝ事

長曾我部盛親は、大阪の城落しかば落行きて段の中に潜り隠れるて、其臣中内惣右衛門飯を持行きけるに、蜂須賀の士長崎三郎左衛門が足輕、もと土佐の人にて中内を見識居しかば、かくと告げて遂に二人ともからめられけり。盛親とらはれとなりて後、藤堂高虎と軍せしに井伊の赤旗に妨げられ、高虎が首を見で口をしきとて齒がみしけるとなり。これは高虎使を直孝の許にやりて援を乞はれしに、直孝も木村を切崩し、追討ちになりて士卒ちりぐなれば、詮方なく戦ひは一手ぎりと答ふ。高虎の使木俣清右衛門に逢ひてけり。木俣、あれに見ゆるは伊達政宗にや、疾く行き援を乞はれよといひしかば、使道遠き所にうろたへ行く武士や候、歸りて軍にあはんとて馬を引返す。木俣さらばとて赤はたをすゝめけり。

一説に、盛親を生捕り伏見に參り御玄關に至る。井伊直孝安藤對馬守土井大炊頭列座し軍の事を問はるゝに、盛親申しけるは、六日の晩必死の軍すべしと存極めたるに、赤旗の横合に來りて候を見て、疲れたりし軍兵ゆる打ちまけて候といふ。格子の内に台徳院殿の御前に侍臣二三人立ちて、其かけより盛親を御覽有りしに、盛親も是を察しけるにや、其方をきつと見て居たりけるとぞ。中内は主君の此期に及ぶまで附従ひたりし忠節を感せられ、蜂須賀に賜はり御ゆるされを蒙りけり。一説に、長曾我部を生捕りて細二筋つけて白洲に引居るたり。台徳院殿御側の士を以て數千の大將たる身自害をすべき事なるに、さはなかりしは如何ぞと御尋あり。盛親わるびれたる色もなく、朝の

軍に打勝ちたれども、後の軍に赤備の軍兵に打合ひて味方あまた討死し、敗北せし事は非なき次第に候と申す。又討死するか自害するか、二つの志もなかりし事、返す返すも不審なりと、再び御尋ね出されしに、長曾我部承り、盛親も一方の大將たる身に候へば、葉武者と同じくかろくしく討死すべきに候はずと申す。再び兵を起して恥を雪ぐべき心言外にあらはれたり。さて其後引出して警固し居たりしに、飯をうづ高くもりて、長曾我部にすゆる。盛親警固の士の中おとなしやかに見ゆる人と呼ばれて、むかしより名將もからめ捕らるゝ事ためし多ければ、露ばかりも恥とおもふことなし。然るにかゝるいやしき食物をすゆる禮儀やある。とうとう首を刎ねてこそよけれと云ひける時、井伊掃部頭かたへをうち過ぎ、これを見て、法もなきふるまひどもかなと大に怒り、御厨に下知していさぎよく料理を調へさせ、繩をとかせ、座敷に長曾我部を招き入れ、いと懇に勞れを休め給へといはれしかば、長曾我部、是こそ禮儀をしりたる武將の道よと悦びて、始終少しもひるめるけしきはなかりけるとぞ。

大野道軒生捕らるゝ事

大阪落城の後、大野道軒或作大野道軒を生捕り、二條の城の駒寄にくゝり付けたるを立寄りて見る者夥し。皆いふ、道軒は聞きしよりも、大男なりといふを聞きて、さすがに士たる者とも覺えぬ詞かな、かねて我をかくいましめし如く、汝達を一々からめんと思ひしに、運命盡きぬれば、口をしき事なりと、すこしもひるめる色なかりしとかや。

渡邊内藏助が子城を落ちし事

大阪落城の時、渡邊内藏助たすけは矢倉にて二男三男を刺殺し、乳母に嫡男を運來るべしといひけるに、乳母心得候、白きかたびらを著せまゐらせ申さんといひて、其場をのがれ、濫昏に包み繩をもて堀下にさげ落し、其身ものがれ得て、彼子を市中の厠にかくし置き、日數経て逃去らんとせしを、關東の軍兵にとらへられぬ。いろくせめ問ひたれども、渡邊に従へる士水谷清兵衛といふ者の妻にて、我實子にまぎれなして、其餘の事をいはず。彼子も僅六歳なりしかども、いかにせめられけれども、内藏助が子たる事をいはず。さらば、金二兩出さば、助くべしといひしかば、乳母則舊郷渡邊に到り、百姓に頼みしに、さすが舊好を思ひ、且は乳母の忠義を感じ、金二兩授けしかば、則彼小兒を乞得て、京都に赴き、南禪寺の喫食となしぬ。十八歳に及ぶ時、細川越中守忠興一柳土佐守末榮など、ゆかりの方より還俗させられしかば、程經て、文照院殿甲府におはしませし時、此事をなげきて、遂に甲府に仕へ渡邊權兵衛とて五百石賜りけり。内藏助は大野に、秀頼公の御命別儀なくおはさんやうをはかり見よ、時を待つべしとて江州に落行きけるが、秀頼自害のよしを聞きて、立ちながら腹を切つて死したりけるとぞ。

齋藤織部落武者を助くる事

大阪落城の日、興國公の士齋藤織部黒母衣かけて、西國道に落ゆく敵に追付き、すでに討取らんとせしに、彼敵ふり顧りて、落武者の首とられたりとも、さばかりの武功ともいふべからず、いかに助けられんやといふ。齋藤從者にさゝせたる相印の腰指をあたへて、とく落ちられよ、見とがむる者あらば、池田が内の齋藤織部といふ士の從者ぞといはれよと教へければ、忝きよし謝して落行きけり。歸陣の後、齋藤が友來りて、大阪にて落武者の中に我ゆかりのもの、候が、たすけ給ひて相じるしまであたへられし故、のがれ出でて密に參りて斯くと申せしといひけり。齋藤後人に語りて、われ其時此武者を討たんは易し。されども落武者の降參するを斬りたりとも、母衣かけたる我にかばかりの功名とすべき。今は却つて奥深くおぼゆ。みだりに人數を殺すのみを武と思へるは、大なるひが事にてこそあれといひしとぞ。

澤原孫太郎節義赦免を蒙る事

明石掃部頭全登大阪に籠りしが、落城の後、討死しけるや落行きたるや定かならず。明石が士澤原孫太郎一脱に生捕りて、明石が行方を問はるゝにしらすといふ。さらばとて拷問に及びけれども更にはいはず。あまりにきびしく責められて涙を流しければ、行方をいふにこそあれとて、いかにと問ふに、澤原いひけるは、關東の兩御所の運つよくおはしまし候を感じ奉りての事に候。士たるほどの者、骨をきざまるゝとも主君のゆくへを申すべきや。此度大阪軍に勝たば、兩御所落行かせ給ふべし。其時

御邊たちをからめて、今我をせめられ候如くならば、主君の行方をも白狀すべき心なればこそ、かく我を責めらるゝならめとおもひて、おぼえず涙の流るゝと申しければ、人々詞なかりけり。東照宮聞し召し、たぐひなき忠義の士なり、よくいたはり候へとて、御赦し有りけるとぞ。今細川の家に其子孫あり。又池田の家にもあり。澤原は備前磐梨郡の村名なり。孫太郎が一族此村より出でたりといふ。掃部が居城の跡備前和氣郡和氣村の東の山上にあり。

丹羽左平太才覺城を落る事附左平太初陣義氣の事

丹羽左平太は、織田信雄の小姓なりしが、後秀頼に仕へ、大阪落城の時泉州貝塚まで落行きしに、野伏道をさへぎり取りまさきければ、丹羽我を殺さんとにや、又甲冑を奪ひとらんとや、著たるもの剣がれなば恥なり。我既に日本國をみな敵にしたれば、世にあらんとも思はず。出家せん僧一人呼びて給はれといへば、野伏僧をつれ来る。丹羽さらばといふまゝに立ちよる體にて僧をひしと押へ、刀を胸にあて、人質にしければ、野伏等もせんかたなく、いづくまでも送り申さんといふ。夫より紀州和歌山にゆかりの人有りけるに告げやりて、迎の人來て、紀州に匿れ居たりしが、程なく赦を蒙りてけり。左平太長久手の軍には小收に残されしが、朋輩の石黒八十郎に年幼しとて、旗をだに見ざるは口をし。後の咎はありとも、いざといふより馬にのり、長久手さしてかけゆく時、石黒丹羽に向ひけふの敵は池田ぞかし。池田の士に叔父の善内といふ母衣の士あり。行あふならばいかにせんといふ。丹羽

人々君の爲とはいへども、叔父を討たんもいかなりなどいひて、後にはかけはなれしが、軍既に終りて、落行武者有りしに、丹羽追付いて馬より突落せしが、母衣かけたる敵なれば、名乗れといふに、石黒善内と答ふ。丹羽聞きてしかくのゆゑありとて落ちられよというて、馬にかきのせたる處に、高木筑後守走來り、何とて敵を落すぞといふに、丹羽仔細を答ふ。高木幼年のはたらきといひ其志を感じ、後に東照宮にそのよしを申す。小牧にて信雄の陣所にわたらせ給ひ、勝軍に祝の酒宴のありけるに、左平太事を問はせ給へば、只今給事せし小姓なりと答ふ。けふかゝる事の候と仰られしとかや。其後秀頼に仕へて、大阪の軍の前關東に使せしかば、これに乗りて奉公せよとて、馬を賜りけるとなり。

大阪御陣中御支度の事

大阪冬の軍に諸軍に兵糧を給ふ。凡三十萬人一日に千五百石なり。遠國の兵には一倍を増賜りけり。夏の軍に東照宮松下淨慶を召され、大阪のまかなひ支度膳米五升干鯛一枚味噌少し香物少しばかり用意せよ、其餘に及ばすとぞ仰せられける。されば厨の入用只長持一棹にて事足りぬといへり。

本多落合功を論ずる事

大阪夏の軍に、越前の士大將本多伊豆守富政が一陣に首百七十三取りたりければ、我にまされる首數はあらしといふ處に、落合美作守、我こそ増りたれといふ。伊豆何ゆるぞといへば、落合聞きて本多には組に付けられし士の祿凡七萬五千石に及べり。かく申す美作は、一萬石の祿にて首四十八取りたり。祿の多少にて士卒の多少ある事はいふにや及ぶといへば、東照宮の使番諸星金右衛門柱によりて居ねぶりしが、目をひらき落合の詞尤ことわりなりといひしかば、本多詞なくてやみぬ。

後藤又兵衛が事

後藤又兵衛政次秀頼にまねかれて、大阪城中にありけるが、夏の軍評定に、政次國府越くらがり嶺に打つて出で、地の利に據りて軍するの外道なしといへば、則大和口の先陣して平野に打出し處に、東照宮より相國寺の瑞西堂を使にて、關東の御味方に參らば、播磨國を賜るべきよしなり。政次仰せ誠に忝しと申せども、御味方仕らん事思ひもより候はず。今大阪の勢ひ強く關東あやふく候は、別に存する旨も候べし。今大阪の運かたむきて、秀頼亡びん事近きに候。それを見て二心をいだかん事は、弓箭取道にあらず候、此よしを申されよ。是は物がたりにて候ほどに、よく聞かれよ、今日日本國に弓取多しといへども、政次にまされる者有りとは覺えず候。其故は去年より政次を頼み思召候は、高麗まで攻められし豊國明神の嗣にて候。また政次内通せば、天下分めの軍たやすく破るべしと仰せられ候は、徳川殿にておはしました候。天下の勝敗を政次一人が身にかけたるは、思出ならずや。死して冥途の面目なり。政次生きて候はば、一日に破るべき大阪も十日は支へ候べし。政次死したりと聞えなば、百日守るべき大阪も、一日の中に破れ候ひなん。政次とく討死するを、徳川家の恩に報ゆべき

志と存するなりといひけり。

後藤は元黒田長政の士大將なり。長政ある時物語の序に、今我にかはりて軍兵を下知し、大功を立つべき者、我士大將の中に誰ならんといはれしに、菅政利人々各其器量有りと申せども、又兵衛に肩を並ぶべき者は候はずと答ふ。長政あくまで勇將なりしかば、政次が武略をねたまれし故、けしき悪く見えけり。政次豊前の小熊の城に有りて、隣國細川忠興と中あしかりければ、實は小倉の防なり。故有りて政次が子隠岐追出されしをよび返し給へと、長政に申せども聞入れられず怒る時、政次が二男又市を長政寵せられしが、博多の祇園の宮にて猿樂の有りし時、鼓をうてといはれしかば、小熊に行きてかくといふ。政次怒りて父子ともに出奔しけるを、忠興鐵砲二百に士を添へて迎へよせられしかば、長政と既に軍に及ぶべく成りしを、江戸より和平せられ、政次をばいづくになりとも送り候へとなりしかば、忠興政次を餞して酒宴あり。松井佐渡有吉頼母並び居たりしに、忠興我黒田の家と不和なれば、これより後の事はかりがたし、長政の軍だてよく知つたるらん。いかにして討勝ち候べきと問はれければ、政次兩方に加勢もなく軍あらば、國の大小と申必定甲斐守打勝ちなん。されどもたやすく勝つべき計の一つ候。甲州は人に越えたる勇將にていつも先をかけられ候。鐵砲にすぐれたる士五十人計擇みて、槍の合ひ候時、敵五人討取りなば、其中に必ず甲州有るべしと答へて出しを、さばかり長政を恨みて出奔せしに、今長政の武勇を譽めあげつるぞかしと

感せられけり。政次安藝に船をとめし時、正則福島丹波をもてまねかれしかば、三萬石の祿にて仕ふべしといふ。正則いや／＼丹波を始として皆二萬石あたへしに、政次に三萬石過分なりと聞かず。丹波今政次に三萬石あたへられれば、政次に三萬石なり、丹波も他の家に行かば、四萬石なりと人申すべきにて候。是臣等が武名をあぐるにて候といへども、正則同心なくて、丹波行きてかくと傳ふ。此より前關ヶ原の軍に、浮田秀家の兵七八十人亂れ足に成りて、正則の軍の前を落行きしに、丹波ひき、地に有りてしらす。正則の旗本より告知せければ、追かけたり。此時政次丹波が前に來り、引おくれたる敵あり、など追討ざるやといふ處に、首數多取り來りしかば、政次大に譽めて歸りしが、丹波は政次に敵へられしと世にいひあへり。丹波心に怒りをふくみ居たりしかば、此時かたり出し、色を替へて我に敵へたりと、世にいひふれられしやといひけるに、政次打笑ひ、器量の少き人よ、我と足下と武功相同じ、我足下の下知を受くべきや、足下又我に敵られて、功名すべきや、人のいへばとて怒られけるこそをかしけれと答ふ。丹波詞なくて歸り、政次は我に大にまされり、及ぶべきにあらずと譽めたりけり。

#### 古田重勝滅亡大河内元綱先見の事

古田織部重勝は太閤の家人、若き時より茶事をすきて、千利休が門人にて、此事好む人は重勝を一世の師匠とす。元和元年夏兩御所京都を打立せ給ふを待ちて、天子を取りまわらせ、二條の城を攻取り



京中焼拂ふべしと、大阪に心を合せし事あらはれて、父子ともに誅戮せられけり。此織部正は古き珍器の全きをば好まず。されば書畫やうの物もかしこを切りこゝを裁ち多くそこなひて、さて補ひ綴りて用ひしを、世に興ある事とおもふ人多くこれに倣へり。松平伊豆守信綱の父大河内金兵衛元綱人にかたりて、此古田は必禍にかゝりて死すべきものなりといひしに、果してたがはざりければ、人々いかにかくは相しけると問ふに、元綱されば古の寶器と聞えし物世の亂に失ひて、今残れる處の物はみな神の護持にてこそあらめ、それを己が目を悦ばしめんとて、一人の好にまかせそこなひやぶる事、神明必惡むべしと思ひしゆゑ、其人の身も全うして終る事を得じとはいひたりきと答へしかば、聞傳へて名言とせしとぞ。

石川重之功名并隱遁の事

石川嘉右衛門重之字丈山は、清和源氏にて八幡太郎の第五男石川義時の末なり。世々徳川家の臣として十六の時、東照宮の旗本に召出され奉仕したり。幼少より豪雄の人にて非常なりしかば、七歳の時父此男は必日本第一と世にいはるべきにや。若しからずは、日本第一悍惡の人となるべしと語られしとぞ。大阪夏の陣に丈山傷寒を煩ひ重かりしに、其母本多氏江戸より文して、汝世々御旗本に仕へ奉り、此軍に武功なくば又對面せじとぞはげまされける。丈山人によませて是を聞き、涙ぐみて物もいはず。五月五日東照宮既に二條の城を打出させ給ひしを聞き、其日は病殊に重く前後を忘れて有

りしが、しひてたすけおこされ、かごに擡乗せられて、東寺を打過ぎける時に御覽あり、あやしませ給ひ、田上右京に仰せ有りて問はせ給へば、見て歸り、石川嘉右衛門にて候と申すを聞召し、彼は病重くて死すべきと聞きしにと仰せあり。丈山八幡に至りて水を三酌すくひのみて、胸の中の苦を頓にわすれけり。其夜は東照宮河内の星田に御陣あり。丈山を召していと懇の御詞をかけさせ給ふ。六日に大阪に押よせ給ひ、抜がけを禁じ給ふ處に、七日の曉丈山眞先にぬけがけして、加賀利常の先陣に至り、御使なりと稱して大軍の中を押抜け、岡山にて敵を討取つたれども、味方其首を奪はんとせしかば、打捨て、黒門に打入り、佐々十左衛門と名乗りたる敵をうち取り、又敵一人打取つて從者に首を取らせ門を出づれば、馬に乗たる武者に行遇ふ。遠藤但馬守が士池田勝兵衛といふ者にて有りしが、丈山の功名を感じければ、我は石川嘉右衛門なりと名乗つて、池田も首一つ得たりといへば、丈山其姓名を刀の鞘に刻み付けたり。加賀の大軍おしつき來れば、又御使なりと呼はり、おし分けて利常に行逢ひ打取つたる首を見せ申して打過ぎたり。其夜本多安房守丈山とゆかり有りければ、筑前守利常を證にせよとすゝむれども、われ利名の爲にするに非ず、先祖をはづかしめざる志のみなりといへり。此軍に御近習の士首を得たるは、丈山と間宮權左衛門、豊島主膳と三人ばかりなり。丈山御軍令にそむきける故、賞に及ばず。是より前丈山駿府に有りし時、清見寺の僧説心に禪理を聞きたりしが、出陣の時暇乞とて、寺に至り、此軍に御近習の士首を取たる人三人ありと聞かれなば、其一人は

必我なりとしられよといひたるが、果してしかり。東照宮いまだ御旗を駿河に返されざる中に、妙心寺に隠れたり。是より學文の志厚く、日夜となく書を讀み經史に通じ詩を能せり。丈山三十三の時とかや。其後板倉内膳正重昌丈山の流落をいたみ、淺野但馬守長晟にかたりしかば、長晟賓客のもてなしにて、いと懇にせられしかば安藝に行く、老母孝養の爲となり。母終りて後、寛永十三年五十四にて藝州を去つて京師にかくれ居しに、板倉重宗京都に有りて、丈山をいたはる事大かたならず。諸侯貴人の會する時、丈山を座上にまねきて、此老は文武の道に達せる人なりと敬禮せらる。其後比叡山の麓一乗寺に隱遁の地を設け、詩仙堂を作りて、詩人三十六人の像を壁に畫き、書籍を友として閑居す。後光明帝御即位の時、松平伊豆守信綱使として京都にまゐられしに、丈山と親戚たるゆる、たび／＼閑居を訪はれけり。承應元年七十歳に及びて三州泉の郷は其故郷たるゆる歸るべき志あり、板倉重宗にかくといへども許さざりしかば、今よりは京都へ再び出じ、さらば其許へも參らじとて和歌あり。

わたらしなせみの小川は淺くとも老のなみそふかげもはづかし

後光明帝丈山が隸書によきと聞し召し、高木伊勢守守久勅命を傳へければ、八卦の字を書きて奉る。上皇も又隸書の大字を書かじめ酒肉を賜はる。寛文十二年壬子五月廿三日一乗寺の閑居に終りたり。九十歳となり。其詩を覆醬集と名付けていま世に行はる。

一乗寺の閑居、今は尼持たる寺になりぬ。されども詩仙堂は残れり。繪像も廢せず。丈山の物具、槍、又、如意几などもありといへり。

卷之二十三

直江山城守閻魔王に書を贈て訴訟人を斬る事

上杉家に三寶寺何某といふ者、下部の罪有りて誅せしを、其一族大に怒りて死したる人を歸し給はれと、直江山城守に訟へけり。其下部の罪死に及ばざる事にや有りけん、直江白銀二十枚あたへて跡をとへとなだめけれども、愈用ひず、是非に歸して給はれと、直江を催促しけり。直江さまぐにいへども、とかく聞入れず。其時直江しからは訟の如くせんとて、一族三人捕へさせ、地獄に行きて迎へ來れとて、書簡一通封じて使に往けとて首を刎ねさせたり。其書簡にしかくの仔細候て、三人迎ひに參らせ候、とく歸したまはり候へ。慶長二年二月七日、閻魔王冥官披露直江山城守兼續とぞ書きたりける。

安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事

安藤帶刀の子を飛騨守直治といふ。成瀬隼人正成或時直治に紀州にてきたひたる刀を乞得しが、後に成瀬彼刀の事を語りて、尾張にて死罪人の有りしを試たるが、こゝろよく切れざりき。能出來たるに殘多し。又きたひ直させて給はり候へといふ。安藤安き事なり、紀州にて心よく切れたりき。あやしき事よといひしに、成瀬打笑ひ、紀州にて心よう切れつるに、尾州にて然らざるは、尾張の骨

堅き故ぞとたはぶれしに、安藤聞きもあへず、いや／＼尾張の士の腕の弱き故なり。鉛刀にても紀州にてはよくきれ候と答へたり。

土屋數直執政の事并土屋忠直成立の事

土屋但馬守數直執政たりし時、金座の者ども相ばかりて、金に銀を入れてふきかへられなば、日本國の金、甚多くなるべし。金の色を損するのみにて、莫大の利なれども、但馬守用ひられじ。但馬守たに此事を聞入れられなば、事行はるべしといひけるを、數直に申す人あり。兎角の答なくて打過ざられしかば、又人をして問はせしに、但馬守是は邪なるわざなり、金を以て天下の寶とするは純物なるが故なり。其寶を悪しくせんとや、思ひもよらぬ事なりといはれけるとぞ。數直大猷院殿の近習に仕へ申されし比、ゆゑ有りて咎を蒙り、引籠りて有りしに、大猷院殿上京まし／＼けり。數直密に上京せられしを、親族家人相止めけれども聞入れず、京に著きてかたはらなる所にかくれ居けり。或時しかくの事を數直にはからすべしと仰せ出されしかば、皆駭きて、數直は江戸にあり、いかにと申しければ、聞し召し、尋ねて見よ、居ざる事はあらじと仰せられけるほどに、こゝかしこさがしけるに、東の京にかくれて有りしを、頓て召出して、仰に、汝よくこそ來りたれ、來らずばよかりなんやとて、命せられける事どもあり。泰平の時といへども、千里の行程たやすからざる事なりと思ひて、後の咎を願みず忍びて上京有りしに、必かくあらんとしらしめされし、明智の遠慮君臣水魚の遇季世に有

りがたきためしなり。此數直は甲州武田家の士大將土屋宗藏昌恒が孫なり。勝頼亡びし時、宗藏が子の二歳になりしを、駿河の富士の裾野の寺に、土屋が相知れる僧有りて隠して育てけり。東照宮御狩の時、彼寺に立ちよらせ給ひしに、御茶をささげて出でけるを、此子がつらたましひ唯者にあらず、父は何者ぞと御尋あり。住持の僧氏もなき者にて候とかくし申しけれども、再三詰り給へば、御敵をなしたる者の末にて候。隠し頼まれてあはれに存じ、ひそかに育て候と謹んで申しければ、出家せんよりは、我に得させよと仰せありければ、今はつゝみてあしかりなれと思ひて、これは武田勝頼が供して、天目山に死したりし土屋宗藏が妾腹の子にて候と申しければ、さる義士の子なりけるよ、眼ざしのなみくならぬと思ひたるに、果してたがはざりけりとて、召し具せられ、後民部少輔忠直といひしは此人なり。數直は忠直の次男なり。

塚原卜傳劍術鍛錬の事

塚原卜傳は常州塚原の人なり。父を新左衛門といへり。卜傳劍術を飯篠長意に稽古し、伊勢の國司に仕へ、劍術を以て名を得、光源院殿の師たり。其後上野の上泉伊勢守といふ劍術者あり。上泉は新陰卜傳また上泉にも學びたり。卜傳が弟子の中に勝れたる者に、一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに、彼弟子或時道のほとりにつなぎたる馬の後を通りけるに、彼馬はねたりしに、ひらりと飛びのきて身に中らず。見し人、さすがに塚原が弟子の中にも勝れたるよといひしに違はずとほめて卜傳に

語りけるに、卜傳大に驚きて、さては一の太刀さづくべき器にあらずといひけり。諸人此事を不審して試よとて、類なきはね馬を道のかたへにつなぎ、卜傳を招きてかたはらにかくれて見居たりしに、卜傳馬の後を除けて通りしゆゑ、馬はねんともせず。人々はかりしにたがひければ、後にかくと語り、さて彼弟子の早わざをほめ給はぬは如何といひければ、卜傳聞きてさればとよ、馬のはぬるに飛びのきたるは、わざは利きたるに似たれども、馬ははぬるものといふ事をわすれうかと通りしはおこたりなり。飛びのきたるは仕合といふものなり。劍術も時により下手にても仕合にて勝事あるべし。それは、勝ちたりとも上手とはいふべからず。只先をわすれず機をぬかぬをよしとするなり。一の太刀の位に及ばざる事、遙なれば譽めざりきと答へしとぞ。

東照宮松倉市橋堀桑山別所五人へ御遺言の事

東照宮御病氣重きに及びて、台徳院殿もかたはらにはおはします。鈍帳のきはには松倉豊後守重正、市橋下總守正總、堀丹後守直倚、桑山左馬助、別所孫三郎を召され、此五人忠ある者なり。且大阪大和口にて武功あり。よく將軍に仕へ奉れと仰せられしかば、皆涙を流して唯とかくの詞なかりける時、又別所は祿少けれども、此後も取りわけ忠あるべきものなり。大和口にてやさしき言をいひたりと仰せければ、別所泣沈みてけり。此は大和口にて、城兵引返すを追討たざりし時、別所諸大將の前に馬を乗廻し、先年筑紫にて島津が退口を尾藤が慕はざりしを太閤怒られき、只今追つかくべき圖をはづ

す事無念なり。かく申す孫三郎は、馬一匹ゆゑ齒をかむばかりなり。いかに人々かくは腰のぬけたるやと大音に呼はる、此事を聞き召ての事なりけり。

鮭延越前組下に慈愛ありし事

鮭延越前は最上義光の長臣祿一萬五千石なり。最上の家亡びて後流落しけるに、もとより家人に慈愛深かりし人にて、士二十人附従ひ、各乞食して養はんといふ。土井大炊頭利勝五千石與へければ、二十人の士に五千石皆あたへて、各二百五十石なり。其身は二十人のもとに一日がはりに養はれて、一生を終れり。越前死すれば、二十人の士大に愁傷して一字を建立す。今下總の古河城下の鮭延寺これなり。

烏丸光廣卿行狀の事

烏丸光廣卿は常の居間に書物を繙きならべ、四枚のふすま二枚ひらき、机一脚に硯ありて、三本入の扇子箱に筆あり。其間に年月経ても人の入る事なし。故に座したるあとありて、其外は塵滿ちたり。公宴參内の時も、扇子箱に硯石を入れ、手にさげ乘輿に入られけり。此卿江戸に召されて三年おはしけり。(高倉屋敷に有りとかや) かくて歸京あるべきよし聞えけるに、兼て座敷の前に庫有りしを、留守におかれし雜掌いひけるは、公久しく江戸におはして廣き所になれ給ひ、歸京の後此庫目前に有りてあしかりなんとて壊ちたり。庫には數十年諸家より贈りし物を積みたるなり。其物は書院にならば、詳に書記

して家人に分ち與へけり。かくて光廣卿歸京有りて程經しかども、庫の事はいひ出されず。雜掌庭のさまの異なるにやといひしに、げにも廣くなりぬ、庫はいかにしたるやと問はれしに、しかじかしたりと申す。内の寶物はいかにしたると有りしに、皆くばり與へて候と申す。それは誠によりけり。汝は何を得たるやと問はれければ、いや一種もとらずといへば、無調法の事かなと打笑ひてとりあへもせられざりしとぞ。君臣禪理を好まれし故なりとかや。

中院通村公江戸にて和歌を詠給ひし事

大猷院殿の御時、中院内府通村公御不審の事ありて、江戸南光坊にとちこもりて、三年おはしましけるが、秋月を見て、

ゆくかたに身をばさそはで夜なくの袖の露とふむさしの月

と詠せられしを、僧正感吟に堪すして、大猷院殿に申されしかば、三年の逗留旅情さぞあらん、今は歸京候へと仰出されて、内府京都に歸られけり。

本多忠義書籍評論の事

本多能登守忠義或時近習の人に、近きころ世にもてはやす書の事を、問はれしに、平家物語評判の事を申す者あり。それは誰が著したるにやと問はる。由井正雪が作り候と答ふ。忠義凡書籍は賢人君子の著す處なるゆゑにこそ崇む事にはあれ、正雪は大惡逆の賊なり、よも正しき事はあらし、其書籍聞

も穢はしく覺ゆ。人を以て言をすてすといふ事のあれども、かゝる兇賊の何條よき言のあるべき。汝等よく心得よといはれけり。

義經の鞍の事

蜂須賀阿波守至鎮古戦場の事跡を尋ね、古き物のすたれしを求められしに、八島の軍に義經の士佐藤繼信を葬りける時、最愛の大夫黒といふ馬を賜にせられし、其鞍志波の寺に有りしを、彼寺の破壊したるを修補して鞍を乞ひ得たり。其後年久しくなりて、厩を司る人くはしく其事の由をしらず、他の鞍の中にまじへ置きたり。程經て上田半平安重とて聞ゆる馭法の上手あり。其頃たぐひなき悪馬の有りて、人々乗煩ひしに、上田此馬にはよい鞍置いて乗りたらばよかりなるといひしかば、あまたの鞍を出して見するに、上田いとふるき鞍を取出して、是こそとて彼馬におかせけり。上田をそねむ者何條鞍に故あるべき、いざ見よとてあつまりけるに、三浦次郎右衛門といふ鐵砲をあづかりし人、年老いたるが、此を見物に出て、久しき名物の判官の鞍を見たるよといひしかば、其故を問ひて驚きけり。悪馬ももとより乗得ければ、上田が馭法いよく名高く成りにけり。

根來法師賞功の定井大澤仁右衛門が事

紀伊國根來谷の法師はむかしより武勇を好み、定まりたる法ありて、第一の功名には感狀に玳瑁の槍三本、銅錢三十貫、其次感狀に槍二本銅錢二十貫、其次には感狀に槍一本、銅錢十貫文、根來の内に

大澤仁右衛門といふ者一番槍を合はす。感狀に槍銅錢をも添へてうけ得しが、大阪にて秀頼に従ひ、城落ちて後九鬼の家に有りしが、大阪籠城の人禁錮せられしを、土井利勝ひそかにやしなひ置かれけり。

大音主馬助先登を論ずる事

加賀利常に仕へし大音主馬助に若き人々あまた、いかに大音心は猛く候はん、されども今ははしる事叶ふまじ。麒麟も老いぬればといふ事思ひ出され候といふ。主馬聞きて五町十町かけ走りても、敵の真中に只一人かけ出づる事なり易き事にあらず。早く走りたればとて、さのみ益なき事なり。先にかけ行く人ありて、後についくをまたれば、この老人もついくべし。槍あひは僅六七間に過ぎず。主馬が如き老いおとろへたる身も、其時心剛ならばおくれまじ。五町十町はしる事は若き人のなし易き事なれども、六七間のきはに至りて、箭玉はげしければ若きとて走られぬものなりといひしに、皆詞なかりけり。

永田治兵衛功名の事附樞井合戦の事

永田治兵衛は、平生多病なりしかば、何の用にたつべきと人のいふを以て、下部こそは健なるがよけれ、士は義と勇とにありといふを、人々せんかたなくていふ詞なりと、またあざけりけるに、泉州樞井にて淡輪六郎兵衛が首取つて旅本に行く。平生多病の男かゝるふるまひし候に、無病の人たち今日功名なく候やといふに、答ふる人なかりけり。又上田主水は宗古といひしが、石田に與して淺野幸長

にあづけ置かれしが、茶の湯をもてあそびける故、殿の國こそ大なれ、一萬石の茶湯法師を召し置かれたりと譏りけるに、幸長聞きて上田に脇差を興へ、汝を誹る者ありと聞く、必大切の時に功名する心得あれかしと詞をかけられしかば、上田事に臨て刃に血を染め申さんといひしを、また鼠の血ならではつけ得じといひけるが、樫井にて目を驚かす軍して討取つたる首を提げ、幸長の日出の王子の陣に至りて、士ひしと幾らも竝居たる處にて、茶湯法師におとられし人々よといひけるに、とかくいふ人なかりけり。

樫井の軍は、大阪夏の事にて、大野主馬大將にて塙團右衛門先陣して和泉に攻入りけり。岡部大學、塙が武功をそねみ、抜けがけして阿部野を和泉路にさして進み行く。四月二十八日夜明けて國府の東の山に烟のたつを、岡部が士どもすはや相圖の火の見ゆるといさみ、蟻通明神の北より貝塚さして進み行く。淺野長晟は信達に陣せしに、大阪より大軍よすると聞き、樫井に引返すを、塙我行きて敵の體見て來らんとて、唯一騎、淡輪六郎兵衛といふ案内者を引具して馳行く處に、岡部を見つけ塙馬の上よりぬけがけしたりしよな、今朝よりの軍を聞かんと罵る。岡部敵なければ功名もなしといふ。互に相罵りけるが、あれなる安松を焼拂ひたらばよかりなん、又蟻通の松原に伏兵あらん、覺東なきに後陣のつらくをまたんとて物見を出す。長晟の士大將淺野左衛門佐安松に來りて、龜田大隅にとく兵をあげられよといへり。又塙が物見乗歸りて、敵近く候といふを、岡部聞きて冑を

取て著、馬にもろ鎧を合せてかけ出す。塙いかに後陣をまたれよといへども、耳にも聞入れず。塙怒て汝に先を駈させんやといひて、是も馬を乗出す。龜田は殿して引退く處に、透間もなく追懸けたり。大隅は討死までよと思ひ定めて、石橋によりて十文字の槍を横たへ待ちかけたりしに、淺野左衛門見て、何とて軍したるくせんといふ事ぞ、とく引退かれよといふ。上田主水は樫井の家の中にかくれ居て、左衛門をやり過し、後に残り居しに、淡輪真先かけてはせ入る處を、永田治兵衛討取つたり。かくて大阪方はせよする處を、上田主水槍を提げて散々に相たゝかひ、山掛三郎左衛門と引くみたり。横井平左衛門横關新三郎かけよりて山掛を討とりぬ。龜田を始として殿の者ども、面もふらずをめきさけんで相戦ひしかば、大阪勢敗北す。塙は田子助左衛門が射ける箭に、痛手を蒙り、十文字の槍を取りのべ田子が弓の弦を突切る。八木新左衛門すかさず走り寄りしかば、塙家の壁にもたれて思ふほど働きて終に討死す。大野は貝塚にて先陣の戦を聞き、かけむかへば、樫井の軍散じけり。また一説に、淺野但馬守長晟紀州を打立ち、五千の兵にて泉州市場に著く。大阪より四萬にて向ふと聞き、淺野左衛門敵いづくに向ふとも市場表にて一戦せんといふ。龜田大隅後の勝こそ大事なれ。四萬の敵を五千にて支へんこと地利によるべし。一里引退きて蟻通明神の松原を前にあて、安松に先陣を押し出し、敵を引付八町なはてをくり引に、樫井にて戦はん。此所松原ありて敵に見すかされず。八町なはては雙方深田にて一騎打なれば、多兵かゝりがたし。然らば、一騎

合の勝負にて必定味方の勝利なりといふ。淺野聞て敵の旗をだに見ずして北げん事然るべからず。龜田は引かれよ、我は引まじきといふ。龜田我此所にて功名を遂げずば討死せんと、誓言して出陣したれば、樫井に於て一番槍を合するか、討死か二つの中を出でず。こゝにて一戦せられよ必敗軍なるべしといふ。淺野怒りて物前に不吉の一言なりと罵りけるを、淺野左近とりあつかひ、所詮但馬守の下知にまかせよとて、前田越前をもつて事のよしを申す。長晟兩人の存する所尤なり。龜田は度々武功ほまれの物しなれば、先陣五千の下知は、龜田心のまゝにせよと下知せらる。前田歸りて斯といへば、龜田涙を流し悦びけり。軍兵を安松に引きとる處に、淺野左近、同日向、安井喜内、田子助左衛門、伊藤金左衛門等従ひけり。安松の長瀬村に陣す。市場に残る淺野左衛門、同大炊、仙石因幡、三木小左衛門、未明に安松まで兵を引取りけれども陣すべき所なく、樫井に入りて半ば河原に陣しけり。大阪の軍は瓜生野にて勢揃し、先陣塙團右衛門二陣岡部大學なりしが、二人不和にて、塙真先に進み行き、四月二十九日泉州貝塚にて兵糧を遣ふ。大野主馬は酒宴して打立たず。其時塙は三百計の兵にて安松にはせ入り火をかくる。龜田は蟻通の北へ物見に出づる所に、淺野左衛門乘來り、汝がはかりし所甚感じ入りたりといふ。龜田物前の積り論ずる事は珍しからざる事なりといふ、旗本の旗色しどろなり、直されよといへば、左衛門心得たりとて乘戻る。かゝる所に、上田主水來りて今日の合戦いかといふ。龜田昨日計りし如く、樫井にて軍すべし、とかく旗本の旗色

悪く見ゆるなり、乘歸りて直されよといふ。上田乘歸ると、旗色ひし／＼と直りたり。龜田其後上田を感じけるは此事なり。龜田は南の町はづれに、左の池の堤に鐵砲五十挺ふせ、馬より下り立ち、敵を待つ處に、敵かけ來る。龜田思ふほどに引付け下知して鐵砲を持たするに、生死はしらす騎馬の兵三十騎計うち落す。敵是にためらふひまに、鐵砲に樂こみて、一町ばかりも引取りたり。かのごとく三度くり引にして、樫井の町に引取り、馬を立竝べて休み居たり。かゝる處に、敵味方はしらす東の河原より、歩立の弓の者をひきゐたる大將馬にて乘來る。龜田河原へ乗出し、是は大阪にて誰の陣にてか候と問ふ。岡部大學と名乗つて馬上にて槍たけに成りし時、大學馬を引返して北に向て引退く。龜田きたなし返せと呼はり、一町ばかり追捨て、樫井に歸り、こゝにて討死までよと獨言して石橋に腰かけ、十文字の槍をとり、鐵砲の者をあつむるにちり／＼になり、唯三人残り止りぬ。三人龜田が前に來て、腰ぬけども足まとひになり候。落たるこそよけれとて、少しもひるまらず。龜田大に賞する處に、上田一騎乘來り、先に鐵砲の音しけるに、はやくも引きとられたるよといふ。龜田聞きて我と御邊と二人討死するならば、屍の山をもなすべし。但州公は琵琶が嶽を越させ給ひ、自害ありしといふは誠なりや。敵進み來るとも、また一時はあらんといふ處に、一騎は赤くよろひ、一騎は二三間おくれたるが黒くよろひたる者かけ來る。赤き物具は塙、黒き出立は塙が手の者なり。塙は龜田に向ひ、塙が従者は上田に向ふ。龜田立上り飛出でて槍組みたり。敵の槍龜田が



背を二打三打うつ處を、十文字の槍にて胸板又左の脇を突いてつき伏せ、龜田が士管野兵右衛門來て首をとる。敵伏しながら菅野が足を切拂ふ。菅野加右衛門助け來り、塙が上に乗かゝり、兵右衛門に首を取せぬ。上田は槍を打折り無手と組みたる處に、上田が手の者二人たすけ來りて敵をうち取る。上田は痛手おひけり。龜田は猶進み出で十文字の槍をあしにて踏直し居たる處に、又敵一騎かけきたり槍を合す。菅野加右衛門槍にて脇つばを突く。須田作兵衛其首をとる。差物に谷下吉左衛門と書きたり。此時敵一人來りて龜田に向ふを突拂ひたり。大阪方まばらがけて、先陣の大將討たれしかば敗北しけり。東照宮も龜田が此日の軍を殊にほめさせ給ふといへり。龜田は父を溝口半左衛門とて、柴田勝家に仕ふ。大隅若きときは半之丞といひて、十六の時初陣なりしが、柴田伊賀守に屬して、越前白鬼戸女河原にて、一本に馬上の敵を打取り、柴田父子感狀をあたへらる。又越前丸岡の城へ一揆押寄たる時も功名あり。志津ヶ嶽の軍にもよい首取りたり。後淺野家に仕へ小田原、山中、武藏忍、岩槻の城攻にも度々功名したりければ、秀吉是を賞せらる。文祿年中朝鮮蔚山にて敵六騎と馬上にて太刀打し、一騎斬て落し其首を取りければ、幸長感狀を與へらる。慶長五年濃州合渡にても功名し、瑞龍寺二の丸に先登し、度々武勇譽れ高かりければ、京都にて台徳院殿御前へ召し出され、龜田が働たくひまれなりとて、御腰物を賜はり、上田も同じく賜物有りて賞せられけり。龜田後安藝東條の城主となり、一萬五千石を幸長あたへらる。仔細有りて淺野家を去り、

高野山學侶花玉院のもとに隠れ、寛永十年八月十三日卒しけるとぞ。

於萬の方塙圍右衛門を扶持せられし事

紀伊大納言頼宣卿の母君をばお萬の方と申す。駿河にて塙圍右衛門は名高き大剛の士なりと聞きて、お子達に太刀刀をまわらすは常の事なり。大將の寶といふは士に過ぎたるはなしとて、鏡臺金とて、毎年五百兩賜はりける中を、二百兩分ちて塙が流落せし内は與へられぬ。事ある時は剛の者一人にて、も、いとほしき子にまわらせんといはれしとかや。

奥平家の士の妻髪を切つて節を守る事

奥平の長臣奥平源八、一に父の讐同姓隼人を討ちしに、相與せる士多し。源八幼くして奥平の家を立去りしに、一味の面々も皆立去りて源八が成長を待居ける。其中に一人の士妻は稻葉丹後守正通の家イハの士の女にて有りけるが、父のもとに預け置きしに、頓て讐討つべきに及びて妻のもとに行きて存る旨のあれば離別するなり。いづ方にても嫁し候ひて、親の苦勞に成り給はざれといひければ、彼妻聞きて年久敷隔なく過ぎ候ひしに、俄にかく仰せ候は定めて故有るべし。然らずしていとま給はりては、親に向ひていかにいふべき詞も候はずといひければ、今はつゝみがたくして誠はしかくの仔細にて讐をうつに組したれば、其時は討死するか、又は公の咎によりて殺さるか二つの間に有るべし。御身は年若き人の我死後に艱難すべければ、いたはしくてかくの如くいひつるなりと語りければ、彼妻

もとゆひの際より髪をふつときり、髻打ちすまじ給うて相見ゆるまで、此髪いろひ申さじと誓言して別れけるとなり。其後髻討ちおほせて彼士も散々に働き助太刀して、彼妻のもとに行きて對面しけるに、もとゆひの間より髪長く出でて、もとゆひは其まゝ有りしとぞ。

優婆塞の馬の事附信玄馬を擇ばれし事

越前忠直叛志ありと世に聞えし比、加賀の前田利常は隣國なれば、軍の仕度せられしに、物具著て乗るべき馬を擇ぶに、加賀の領國の中二千疋にあまれる中にて、富田越後が馬を擇出す。鹿毛にて二寸五歩あくまで駿馬なり。大庭に旗數百本立並べふせつたてつして、金鼓を鳴し鐵砲をうつに少しも驚かす。名をば優婆塞とつけられけり。今一匹とて擇ばれしに、似たる馬もなかりけり。

凡大將の馬を擇ぶに心得有るべきにや。甲斐の武田の家にて米澤といひしもの、奥州に行きて馬を求むる時、信玄一首の和歌を書きて與へらる。

上野の中のかんこそ大將の乗るべき馬としれやものゝふ

信玄五十疋の馬の中に、軍に乘れし馬四疋栗毛中段とて只二疋あり。甲斐山梨郡とし野といふ所の百姓、此四足を養ひ置きしを、米澤見て又なき馬なりと信玄に申して、五十貫の地を與へて、此馬を信玄に奉りぬ。今泰平久しくなりて、馬を擇ぶの理を知る人なく、益なき觀の美に黄金を費す事には成りぬるなり。是みな上より下にいたるまで、軍旅に明かならざる故なり。

森寺藤左衛門池田家興立の事并森寺政右衛門武勇の事

池田の長臣森寺秀勝は、伊勢の赤堀郡萩の城主なりしが、伊勢の國司に攻落されけり。藤左衛門秀勝其比幼かりしを、母抱きて落行き、尾州織田信秀のもとにかくれ居たり。護國公池田信輝の母君を養徳院といひしが、江州より落ちぶれて清洲に來りしを、藤左衛門瀧川一益に頼みて、信長の乳母に出だせしに、信長護國公と同年なれば、遊び相手となりて年をおくれり。故有りて護國公出奔し給ふ時、森寺も同じく打ちつれて、赤堀に隠れ居る事五年に及べり。かくて信長星崎の城を攻めらると聞きて、森寺商の體にもてなし、清洲の城の厨に行きて、物具を求むべき支度せばやと存すれども、金も銀も候はず。あはれ少し計給はり候へと、護國公の母君に潜かにいひければ、我も金銀のあらばこそ、此なりともとて綾の小袖三つ出して森寺にあたへらる。森寺いそぎ出でて、銀錢六十に換へたり。古き物具を買ひたれども、肉なれば茜にて染めたる布を鉢巻にして、星崎に向ひ給ひしかば、信長悦んで護國公をもとのごとくつかはれけり。藤左衛門子を政右衛門といふ。すぐれたるあら者なり。政右衛門忠勝十八歳の時、いづれの所にて有りしやしらす。護國公の前に有りし時、稻葉伊豫守一鐵のもとより備前の陶とてとくりを贈られけり。政右衛門見て、是は賈物なり、あらぬ物をたばかりて、豫州さぞ笑はれ候べし、悪き奴にこそ候へ。あはれ伊豫守が目の前にて打碎きたらば快く候べしといふ。護國公汝が詞無禮なり。豫州が目の前にて碎くべくはくだいて見よとの詞を聞くより、座を立ちてとくり

を懐に入れ、伊豫守の方に行きたり。かゝる事とはしらす對面せられしに、政右衛門とくりを取出し、備前にて焼きたる物には候はず、賈物なれば返し申すといひもあへず、柱にあて、打碎き、つと走出でければ、一鐵それとめよと下知せられしに、かけのびて歸りけり。護國公は政右衛門がつらたましひ、一定伊豫守の許にて打碎くべし。危き事なりとて、門内に待ち給ひし處に歸り來り、しかぐせししるしは此なりとて、とくりのかけたる口を取出し、見せ申して後申しけるは、凡君となる身は、一言も謙みあるべき事に候。先に申せし詞は無禮なれど、碎くべくはくだいて見よとほりあひをかけられ、若き男の骨をきざまるゝともさてやむべきや。遁れ得て歸りしは幸なり。以後を謹み給へといひけり。政右衛門美濃の竹が鼻に居し比、木全又藏といふ士ゆかり有りて、森寺がもとに居たり。

又藏が父は五右衛門とて大剛の者なりしが、或時野伏一揆しけるに、木全山の中にわけ入りしかば、それはいかにと問ふ。中へんにかまへ候と答ふ。ほどなく一揆のうち通りける所を、山の上よりとつとをめて突いてかゝりしかば、小勢を大軍なりと思ひ、一揆さんぐに敗北しければ、木全が槍にて中へんにかまふると、世にいはれし人なり。

政右衛門又藏に心を合せ、同國高木何某を討たんと計りけり。又藏竹が鼻の竹林にかくれ待ちしに、高木夜中に打過ぎける處を走り出て、唯一槍に突殺し、從者共を追つちらしてけり。高木が子二人父の仇報いんと聞えしに、政右衛門或年江戸に行く時、荒井に宿せしに、敵道に待つと聞きて舞阪に行道

の程三十間ばかりもへだて、凡八百人計待ちかけたりしに、政右衛門しづくと乗通りしに、敵更にとりあはねば、政右衛門從者五六人にて馬を引返し、仇の前に乗行き是に待ちたるは高木に候や、かく申す森寺を仇にてうたんとや、唯今何とてうち候はぬぞや、さらば參りあはんと大音にいへども物いふ人なし。政右衛門あざ笑ひ、など討ち候はぬぞや、此後我をうたうとは存じもより候はずと罵りて打過ぎ、江戸に赴きけり。高木は訟へて、政右衛門を討たんと申しければ、いづくにてもあれ討候へと許されしが、又政右衛門にもきびしう防ぎをして、仇にうたれざるをもて勝ちにせよとの事なりければ、常に鐵砲五挺に火繩に火をつけ、弓十挺に箭を關ひ、さやはづしたる槍五本士三十人うち連れけり。秀吉の時出仕しけるにも、かくの如し。刀をも殿中に携へよと許さる。伏見の城を築かれし後、諸大名出仕有りしに、政右衛門にけふは出仕すべからず、仇の必窺ふべきといひしかども、政右衛門くるしうも候はずとて出仕す。秀吉の居間の次まで刀をいつも携へけれども、其日は從者にもたせ置きて、廣間に仇の有ける中を打通りて、事故なく退出しけり。後慶長四年四月に、參河にて病死したりけり。

伴玄札殉死を止まる事

國清公池田三左衛門世を下らせ給ふ時、伴玄札は寵臣なりしかば、必殉死すべき者なりと人もいひけるを、興國公武藏守利隆朝臣聞し召し、よく心を付けよと侍臣に仰せられけり。御柩にをさまらせ給ふ日、其

次の間なりしふすまをひらきて、それに入り又閉ぢけるをあやしみ、行きて見れば、脇差をはや腹に突立てけるを抱きおこし、人多く重りておし留め置き、かくと申しければ、興國公急ぎ御出で有りて、玄札いかにと仰せられしかば、玄札承り、御恩深く蒙り候へば、御供仕りなん志にて候に、見つけられしは口をしく候。御ゆるされをもて快く死出の道に赴き申すべしと、申上げけるを聞き召し、さもあるべき事なり。されども我士の主には成りがたきを見すて、先代の供したらんには、人々思ふ様も、玄札は先殿の志をも知り寵愛に遇ひたる身の、よく今この嗣は劣り果てたる故、供して死したるならんといはんには、今までの士一人も我に心服する者あらず。我は獨夫と成りはてん事目前なり。我を獨夫にしなして、それを忠とも義とも思ひなんには、とく死して御供申すべし、強ひて我おし留むべきや。我は汝が死するに依つて、士の主には成る事あたはじ。只とく死ねよと仰せられければ、玄札涙を流し存じよらぬ仰せを承り、誠に進退究り候と申しければ、興國公とく死して我を獨夫にして、先代への奉公とせよと再三仰せられしかば、玄札とかくいほで、暫くありけるが、仰の趣承り候ひぬ。士ほどの者が刀を腹に突きたてながら、さて止むべきには候はねども、只今の御詞によりて、恥をしるびて人に後指をさへ候とも、ながらへ罷在るべしと申しければ、さては我士の主になる事を得たり、汝が忠義比類あるべからず、よくいたはりてと仰せられ、内に入らせ給ひけり。

番大膳二條城へ使に參る事

池田の家の士大將番大膳景次は父を藤左衛門景元といふ。尾張智多郡荒尾といふ所の人なり。大阪冬の軍尼ヶ崎の城にて、片桐が兵ども討たれしを援はざるにより、二心ありと東照宮疑ひ思し召すよし聞えしかば、其仔細を申述べ、使を參らすべきに、誰かよく使せんと、各使を擇び其姓名を書きて出すべき旨、興國公の仰せにより、數百千の士半を過ぎて大膳が姓名をしるして出しけり。公自ら書記させ給ふも同じければ、さらばとて西宮の陣所にて大膳に仰せ付けらる。

大膳、公の御前を退き出でける時、長臣たちを始として、いやが上に重りたる所を通らんとするに、伊木長門大膳に向ひ、今度の使は大事なり。よく心得られしやといひしに、大膳不才の身粗仰の旨は承り候ひぬ。此をといふまゝに、懐より九寸ばかりの七首の氷の如く見ゆるを拔出し、至てわざ物にて候。大御所の御座近く參りて申し候より外は、存じ候はずといひければ、長門尤なり、我行くべしと思ひしに、かくの如くなればいふべき事なしといひけり。

二條の城に參りければ、東照宮の御前に召されて、仔細を糺させ給ふに、一々道理明かに申したりしかども、猶聞し召し入れらるべき氣色なかりければ、尼ヶ崎の地圖を取出し、武藏守露塵ばかりも二心なきよしを申せしかば、其時疑ひ思召さるよし仰出されて退出しけり。人々再三押返し諍ひ奉りて、武藏守罪なきよしを申せし有様、類少き者なりと感あへりしに、東照宮も其後大膳が事をゆしき者なり、誠に豪傑とは大膳なるべしと仰せあり。

大膳はもみ髭ありて容儀ゆゑしき人なりしかば、退出しける時髭よくもいひたりと仰られ、其座に有りし人々も御玄關に出でておくり、且しる人になりたりとなり。  
番後祿千石を賜はり、其後千石の祿を増賜はり、芳烈公松平新太郎光政朝臣の時に至りて政を執りたり。寛永十三年七月六日病みて死す。

卷之二十四

熊澤了介の略傳

池田の家にて政を執り、四海にほまれ高き熊澤次郎八伯繼了介は本姓野尻なり。加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子にて、外大父熊澤半右衛門守久養うて嗣となす。守久初は喜三郎といふ。喜三郎父を平三郎として尾張の人なり。東照宮に仕へ奉り、箕形原にて討死しけり。守久其後福島正則に仕へ、正則安藝備後を削られ、信州川中島に流罪の時、正則の江戸の屋敷をかこみて、もし仰を背かば忽討滅さんとなり。正則の士大かた出奔しけるが、士只七人残りといまりし中に、半右衛門も留まれり。正則江戸を出て、川中島に赴く時、途にて殺さるべしと云ひふらす。守久節をまもりて附従ひ、信州に参りければ、正則日比寵愛の淺かりし事を悔まれぬ。後水戸の威公に仕へけり。一利は後鍋島に仕へて、島原の城攻に武功あり。延寶八年八月二十三日備前岡山に卒し、蕃山に葬りぬ。次郎八寛永十一年十六歳にて備前に來り、芳烈公に仕ふ。十三年島原一揆の亂起りし時、公江戸におはしまし、仰を奉りて岡山に歸らせ給ふ。此は一揆猶落城せずば、師を出されんが爲なり。此時次郎八いまだ元服せざりし故、江戸に留置かれしが、自ら元服して、ひそかに岡山に歸りたり。十五年岡山を去りて近江の桐原にかくれ居たり。二十四の歳高島郡小川村にゆきて中江惟命を師とし道を問ふ。歸りて又高島にゆ

く。其時父野尻氏仕へを求め江戸に赴く。次郎八に母妹をそへて東近江の入遠き所に残しとめたりしに、家甚貧しくて江州の賤しき百姓の食するゆりのこ雑炊を飯とし、糠を食して魚肉酒茶の味をしらす。やうく昏子を著て寒をふせぐ事五年、相しる人母妹のありて餓死せん事をあはれぶばかりなり。中江王陽明の書を讀みて良智の旨を次郎八に語り示す。芳烈公伯繼が王佐の才ある事をしらしめし、京極主膳に就きて復來り仕へなんやと、度々問せ給ひければ、正保二年再び備前に參りて仕へけり。祿三千石を賜はり政を執りたり。和氣郡八塔寺は備前美作播磨犬牙の如く入まじりたる地にて、次郎八請取口とす。和氣郡の中便宜の地に因りて田を墾き、士數十人を土著とす。此時伯繼を助右衛門と稱しけり。公の參觀に従ひて、江戸にゆく事度々に及べり。世に名譽高く其道を慕ふ人多し。紀伊大納言頼宣卿、松平伊豆守信綱、板倉周防守重宗、久世大和守廣之、板倉内膳正重矩、松平日向守信之、堀田筑前守正俊其餘の大名數をしらす。大猷院殿其人となりをふかく信じ給ひ、召して尋ね問はるべき處に、慶安四年かくれさせ給ひて謁見し奉らず。承應三年備前大に水出で明暦元年飢饉の災あり。次郎八日夜國中を巡り撫育に心を盡す。伯繼日比儉にして家中婢女寡くいとなむ事少し。唯客を愛して組の士朝夕となく來りて相語る。伯繼水理を論ずる事妙を得、國中水を通し沼を作り、旱魃の防をなすに、みな馬上より打詠めて其利害を定め論ずるに、數十年の後其言皆中らざるはなしといへり。明暦二年和氣郡木谷の狩に山より倒れ落ち、此より脚を憐めり。かくて和氣郡寺口村は、其

祿地なれば常山と名を更めて世を遷る、こゝろざしあり。

つくば山葉山しげ山しげれと思ひ入るにはさはらざりけり

といふ和歌の心にて名付しといへり。病により明暦三年祿を辭し京に赴く。其道を慕ひて門人となりし人々、中院大納言通茂卿、同通躬卿、野々宮中納言家縁卿、野々宮中將定基朝臣、清水谷大納言實業卿、押小路三位公起卿、久世中將定清朝臣、久我右府廣通公、油小路大納言隆貞卿、中御門大納言資照卿、伏原三位實業卿を始として、あまた伯繼を師とし貴び給へり。此時所司代牧野佐渡守親成人の讒言を信じて伯繼を憎む。又其才を妬む者あるによりて、世にさまざまいひふらす事どもありて、寛文七年四十九にて大和の芳野に匿れ、

この春はよしの、山の山もりとなりてこそしれ花のこゝろを  
とよめるは芳野にての事なり。

又山城の鹿脊山に引こもり、又播磨の赤石に移り居る。延寶七年六十一歳にして大和の矢田山にかくれけり。赤石は松平日向守信之の領地たるが、日向守領地を大和の郡山に移す故なり。貞享四年八月、常憲院殿の仰せにより下總の古河にゆく。日向守領地を古河に移す故なり。日向守深く伯繼を尊信せられたり。同年の冬封事を江戸に奉り政事を更正すべき旨を申すにより、大に旨に忤ふ事ありて、永くとちめ置くべきよし仰出されけり。此後人の來て物語するに、もし國政の事に及べば、かたはらな

る筈をとり吹きて、一事もいふ事なし。元祿四年八月十七日、古河の城頼政郭に病死し、城下の大堤村鮭延寺に葬りぬ。歳七十三なり。伯繼の學朱子王子によらず、別に一種の學をなすといへども、文學に短にして政事の才其長せる處、自著せし書に見えれば、爰に詳にせず。

小槻與五右衛門會津神公を諷諫せし事

會津中將保科正之は、台徳院殿の第九男にておはせしが、殊に豪氣あり。近習の人に向ひて、人々のたのしむ所を尋ねられしに、小槻與五右衛門といへる者臣が樂む事二つ有り。其一つは家貧しくて奢といふ事をしらす。天より命せられし貧をたのしむよしを申す。其一つを問るゝに、是は憚る所の候とて言はず。しひて問はれしかば、謹で申しけるやう、大名に生れざるを天の冥加と存じたのしむ處なりと答へければ、その仔細を問るゝに、大名は天性かしくおはし候うても、臣下これを馬鹿にたりなし候。祿少き身は、其師や朋友あしき事を戒め諫め候故に、其身を省みて馬鹿にならず候へども、大名はさはなく候。臣たる者とかく忤らひては、身の爲よからじと存じて、其主のよき事あれば、山の如くにほめ申し、いろゝの悪しき習はしを付候ほどに、いつとなく恣になりもて行き、それよりは一言の諫をも申しがたく候。いかに聰明にても學問もなく教といふ事をしらす、善事を辨へ給ふべきやうなきゆる、馬鹿になりはて候は、口をしき事に候はずや。臣大名に生れざるを樂と存じ候は、此仔細に候と申せば、中將つくゝと聞召して、よくもいひたるかな尤至極せり。今より馬鹿に

成ざる思慮すべきよとて、賞美のあまり、即二百石の祿を増與へられけり。それより山崎嘉右衛門を尊信し、學問を嗜れ、後神公と諡せしは、此中將の御事なり。

水戸義公御事業の概略

水戸中納言光圀卿は、頼房卿の第三の子東照宮の御孫なり。寛永十年威公の嗣いまだ定まらざりしかば、嚴有院殿の仰せにて、中山備前守信吉水戸に至り、光圀卿三つに成給ひしを見て、かくと申上げて嗣に定まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀みて深く感ずる處あり。是嗣は兄の頼重立ち給はん事なるに、かく定まりつれば、長子の方に家を譲るべき志此よりして起れり。是より又學問を好み給ふの志篤し。明暦三年より大日本史を撰び始めらる。神功皇后を帝紀を翻けて后に列し、大友皇子を天子と定め、南朝を正統と立てらる。皆此君の義烈なり。寛文三年頼房卿卒去あり、葬禮僧家の法を用ひず、瑞龍山に葬り威公と諡し、廟を水戸の城中に立てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。殉死すべき士ありしに、自ら其家に至りて止めらるゝに、其理正しき故に、殉死をとまりしかば、此事聞えて、殉死天下統一統停止の旨仰出されしは、此君のゆるなり。又兄の頼重卿の子松千代綱方をしひて養嗣とせられん事を乞ひて、若聞入れられずは、世を遷るべき志なりしかば、頼重卿許諾あり。松千代の弟采女綱條をも引きとり養ひ給へり。明朝の遺民朱之瑜といひし文學ある者、清朝の粟を食せしとて、日本に渡りしを、筑後柳川の文學安東省庵其休祿の半を分けて養ひ置きしを召して師とし給へり。綱方

病によりて卒去有りしかども、弟綱條を養ひ置かれし故、卽世嗣になし給ひぬ。延寶元年孔子の堂を水戸に立て給はん爲、江戸駒込の屋敷にかりの設をなし給ふ。日本古よりの假字の文章を編みて三十卷となしたるを、天聰に達し、後西院の帝名を扶桑拾葉と賜はり、卽獻し奉り給ふ。天和二年朝鮮の使臣江戸に來り、三使進物の目錄禮儀を失せる故、三條の疑問有りしに、答ふる詞なかりしとなり。後西院の帝の勅命により鳳足といへる御税に銘を作られしかば、宸筆を下し給はりて、賞美せさせ給ふ。其御詞の中に、備武兼文絶代名士といへる句有りしを、印に彫らせられしとなり。元祿三年領國を綱條卿にゆづり給ひ、權中納言に任じ給ひしが、程なく辭表を奉りて歌に、

位山のぼるもくるし老の身はふもとの里ぞ住みよかりける

是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠り給ひしに、山莊の有さま蘆をもて葺き、門垣には蔦はひかり只竹がき一重にて、池に蓮を植ゑ西山のほとりに桃數百株あれば、川の流の橋を桃原橋と名づけ、鹿をはなち鶴をかはせ給ふによくなつきけり。瑞龍山に壽藏を設け、衣冠を埋み碑陰の銘を自ら作り給へり。久慈郡小野平村旗櫻寺に祠堂をたて、頼義義家の神主を置かせらる。又攝州淡川に楠正成の墓を修し、碑を立て、碑面に嗚呼忠臣楠子墓と自筆し、陰には舜水の撰し讃をほらせられ、又舜水の碑を瑞龍山に建てられ、其文集を輯して、門人源光因と稱し給へり。彰考館を作りて、和漢の群書をあつめられしに、遠國他郷に學士を遣はし、半帯一行の反故をも見るに隨ひ拾收め給ひけるほ

どに、色々の書ども編集有りけり。中にも禮典類聚五百卷は日本古來よりの寶典と稱すべしといへり。寛文五年領國中の淫祠三千八百こぼちすて、新地の寺院九百九十七除かれ、多珂郡にて廣野ありしに、馬を放ち牧となし給へり。地の利を盡す術に心を盡され、海參白魚昆布をひ沼が浦にまき、海に蛤をはなち、是より海物多く出づ。山には漆楮多く植ゑさせ給ひけり。元祿十三年西山に逝去あり、義公と諡せしとなり。

國初より以來の諸侯の中に、會津の神公、水戸の義公、備藩の芳烈公、三公の如きは、寔に非常の君と稱し奉るべし。神公の事詳なることをしらす。義公の一世の事跡、西山遺事に審にしるしたれば、只一二の大なることをしるせり。吾藩の芳烈公の學校を作り賢才を招き禮を以て度となし給へる、異國をいは、衛の康叔武公、燕の昭王の如き君を并せて、芳烈公に比倫すべきや。予別にしるせる物あれば、此篇には詳にせず。

渡邊數馬報讎始末の事

渡邊數馬弟源大夫が仇河合又五郎を討ちけるは、寛永十一年十一月七日の事なり。もと數馬は松平宮内少輔忠雄に仕へて、忠雄備前岡山におはしける比、寛永七年七月二十一日城の大手にてをどり興行ありけり。其夜數馬は妻の父津田豊後が方に行きけるに、河合又五郎數馬が宅に來り、こゝろ易かりしかば、源大夫と物語しけるが、いかなる故にや、主從四人にて源大夫を切殺し、又五郎は脇差の鞘



を落して行方しれず成りぬ。折節をどり見んとて群集しけるに、數馬が下部岩佐作兵衛頼ひ居しが、外のさわぎを聞き出でけるに、路次の内より刀を提げたる者に出であひ、何者なれば、士の家に刀を抜きて入りしやと詞をかけたる所に、徒目付の遠山才兵衛も來り合せ、彼者を切りとめけり。一説に、歩行の士三村孫右衛門通りかゝり、内のさわぎを聞き走り入りて是を聞き、又五郎を追つかけんとする處に、何者ともしらず、玄關に走り入るものあり。孫右衛門を見て逃げんとするを切伏せたり。これは又五郎が下人にいひ付て、源大夫にといめをさ、せんためにもどしたるなりと、後に聞えしとなり。

源大夫は深手負ひて又五郎相手なるよしひて死しぬ。豊後が方に告げければ、數馬も豊後も又五郎が父半左衛門方に行き對面すべしといへども、門を固く鎖して入り得ざりける中、に長臣荒尾志摩忠雄の近習加藤主膳かけ來りて、半左衛門は二人して受取りぬ。忠雄半左衛門をば菅權之介に預けられけり。半左衛門初は安藤對馬守重信に奉公せしが、故有りて忠雄懇にせられしに、半左衛門口論して、相手を斬り出奔して、渡邊數馬がもとに來りしを、潜にかくして祿をあたへられし身なれば、又五郎を出して腹切らすべきものと忠雄思はれしに、半左衛門は更に其志に非ずして、又五郎江戸に行きけるを、安藤治右衛門かくし置かれけり。久世三四郎、阿部四郎五郎兩人忠雄のもとに年久しく來れる人なれば、治右衛門にかくといはれけるに、治右衛門申しけるは、半左衛門を渡されなば、其まゝ又五

郎を出すべしとの事にて此旨を兩人忠雄に告ぐれども、尙も覺束なき體なれば、兩人たしかに又五郎を請取り出すべきとの起請文を忠雄に出す。さらばとて、半左衛門を江戸に召下して取りかふべしとの事に及びて、治右衛門朋輩ども申す旨あり。仲間を除くべき故、是非に及ばずと忠雄に申す。忠雄其欺く事を怒りて、忠雄一族の人々心を合せ、おし寄せて奪ひとらんと支度あり。

伊達政宗は、論するまでもなし、ふみ潰して奪ひとるより外なしといはれしとなり。

三家の御方和平の取計ひ有りけれども、いまだ事遂げず。半左衛門は池田備中守長幸のもとにあり。かゝる處に忠雄痘瘡を病みて卒去あり。弟の松平石見守輝澄同右近大夫輝興三家の御方に訴へ申す旨ありけるに、長幸も卒去ありて、半左衛門は松平阿波守忠英請取りて阿州に赴く道にて死す。安藤を始め咎を蒙り、閉門仰せ付けられけり。寛永九年七月備前因幡國替を仰せ出さる。此時數馬立退きて備前の兒島にあり。又五郎がゆくへを尋ねれども知れず。數馬が姉野荒木又右衛門大和の郡山に在けるが、又五郎が伯父河合甚左衛門も同じく郡山に有つて、暇を申して奈良に出でけるゆゑ、又五郎が行方を聞かん爲に數馬又右衛門方にゆきしに、又右衛門數馬一人しては危し、助太刀せんとて、明くる年の三月まで荒木がもとに止め置き、三月又右衛門暇を乞得て、郡山を出にけり。是は甚左衛門が悪口しけるによれりともいへり。さて數馬又右衛門は、攝州丹生の山田に妻子をあづけ置き、四月に江戸に赴き所々搜りけれども行方をしらす。甚左衛門をば時々見かけしかども、誠の仇にあらざれば、

打過ぎけるを、甚左衛門は嘲りけるとかや。かくて又丹生の山田に歸り、明くる寛永十一年大猷院殿御上京により京都に赴き、方々尋ねけれども行きあはず。また丹生の山田に歸り、其後又五郎有馬に行くと聞き、有馬にゆけども行きあはず。奈良に甚左衛門が妻子ありければ、十月朔日奈良に行きて潜にきくに、甚左衛門が方に又五郎かくれて居て、十一月六日江戸に赴くよしなれば、其夜おし寄すべきとせしが、奈良は商家の事なり、途中にて討つべしとて、數馬又右衛門主從四人甚左衛門がほとりに立明しけり。六日の朝先は甚左衛門、中は又五郎、その跡に櫻井半兵衛是は又五郎が妹姪なり。弓鐵砲の上下二十人なり。七八町ばかりもついで行くに、又五郎其日は伊賀の鳥が原といふ所に宿す。四人見知られてはと裏の道もなき所をふみ破りて、三町計も行過ぎ宿をからんとすれば、怪しみて鳥が原へ心得られざる人こそ四人宿をかりつれと告遣はす。その山を又五郎が旅宿へしらせたり。數馬も又右衛門も敵にさとられじと、夜深く出て、山ごもりして伊賀の上野小田町にしばしの宿をかり、最後の酒もりして待ちかけたり。肴はなしやといへば、是をなりともとて鱒を三つ出す。皆頭なし。數馬目出度といひて、主人に酒の價をとて金子二十兩ばかり投出し與ふれば驚きたり。是を限なれば、何のためにせんといふ處に、主人の女房かつをぶしを出す。數馬心の付たるよとていたゞきけり。又右衛門著たる羽織を脱ぎて主人に與へ、庭に飛出でてをどり上りくしたる有様、すくやかなる男のけふを限りと思ふけしきあらはれて、只鬼などもかくあらんと見えしと、人後に語りけり。

七日の朝又五郎鳥が原を出て上野にかゝる。又五郎は思ふ仇なれば、數馬討ちとむべし。甚左衛門は又右衛門立向ふべし。半兵衛は又右衛門が若黨武右衛門數馬が若黨孫右衛門兩人かゝり合べしと相定め、間近くなりければ、又右衛門眞先なる甚左衛門に、詞をかけ飛びかゝり、一説に、又右衛門いかに甚左衛門、日比のどうだぬきを見んといひも終らず、一刀に切るといへり。馬より切つて落す。甚左衛門刀半抽きかけしを二の太刀にてうち留めたり。半兵衛は槍の上手と聞えしかば、槍をとらせず。馬より下んとする處を、武右衛門一太刀切りたりけれども、あさ手にており立つたり。從者槍おつとり、半弓をも射かけ、透間なく切つてかゝりしかば、二人爰を最後と相働さける所に、又右衛門かけ來りて多勢を切まくり、半兵衛に渡り合ひ、終に切伏せたり。此時又右衛門刀を打折りけり。其刀伊賀守金道が作なりけるとぞ。數馬、又五郎と切合る處に、又右衛門は從者を追つちらしかけ寄りて、數馬よくせよ助太刀はすまじきぞ。かなひがたくばかはらんと詞をかければ、

一説に、又五郎がうしろへまはるといへり。

數馬飛込んで、又五郎を討ちとめたり。かゝる處に、藤堂高次の士彦坂嘉兵衛上野に在りけるが、數馬が親類なりしかばかけ來る。其外上野の士あまた集り、數馬又右衛門主從とも嘉兵衛方に引きとりぬ。又五郎其左衛門は其場に死し、半兵衛は息かゝり居けるを引取りたれば、程なく死す。數馬十三

所手負、武右衛門痛手にて其夜半に死す。孫右衛門手負十所おひたり。斯と藤堂家に聞えて、三人は嘉兵衛方にしばらく有りしが、藤堂式部がもとに年月を送る。式部死して藤堂出雲に預けらる。寛永十五年六月江戸より仰出さる、旨ありて、數馬又右衛門も藤堂家に下し賜はりけり。かくて江戸の彦坂平六郎數馬が一族たりしがゆる、藤堂家に申し乞ひて、松平勝五郎光仲のもとにもらひ賜はりたり。因幡に赴くにより、同年八月七日上野を出る。藤堂玄蕃弓五張組の騎士二十人、玄蕃が騎士五人藤堂出雲外に母衣の者組の騎士四十人、彦坂嘉兵衛鐵砲頭三人、鐵砲九十挺、弓頭二人、弓四十張、田中源兵衛歩行の士二十人引續きて伏見因幡の屋敷に送られしかば、請取の爲に、因幡の士横川治大夫父子鐵砲二十挺、渡邊越中鐵砲二十挺、伊吹源太兵衛父子鐵砲三十挺、宮脇平太左衛門弓十張、伊賀の者五人、片上彌二兵衛父子鐵砲二十挺、松尾惣左衛門父子伊賀の者六人、福田權兵衛歩行の士二十人、宮脇徳兵衛田中六郎右衛門其外弓の者二十人出逢ひて因州に赴く。伏見より川舟にて下り、海上の船は備前芳烈公のもとより出し給ひ、松平輝澄の方よりも船を出し、大小三十艘播州坂越より陸路を經、地主より馳走の士出迎ひて、草深き所をからせ、道筋山々遠見を出し、夜は箭をたかせ、鳥取の城まで三とまりにて引きとらせられけり。仇討ちける時、數馬二十七、又右衛門三十、河合武右衛門四十、岩本孫右衛門三十八歳とぞ。

## 多賀孫左衛門同忠大夫仇撃の事

京極若狹守忠高雲州松江に有し時、出雲隠岐二州の主なり其の士に箕浦備後、内藤兵庫、多賀孫左衛門といへる者あり。備後が末子與四郎といひしは容貌美麗にて、兵庫が子八左衛門と情交淺からず。孫左衛門が子孫兵衛斯ともしらで與四郎に心をかけたりしに、曾て無二にいひかはしたる者ありと答ふ。それまでにてはうはのそらなり、名を聞きてやみなんと重ねていひしかば、名を聞かばもし其の人に害やせん、密に八左衛門に告げて、孫兵衛備後の宅に時々來ること幸なれとて、或夜與四郎が部屋に呼入れ懇にもてなし、酔の後八左衛門出逢ひて孫兵衛をさし殺し、とどめを刺し足のうらを割きて屍を城下の鹽津川にすてたり、夜中しる人なし。鹽津川の下に屍の流れ寄りたるを見て、誰れがしわざともしられざれども、自然に箕浦内藤に指す人も有りければ、孫左衛門聞きて證據なしと雖も、かゝる類は天命にて虚説なき物なり、僉議を遂げられよ。沙汰に及ばずば、備後兵庫を相手なりと訟に及ぶ。忠高目付を以て密に聞けば果して實なり。多賀が訟理なれば、棄て置き難けれども、内藤箕浦、兩人忠ある舊臣なるゆゑ立退けとひそかに知らせて、箕浦父子、内藤八左衛門雲州を出奔しけり。孫兵衛に兩人の弟あり、此の時十三歳に十一歳なり。兄は後父の名をもて孫左衛門といひ弟は忠大夫といへり。忠高卒去刑部少輔忠知に六萬石賜はり、播州立野へ所替あり。多賀其の比京極の家を出て兄の仇を討んとす。されども、幼かりし時の事故内藤を見知らず。父孫左衛門が介抱し置きたる浪人間市大夫、恩を報せん事此時なりとて附従ふ。孫兵衛が妹の子三田右衛門八も相加はれり。備後は土井大炊頭に奉行

しけるが年老いて死す。與四郎は二十にて病死す。八左衛門は小笠原信濃守忠修に奉行し祿五百石與へられ、仇ある故に他所へ遣されず、勤勞もなく只あらん事快からず、人並の奉公を許されず永く暇を給れといふによりて、江戸の供の列に入られたり。若し仇に討たれなばとて、小笠原家高天神にて走廻りよかりし者の子、其外徒の者六人、内藤に自然の事あらば助けよとて附け置かれぬ。或時内藤、土井大炊頭のもとへ使者にゆく。多賀聞きて歸るさに途中に出迎へたり。八左衛門人數多く引きつれ馬上にて來るを、問あれこそ内藤よとをしふ。若し打ち損じたらんに、馬上にて馳せぬけんも計りがたしとて、孫左衛門市大夫前より、忠大夫右衛門八後よりかゝり、其間近くなりて、孫左衛門編笠を脱ぎ覚えはなきか八左衛門と詞をかけ、頭を額へかけて切る。忠大夫二尺七寸の刀をもて飛びかかり切る。さられてそり様にふみ出したる鏡、忠大夫が拳に當りて指の骨白く出でたりとなん。さて内藤落つる處を孫左衛門たゝみかけて切り、忠大夫馬の下をくゞりて切りとめたり。孫左衛門始向ふより太刀付けしかば、内藤が從者幾刀となく切りけれども、さのみ深手ならねば散々に切り合ひたるを、内藤が從者薙刀をもて右の肩より腕かけて切りしかば、左の手に刀を取り直したる處を薙刀にて袖口を左右へさし貫く。孫左衛門が刀間近くなりしかば薙刀を捨てたり。薙刀はかせになりぬ、數ヶ所の疵は蒙りつ、遂に倒れて立上らず。忠大夫、右衛門八、市大夫、内藤が從者あまた切り伏せ追拂ひ、忠大夫かけ寄りて孫左衛門が頭を抱き如何と問ひければ、思ふ仇討ちおほせぬれば思ひおく事なしと

て息絶えたり。内藤を始として其場に七人、一二町逃げて倒れ死せる者二人、多賀兄弟、三田、間、四人が手に掛けて都べて九人を切り殺しけり。忠大夫疵三ヶ所、三田、間も手負ぬれども二人とも死なす。孫左衛門が面に編笠をかけ息つき居たるに、あたりの人出合ひ奉行所へ連れて行き、御法の帳面に記して討たざる趣を尋ねらる。忠大夫もとより承り及びたる事ながら、萬一それゆるに事もれて討ちもらさんも計りがたし、本望とげなば何の身命のをしかるべき、御法に背きたりとして刑罰にあふとも附届けに及ぶべからずと、必死に兄弟とも思ひ極めて候ふと少しも屈せず申し述ぶる。又三田は近き親しみなり、間が助太刀はいかがと問はる。間承り浪人なりしを、多賀が恩を以て年月を送りぬ、孫兵衛殺されし時兩人の弟幼少にて仇を見知らず候ふ故、手引きして討たせ候。多賀が多年の恩を報い候へば、いかに御咎を蒙り候ふとも、いとひ申さぬ志にて候と申述ぶる。何れも申處尤至極せりとて歸されけり。孫左衛門卅三歳、忠大夫卅一歳、右衛門八十八歳、市大夫□孫兵衛死後廿一年の後、寛永十八年辛巳江戸大炊殿橋の敵討と世にいへるは是れなり。其の比土井大炊頭の邸に近きを以て一橋を大炊殿橋といひけるとなり。多賀忠大夫後に難栖と號す。右衛門八後茂左衛門といひ、老年の後茂入と稱し、正徳二年九十歳餘にて讃州丸龜に病死す。此始終は忠大夫が物語したるを書き記しぬるを傳へてこゝに記せり。

## 大久保家の婢女主の仇を撃ちし事